明石城武家屋敷跡
あかしじょうぶけやしきあと

明石城巽櫓と城下

明石城本丸からみた明石市街地（後方は明石海峡と淡路島）

東中ノ町地区全景（東から）

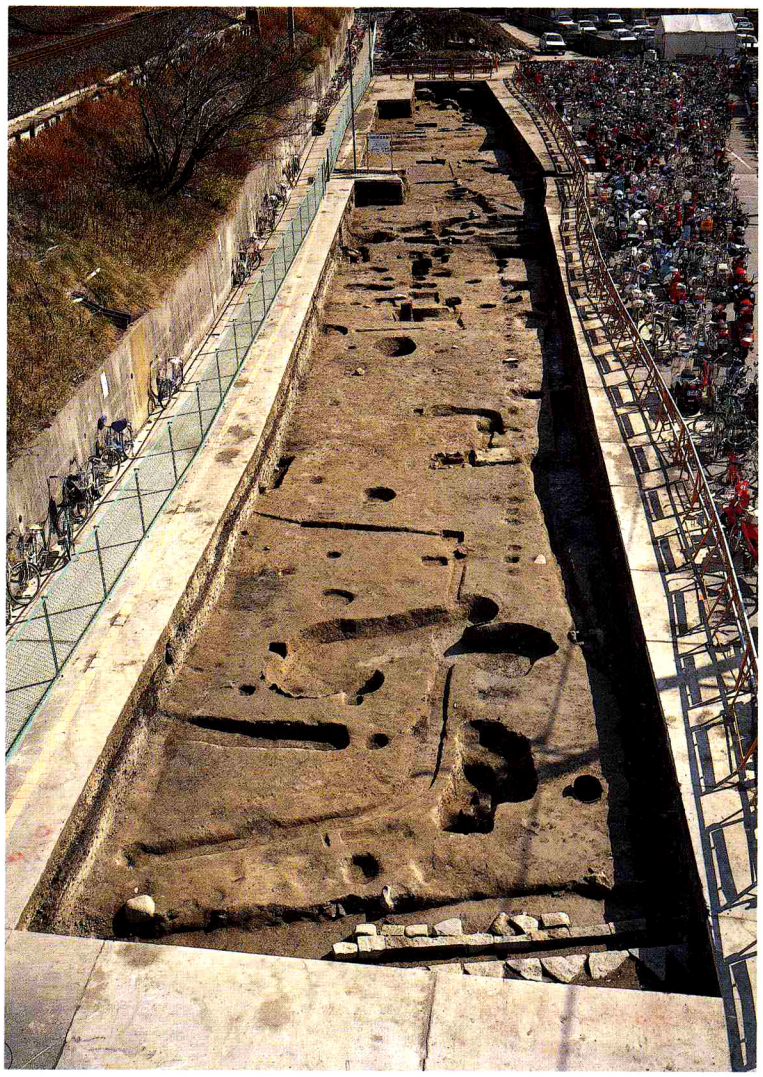
東中ノ町地区　SE3001（井戸）

東中ノ町地区　SK2002（焼土坑）

東中ノ町地区　SW2001（上水道）

中ノ町Ａ地区全景（西から）

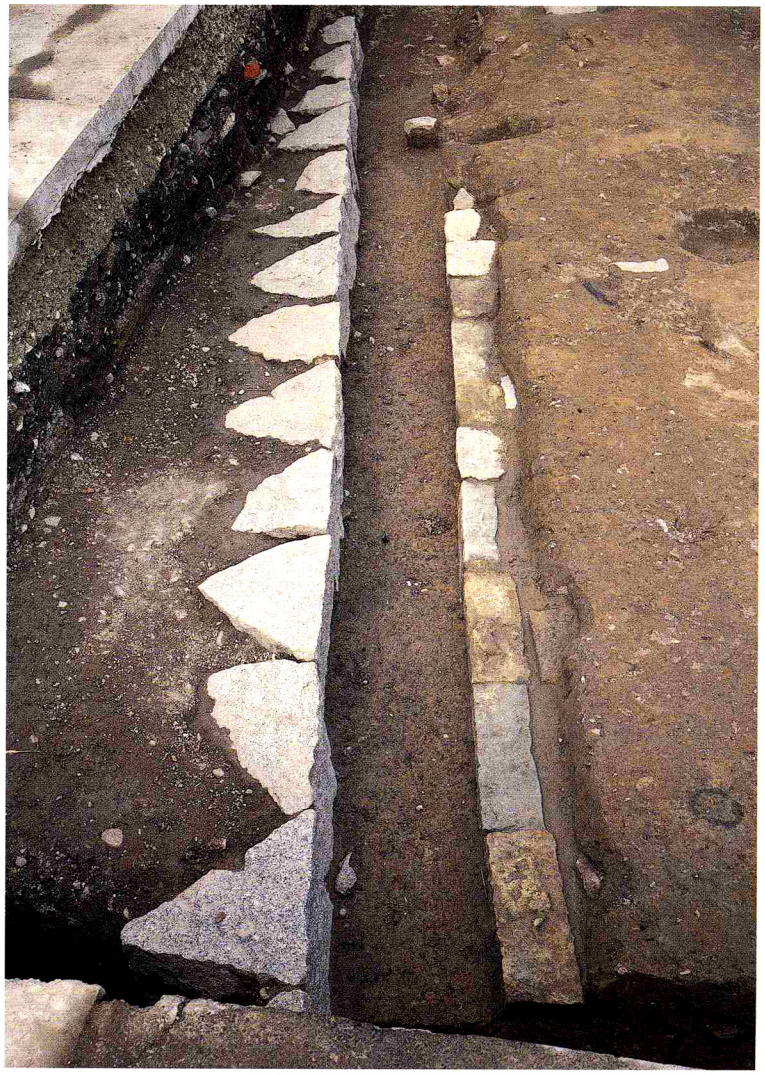
中ノ町Ａ地区　SE2101（井戸）



西中ノ町地区全景（西から）

西中ノ町地区　SK2504（水琴窟）

西中ノ町地区　SG3501（池）



西中ノ町地区　SD2503（道路側溝）

肥前系磁器

陶器（唐津）

有田鉢

青花皿

唐津皿

唐津壺

鼈甲櫛・簪

把手

例　　言

1．本書は山陽電鉄本線連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査は兵庫県加古川土木事務所の委託により、兵庫県教育委員会が実施した。

3．発掘調査は昭和61年度～63年度の６次にわたって実施した。

4．それぞれの発掘調査の担当者は本文中に記載した。

5．本書の執筆分担は目次に示したとおりである。

6．本書の作成に際し、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏には陶磁器の年代及び産地比定についての御教示をいただいた。また、付表は村上泰樹が作成したものを、大橋氏に校閲していただいた。

7．京都大学名誉教授の島地謙氏、奈良国立文化財研究所の松井章氏、元興寺文化財研究所の北野信彦氏にはそれぞれ出土品の分析をお願いし、玉稿を戴いた。

8．本書に示した座標は国土座標（第Ⅴ系）を使用したもので、方位はすべて座標北を、標高は東京湾平均海水準(T.P.)で示している。

9．本書の編集は、和田早芳子の協力により山下史朗が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……（山下史朗）1
1．明石城の沿革……1
2．これまでの調査……1
3．調査に至る経過……2
4．発掘調査の経過……3
5．整理作業……4
Ⅱ　遺跡をとりまく環境……（山　下）7
1．地理的環境……7
2．歴史的環境……9
Ⅲ　確認調査……（山　下）11
Ⅳ　東中ノ町地区……（山　下）19
1．概要……19
2．層序……19
3．遺構……24
Ⅴ　中ノ町地区……37
1．A地区……（山　下）37
2．B地区……（長谷川眞）46
3．C地区……（村上泰樹）53
4．D地区……（山　下）56
Ⅵ　西中ノ町地区……（山　下）58
1．概要……58
2．層序……58
3．遺構……59
Ⅶ　出土遺物……75
1．土器類……（村　上）75
2．木製品……（甲斐昭光）94
3．石製品……（久保弘幸）100
4．金属製品……（山　下）102
5．貝類……（山　下）102
6．明石城武家屋敷跡出土木製品の樹種……（島地　謙）103
7．明石城武家屋敷跡出土漆器資料の制作技法……（北野信彦）121
8．明石城武家屋敷跡出土の動物遺存体……（松井　章・内山純蔵）132
Ⅷ　おわりに……（山　下）139

挿図目次

第１図　明石の位置……0
第２図　明治19年の明石（明石・大久保町・前開村・林村）…1
第３図　調査地区名称……2
第４図　明石城周辺の地形……6
第５図　明石城周辺の主要遺跡……8
第６図　東中ノ町地区調査区設定図……12
第７図　中ノ町地区調査区設定図……12
第８図　西中ノ町地区調査区設定図……13
第９図　東中ノ町地区１トレンチ東外堀断面図……14
第10図　東中ノ町地区２トレンチ道路跡……14
第11図　東中ノ町駐車場地区確認調査トレンチ設定図……15
第12図　東中ノ町地区Ａトレンチ南壁土層断面図…16
第13図　東中ノ町地区Ｂ・Ｃトレンチ土層断面図…17
第14図　西外堀・土塁跡断面図……18
第15図　東中ノ町地区地区割図……20
第16図　東中ノ町地区平面図（１）……21
第17図　東中ノ町地区平面図（２）……22
第18図　東中ノ町地区北壁断面図……23
第19図　東中ノ町地区下層断面図……24
第20図　ＳＤ3001・2001……25
第21図　ＳＤ2012・2013……27
第22図　ＳＥ3001……28
第23図　ＳＧ2001……29
第24図　ＳＧ2002……30
第25図　ＳＷ2001……32
第26図　ＳＫ2002……33
第27図　ＳＤ3011とＳＰ2001……34
第28図　ＳＷ2002……35
第29図　ＳＫ2011……36
第30図　中ノ町Ａ地区地区割図……37
第31図　中ノ町Ａ地区南壁土層断面図……38
第32図　中ノ町Ａ地区平面図……39
第33図　中ノ町Ａ地区南壁下層断面図……40
第34図　屋敷境溝と塀跡……42
第35図　ＳＧ2101……43
第36図　ＳＥ2101……44
第37図　中ノ町Ｂ地区地区割図……46
第38図　中ノ町Ｂ地区平面図(上層)と西壁断面図…48
第39図　中ノ町Ｂ地区平面図（下層）と北・東・南壁断面図……49
第40図　ＳＤ2201と堰……51
第41図　中ノ町Ｃ地区地区割図……53
第42図　中ノ町Ｃ地区平面図・断面図……54
第43図　中ノ町Ｄ地区地区割図……56
第44図　中ノ町Ｄ地区平面図・断面図……57
第45図　西中ノ町１区地区割図……58
第46図　西中ノ町２・３区地区割図……59
第47図　西中ノ町１区南壁断面図……60
第48図　西中ノ町１区平面図（左：上層，右：下層）……61
第49図　西中ノ町２区南壁断面図（Ｃ－Ｄ間）……62
第50図　西中ノ町３区南壁断面図（Ｄ－Ｅ間）……63
第51図　西中ノ町２・３区上層平面図……64
第52図　西中ノ町２・３区下層平面図……65
第53図　西中ノ町２区の屋敷境溝と塀跡……66
第54図　ＳＦ2501と側溝……67
第55図　ＳＧ3501……69
第56図　ＳＧ2501……70
第57図　西中ノ町３区の円形土坑群……71
第58図　ＳＫ2503……73
第59図　ＳＫ2504……74
第60図　皿の法量分布……78
第61図　肥前陶磁の出土状況からみた遺構の年代……93
第62図　硯各部の名称と計測位置……100
第63図　木製品顕微鏡写真１……111
第64図　木製品顕微鏡写真２……113
第65図　木製品顕微鏡写真３……115
第66図　木製品顕微鏡写真４……117
第67図　木製品顕微鏡写真５……119
第68図　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法……124
第69図　サビ下地のＸ線分析結果……125
第70図　漆膜面の塗り構造（写真）……125
第71図　漆塗り構造の分類……126
第72図　赤色系漆（ベンガラ漆）のＸ線分析結果…127
第73図　赤色系漆（朱漆）のＸ線分析結果……127
第74図　緑色系漆のＸ線分析結果（硫化ヒ素）……127
第75図　金粉状蒔絵装飾（金彩）のＸ線分析結果…127
第76図　銀粉状装飾（銀彩）のＸ線分析結果……127
第77図　動物遺存体写真１……137
第78図　動物遺存体写真２……138
第79図　動物遺存体写真３……139
第80図　動物遺存体写真４……140
第81図　明石城付近の微地形図……141
第82図　明石城武家屋敷跡東西断面図……142
第83図　明治16年頃の土地利用……143
第84図　調査地周辺の屋敷割概念図……144
第85図　明石城武家屋敷割復原図（幕末）……145
第86図　上げ枡（文化元年彦根城水道絵図）……146

表目次

表1　山陽電車高架事業関連発掘調査一覧表 …… 5
表2　明石城周辺主要遺跡一覧表 …… 9
表3　土師質皿器形分類表 ……76
表4　土師質鍋器形分類表 ……79
表5　無釉陶器皿器形分類表 ……81
表6　施釉陶器皿器形分類表 ……81
表7　擂鉢器形分類表 ……83
表8　明石城出土陶磁器変遷表 ……91
表9　地区別・器種別出土木製品一覧表 ……94
表10　明石城武家屋敷跡出土木製品の樹種……108
表11　樹種別の製品一覧表……110
表12　製品別の樹種一覧表……110
表13　出土漆器資料観察表……122
表14　ろくろ挽き物の用材分類一覧表……124
表15-1　年代別出土漆器資料の髹漆技法……128
表15-2　年代別出土漆器資料の樹種……129
表16-1　地区別出土漆器資料の髹漆技法……130
表16-2　地区別出土漆器資料の樹種……130
表17　明石城跡出土動物遺存体種名表……133
表18　明石城跡出土動物遺存体一覧表……134

図面目次

図面1　1～25
図面2　26～31
図面3　32～41
図面4　42～62
図面5　63～76
図面6　77～81
図面7　82～87
図面8　88～90
図面9　91～101
図面10　102～117
図面11　118～141
図面12　142～164
図面13　165～180
図面14　181～193
図面15　194～208
図面16　209～217
図面17　218～232
図面18　233～250
図面19　251～255
図面20　256～258
図面21　259～280
図面22　281～290
図面23　291～315
図面24　316～333
図面25　334～354
図面26　355～373
図面27　374～380
図面28　381～387
図面29　388～417
図面30　418～423
図面31　424～442
図面32　443～450
図面33　452～460
図面34　461～478
図面35　479～497
図面36　498～504
図面37　505～514
図面38　515～530
図面39　531～552
図面40　553～556
図面41　557～565
図面42　566～581
図面43　582～590
図面44　591～606
図面45　607～613
図面46　614～619
図面47　620～642
図面48　643～665
図面49　666～670
図面50　671～673
図面51　674～678
図面52　679～704
図面53　705～714
図面54　715～719
図面55　720～728
図面56　729～743
図面57　744～760
図面58　761～767
図面59　768～796
図面60　797～809
図面61　810～823
図面62　824～825
図面63　826～828
図面64　829～851
図面65　852～863
図面66　864～875
図面67　876～899
図面68　900～909
図面69　910～923
図面70　924～930
図面71　931～939
図面72　940～943
図面73　944～945
図面74　946～957
図面75　958～963
図面76　964～985
図面77　986～996
図面78　997～1004
図面79　1005～1012
図面80　1013～1020
図面81　1021～1026
図面82　1027～1032
図面83　1033～1038
図面84　1039～1060
図面85　1061～1076
図面86　W1～W21
図面87　W22～W28
図面88　W29～W35
図面89　W36～W41
図面90　W42～W56
図面91　W57～W67
図面92　W69～W73
図面93　M1～M13
図面94　M14～M29
図面95　M30～M36
図面96　M37～M44
図面97　M45～M51
図面98　M52～M82
図面99　S1～S10
図面100　S11～S14
図面101　S15～S16

図版目次

図版１　明石城跡航空写真（1980年撮影）

東中ノ町地区

図版２　１．発掘調査前の東中ノ町地区
　　２．東中ノ町地区全景と中ノ町地区を望む
図版３　１．東中ノ町地区全景（東から）
　　２．東中ノ町地区全景（東から）
図版４　１．ＳＢ3001（建物跡）
　　２．ＳＤ2012（石組溝）とＳＤ2013
　　３．ＳＤ2013断面
図版５　１．ＳＥ3001検出状態
　　２．ＳＥ3001断面
図版６　１．ＳＧ2001（池状遺構全景）
　　２．ＳＧ2001
　　３．ＳＧ2001の水位調節施設
図版７　１．ＳＷ1001（水道）
　　２．ＳＷ2001（水道）
　　３．ＳＷ2001の
図版８　１．ＳＫ2001（漆喰土坑）と
　　ＳＫ2002（焼土坑）
　　２．ＳＫ2002埋土断面
　　３．ＳＫ2002
図版９　１．ＳＰ2001（排水用土管）
　　２．ＳＰ2001の漆喰塗り集水枡
図版10　１．ＳＧ2002（池状遺構）
　　２．ＳＫ3001（埋桶）
　　３．ＳＫ2011
図版11　１．ＳＤ2002と土層断面
　　２．７トレンチ付近地層断面
　　３．下層の地層（Ｄ２－Ｄ４間）

中ノ町Ａ地区

図版12　１．中ノ町Ａ地区から東中ノ町地区を望む
　　２．Ａ地区全景（西から）
図版13　１．屋敷境溝と築地跡
　　２．ＳＡ3102（築地基礎）
図版14　１．Ａ地区西半部
　　２．ＳＸ2101（石敷遺構）
図版15　１．ＳＥ2101（井戸）
　　２．ＳＥ2102（井戸）
　　３．ＳＫ2124
図版16　１．ＳＧ2101（池）
　　２．ＳＧ2101（池）

中ノ町Ｂ地区

図版17　１．Ｂ地区上層全景（西から）
　　２．Ｂ地区下層全景（西から）
図版18　１．ＳＤ2201（水路）
　　２．ＳＤ2201
　　３．ＳＤ2201の堰
図版19　１．ＳＡ2201（石列）
　　２．ＳＤ3202
　　３．下層遺構面（北から）

中ノ町Ｃ地区

図版20　１．２トレンチ（南から）
　　２．４トレンチ（西から）
　　３．１トレンチ南半分（南から）

中ノ町Ｄ地区

図版21　１．３トレンチ（北から）
　　２．２トレンチ（北から）
　　３．４トレンチ（北から）
　　４．４トレンチ（南から）
図版22　１．１トレンチ（北から）
　　２．５トレンチ（東から）
　　３．５トレンチ北壁地層断面

西中ノ町地区

図版23　１．西中ノ町地区全景（東から）
　　２．西中ノ町地区全景（西から）
　　３．西中ノ町地区から西外堀・明石川方面を
　　望む
図版24　西中ノ町１区上層遺構面（東から）
図版25　西中ノ町１区下層遺構面全景（東から）
図版26　１．ＳＤ3501（屋敷境溝）
　　２．ＳＤ3501埋土断面

図版27　1．ＳＫ2503
2．ＳＫ2503
3．ＳＫ2502
図版28　1．ＳＫ2504（水琴窟）
2．ＳＫ2504（水琴窟）
3．ＳＧ3501（池状遺構）
図版29　西中ノ町２・３区全景（東から）
図版30　1．西中ノ町から東方を望む
2．西中ノ町２・３区全景（西から）
図版31　1．西中ノ町２区（東から）
2．ＳＤ2501（屋敷境溝）
3．ＳＡ2501（築地跡）
図版32　1．ＳＢ2503（石列）
2．ＳＧ2501（池）
図版33　1．円形土坑群（西から）
2．円形土坑群（北から）
図版34　1．ＳＫ3508
2．ＳＫ3528とＳＤ3505
図版35　1．ＳＤ2503（道路側溝）上層
2．ＳＤ2503（道路側溝）下層
3．ＳＤ3503
図版36　1．ＳＤ2503の石組
2．ＳＤ2503の石組
図版37　1．ＳＤ2503・ＳＤ3503断面
2．ＳＤ3503
図版38　1．ＳＦ2501とＳＤ2504上層
2．ＳＦ2501とＳＤ2504下層

確認調査

図版39　1．東外堀跡断面（西から）
2．東中ノ町地区Ｃトレンチで検出された石組遺構（ＳＧ2002）
3．同　石組溝（ＳＤ2012）
図版40　1．東中ノ町地区Ａトレンチ南壁断面
2．　同　上
3．　同　上
図版41　1．東中ノ町地区２トレンチの道路跡（ＳＦ2001）
2．西外堀の落ち込み
3．西外堀の土留め

遺物図版

土器類

東中ノ町地区

図版42　ＳＤ2002
図版43　ＳＤ2002
図版44　ＳＤ2002
図版45　ＳＤ2002
図版46　ＳＤ2002
図版47　ＳＤ2002
図版48　ＳＤ2002
図版49　ＳＤ2002
図版50　ＳＤ3001／ＳＤ2012
図版51　ＳＤ2012／ＳＤ2003／ＳＤ3004
図版52　ＳＤ2003／ＳＤ3002
図版53　ＳＤ2013／ＳＤ2002
図版54　ＳＤ2013
図版55　ＳＤ2013
図版56　ＳＤ3011／ＳＥ3001
図版57　ＳＧ2002
図版58　ＳＧ2001
図版59　ＳＧ2001
図版60　その他
図版61　土管

中ノ町地区

図版62　ＳＤ3101
図版63　ＳＤ3101
図版64　ＳＤ3101
図版65　ＳＤ3101
図版66　ＳＤ2102
図版67　ＳＤ2102
図版68　ＳＤ2102／ＳＥ2101
図版69　ＳＥ2102
図版70　ＳＥ2102
図版71　ＳＥ2102／ＳＧ2101
図版72　ＳＧ2101
図版73　ＳＧ2101

図版74　ＳＫ2124
図版75　ＳＫ2124／ＳＫ2159
図版76　ＳＤ2201／ＳＤ3201／ＳＤ3202
図版77　ＳＤ3202
図版78　ＳＤ3202
図版79　ＳＤ3202
図版80　ＳＤ3202
図版81　ＳＫ3208
図版82　ＳＧ3201
図版83　ＳＧ3201
図版84　ＳＸ3202／ＳＫ3201／ＳＫ2159
図版85　ＳＤ2321
図版86　ＳＤ2321／ＳＤ2310
図版87　ＳＤ2310
図版88　ＳＤ2305／ＳＤ2404／ＳＫ2417

西中ノ町地区

図版89　ＳＤ3501
図版90　ＳＤ3501
図版91　ＳＤ3501
図版92　ＳＤ3501
図版93　ＳＤ2501
図版94　ＳＤ2501
図版95　ＳＤ2502／ＳＧ3501／ＳＫ2503
図版96　ＳＫ2501
図版97　ＳＫ2502
図版98　ＳＫ2502
図版99　ＳＫ2502
図版100　ＳＫ2502
図版101　ＳＧ2501／ＳＤ2505
図版102　ＳＤ3505
図版103　ＳＫ3506
図版104　ＳＫ3506／ＳＫ3536／ＳＫ3528
図版105　ＳＫ3518
図版106　ＳＫ3533／ＳＫ3534
図版107　ＳＫ3508／ＳＫ2505
図版108　ＳＫ2505／ＳＫ3523／ＳＫ2506

その他

図版109　人形・玩具類・土錘
図版110　玩具類・土錘・へら／須恵器・弥生土器
図版111　硝子瓶
図版112　軒瓦
図版113　汽車土瓶・猪口

木製品

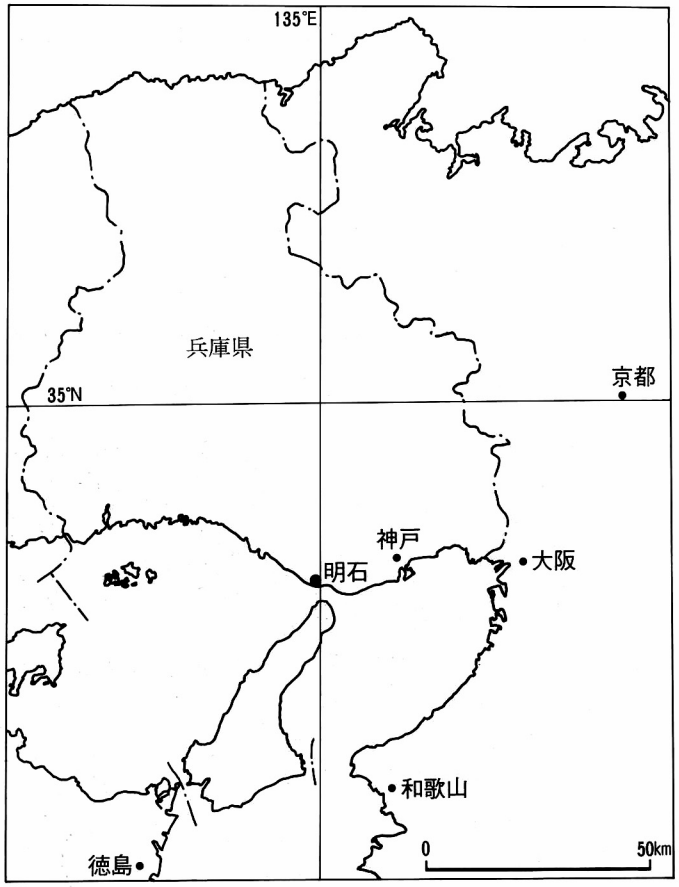
図版114　漆器
図版115　下駄
図版116　下駄
図版117　下駄
図版118　その他の木製品
図版119　水道管継手

金属製品

図版120
図版121
図版122
図版123
図版124
図版125　銭貨
図版126　銭貨

石製品

図版127　硯
図版128　石臼・砥石



第１図　明石の位置

Ⅰ　はじめに

1．明石城の沿革

大坂夏の陣後の西国支配の要として明石の地を重要視した幕府は、西国将軍と呼ばれた池田輝政の没後、後嗣の利隆もなくなると元和３年（1617）幼少の光政を鳥取に転封し、徳川の重臣本田忠政を姫路に、忠政の女婿小笠原忠真を明石に封じた。将軍秀忠は直ちに新城の築城を命じ、本田忠政の監督のもと幕府の全面的なバックアップにより明石城は築かれた。築城にあたっては、取り壊された伏見城の残材を貰い受け、また、船上・三木・高砂の諸城を取り壊して作事にあたったという。

明治維新後は紆余曲折の末、公園として整備され、兵庫県立の明石公園として今日に至っている。

2．これまでの調査

このように、県下有数の都市公園として市民に親しまれてきた明石城跡に発掘調査のメスが入るのは、昭和52年度のことである。兵庫県土木部は「明石城都市緑化植物園」構想による明石公園の再整備を計画したが、現状での保存を望む県教育委員会とで協議した結果、整備箇所の発掘調査を実施して、その成果をできるだけ活かした環境整備を行うこと

第２図　明治19年の明石（明石・大久保町・前開村・林村）

で合意した。こうして、昭和52年度、53年度、54年度にかけて本丸、二の丸、東の丸、稲荷郭、桜堀周辺の発掘調査が実施されたこの成果は『明石城』調査報告として刊行されている。[1)]

また、昭和60年２月には、雨水管敷設工事に伴い三ノ曲輪の発掘調査を実施し、その成果は『明石城跡Ⅱ』として報告されている。[2)] この他にも、公園整備に伴い小規模ながら調査が実施されている。

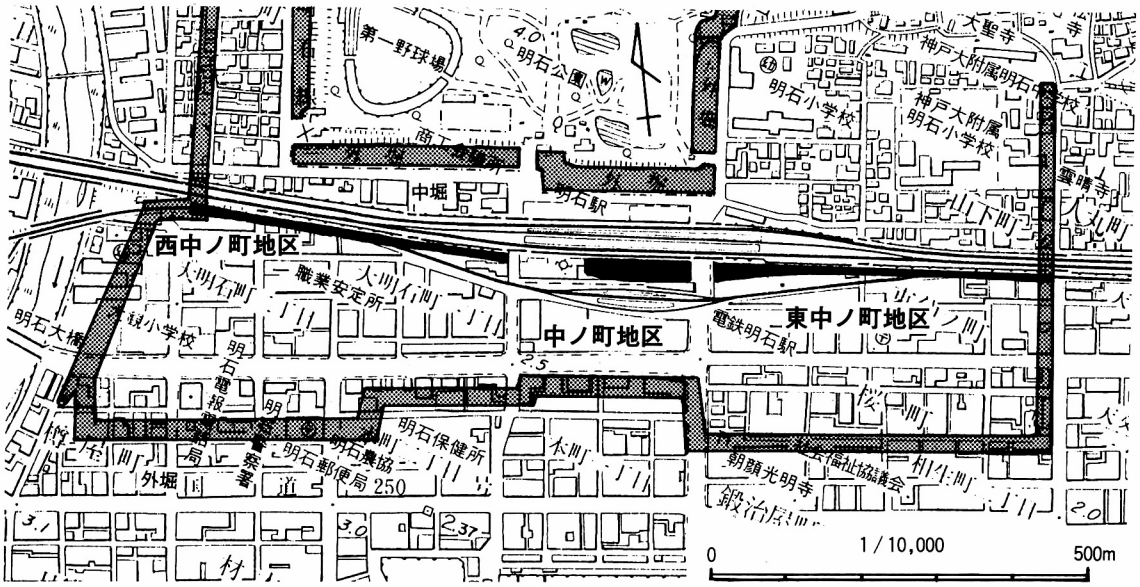
このように、明石城跡関連の発掘調査は、昭和60年度までは、現在明石公園となっている旧城内の調査に限られていたのである。

３．調査に至る経過

昭和60年度に、市街地再開発の一貫として、明石市域における南北交通を遮断する山陽電鉄の高架工事が計画された。このうち、黒橋～明石駅間については、ＪＲ山陽本線に南接する現軌道を一旦南側に仮線を敷設して移し、本線の建設を進める計画であった。このため、明石市教育委員会が事前の確認調査を実施することになり、昭和60年11月４日から黒橋～遊園地間（680m）の調査が実施された。昭和61年には第２次の調査として、遊園地線～東仲ノ町の確認調査が実施され、外堀跡や道路跡など初めて明石城関連の遺構が確認されている。また、翌昭和61年度になって、昭和61年５月21日～７月８日にかけて東仲ノ町に所在する旧明石市立国鉄明石駅前駐車場地区の確認調査が実施され、江戸時代の遺物が出土したが、いずれも明確な遺構が検出されるまでには至らなかった。

当該地一帯は、旧明石城の武家屋敷地であり、発掘調査の進んでいる姫路城跡などの例でも、良好な遺構が発見されているところから、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課では、駅前駐車場地区について第２次の確認調査を実施して、遺構の有無とその範囲・性格などを明らかにすることとした。

駅前駐車場地区の第２次確認調査は、昭和61年８月４日～８月13日までの８日間実施し



第３図　調査地区名称

た。この調査では、点的な調査では、近世明石城の遺構や地層の確認が難しいために、トレンチによる調査を実施した。その結果、２面にわたる明石城関連の溝や石組みなどの遺構や遺物と、さらに下層には中世の水田面が存在することが初めて確認された。このため、当該地区については全面調査を実施することとなった。

４．発掘調査の経過

東中ノ町地区

東仲ノ町の駅前駐車場地区の発掘調査は、昭和61年９月８日から始めた。発掘残土処理の都合上、東部トレンチ調査部を先行して調査し、10月４日には、第１回の現地説明会を実施したところ、およそ300名の見学者があった。ひきつづき西半部の調査に移り、11月１日には第２回目の現地説明会を実施し、約500名の一般見学者があった。明石駅前という好立地にあるとはいえ、予想以上の反響があり、遺跡調査への関心の高さがうかがえた。11月15日には、発掘調査を終えた。

西中ノ町地区

発掘調査は、ひきつづき用地買収の進んでいる大明石町１丁目に所在する旧神姫バス車庫跡地の確認調査を実施することになった。確認調査は昭和61年11月24日より始め、６本のトレンチを設定し、全てのトレンチで武家屋敷関連の遺構が検出されたため、ひきつづき全面調査を実施することとなった。また、合わせて大明石14号線以西、明石川までの本線南側の仮線部の確認調査を実施した。合計10箇所の試掘坑を設定し、一部で遺構が検出された。この調査は、鉄道と民家に挟まれた幅狭い地区であるために大規模な調査が実施できないために全面調査は行わないこととした。ただし、№10では堀状の落ち込みを検出したために、民家の立ち退きが完了した翌昭和62年度にトレンチ掘りによる堀と土塁の確認調査を実施した。

西中ノ町地区の全面調査は昭和61年12月11日より開始し、昭和62年２月26日に完了した。昭和62年２月14日には現地説明会を実施し、およそ300名の見学者があった。

中ノ町地区

駅前広場に当たる中ノ町地区は、東から花壇地区、タクシー乗り場地区、駅前広場地区に分かれる。場所が場所だけに人通りは多く、タクシー等の出入りが頻繁で、一度には調査ができないため、東からＡ～Ｄの４地区に分けて調査することになった。

最初に調査を実施したのは最も西側の駅前広場（Ｄ地区）である。この地区は国鉄（現ＪＲ）の所有地で、事業主体は区分地上権のみ所有するために工事基礎範囲のみを発掘調査対象地とすることとなり、トレンチ調査を行うにとどまった。発掘調査は昭和62年２月27日から３月７日にかけて実施した。

翌昭和62年度には駅前花壇地区（Ａ地区）の調査を実施した。

ひきつづき、タクシー乗り場地区のうち西半部（Ｃ地区）を昭和62年９月11日から９月22

日にかけて実施した。この地区もD地区と同様の理由でトレンチ調査としている。

残るB地区の発掘調査は、工事の進捗状況に合わせて、翌昭和63年9月26日から10月24日にかけておこなった。

以上の調査について、表1にまとめておく。

5．整理作業

今回の明石城関連の発掘調査では、土器類が整理用コンテナに1000箱、木製品が200点、金属製品が82点出土した。

出土品の整理作業は、平成元年度から始め平成3年度に終了した。以下に年度ごとの作業と担当者を示す。

平成元年度　作業内容　水洗い、ネーミング、接合復原、実測

担当者　長谷川眞

和田早芳子、角田あゆみ、岡田依理子、山本美佳、吉田由起子

本窪田英子、茨木恵美子・水戸芙美子、前田千栄子、斎藤海予子

吉川京子、木下佳志子

平成2年度　作業内容　実測、トレース

担当者　岡田章一

和田早芳子、角田あゆみ、森本貴子、岡田依理子、吉田由起子

岡崎輝子、茨木恵美子、前田千栄子、水谷幸子、山田麗子

吉川京子、木下佳志子

平成3年度　作業内容　レイアウト、報告書刊行

担当者　山下史朗

和田早芳子、吉本佳恵、宮田麻子、岡田依理子、岡崎輝子、吉田由起子、

本窪田英子、茨木恵美子、杉本淳子

協力者　発掘調査と出土品整理に際しては以下の方々の御協力を得た。

山下俊郎（明石市教育委員会）、稲原昭喜（同）、田村誠人（同）、神吉和夫（神戸大学工学部）、高橋学（立命館大学文学部）、高橋和子、前川要（大手前女子大学、現富山大学）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、青木重夫（兵庫県陶芸館）、真野脩、秋枝芳（日本城郭研究センター）　（順不同）

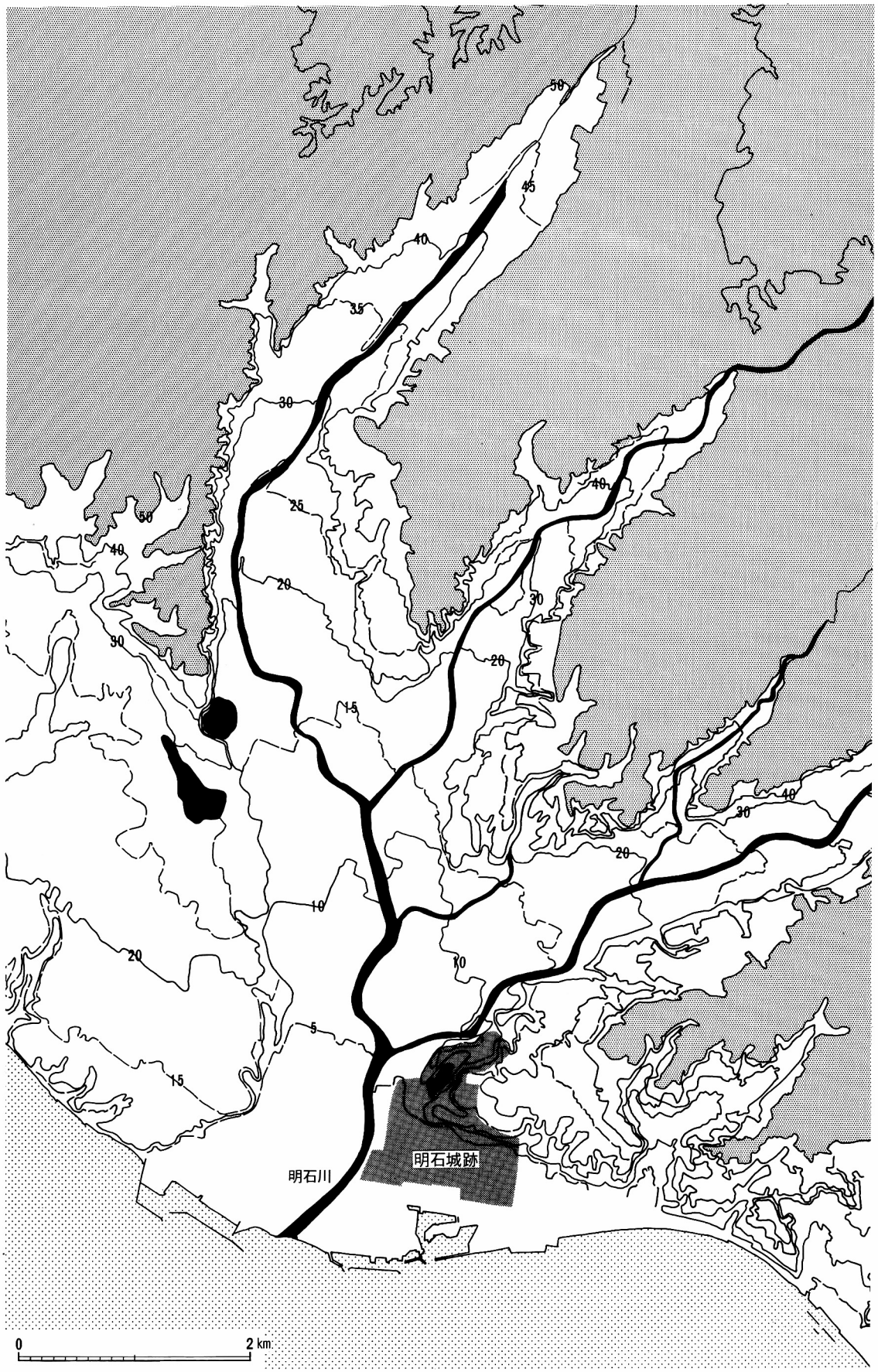
注）

1)　兵庫県教育委員会『明石城』1984

2)　同　上　『明石城Ⅱ』1986

表１　山陽電車高架工事関係明石城跡発掘調査一覧表

地区	調査番号	地区	調査種別	調査者	調査期間	調査面積	担当者
東中ノ町地区	－	遊園地線 ～ 東仲ノ町	確認調査	明石市教委	昭和61年３月５日 ～ ３月31日	112m²	山下俊郎 田村誠人
	870002	遊園地線 ～ 東仲ノ町	確認調査	県教委	昭和62年４月23日 ～ ５月１日	76m²	長谷川眞 山下史朗
	－	東仲ノ町 （駐車場）	確認調査	明石市教委	昭和61年５月21日 ～ ７月８日	124m²	山下俊郎 田村誠人
	860044	東仲ノ町 （駐車場）	確認調査	県教委	昭和61年８月４日 ～ ８月13日	142m²	村上泰樹 山下史朗
	860045	東仲ノ町 （駐車場）	全面調査	県教委	昭和61年９月８日 ～ 11月15日	966m²	岡田章一 山下史朗
中ノ町地区	－	大明石町 （駅前花壇・駅前広場）	確認調査	明石市教委	昭和61年８月25日 ～ ９月24日	56m²	山下俊郎 田村誠人
	860053	大明石町 （駅前広場） Ｄ地区	全面調査	県教委	昭和62年２月27日 ～ ３月７日	177m²	長谷川眞 山下史朗
	870002	大明石町 （駅前花壇） Ａ地区	全面調査	県教委	昭和62年４月23日 ～ ６月24日	518m²	長谷川眞 山下史朗
	870023	大明石町（タクシー乗り場西）Ｃ地区	全面調査	県教委	昭和62年９月11日 ～ ９月22日	200m²	村上泰樹 長谷川眞 久保弘幸
	880029	大明石町（タクシー乗り場東）Ｂ地区	全面調査	県教委	昭和63年９月26日 ～ 10月24日	345m²	長谷川眞 甲斐昭光
西中ノ町地区	860051	大明石町	確認調査	県教委	昭和61年11月24日 ～ 12月10日	150m²	岡田章一 長谷川眞 山下史朗
	860052	大明石町 （神姫バス車庫跡地）	全面調査	県教委	昭和61年12月11日 ～ 昭和62年２月26日	780m²	長谷川眞 山下史朗



第4図　明石城周辺の地形

Ⅱ　明石城をとりまく環境

1．地理的環境

六甲山系は西に向かって徐々に高さを減じ、塩屋付近で一旦海中に没する。これより北西側は六甲山の造山運動により持ち上げられた大阪層群、明美類層などからなる段丘地形が発達し、これもまた加古川方面に向かって西向きに緩やかに傾斜している。明石の地はこうした地層を削って流れる明石川が刻んだ段丘と、流域に造った平地とからなる。

眼前には瀬戸内海の東の出口、明石海峡を望むこの地は、対岸の淡路島まではわずかに４㎞の距離にあり、現在明石海峡大橋の建設が旧ピッチで進められている。

明石の地は、古来よりこうした立地条件に支えられて、海上交通の要衝として、また、陸路でも古代山陽道や近世西国街道が通過するなど、畿内から西国へと続く出入口として重視されてきたわけである。

現在の明石市は明石海峡に望んで、東西に細長い市域を占めている。人口は27万人で、明石川沿いに開けた沖積地に開けた旧市街地と、西部一帯に広がる段丘地形に開けた大久保町、魚住町一帯に区分できる。後者は、近年宅地開発が進み、人口が急増している地帯でもある。この細長いわずかな場所に、山陽新幹線、ＪＲ山陽本線、山陽電鉄などの鉄道と、国道２号線、第２神明道路など兵庫県南部の東西交通の基幹が集中している。

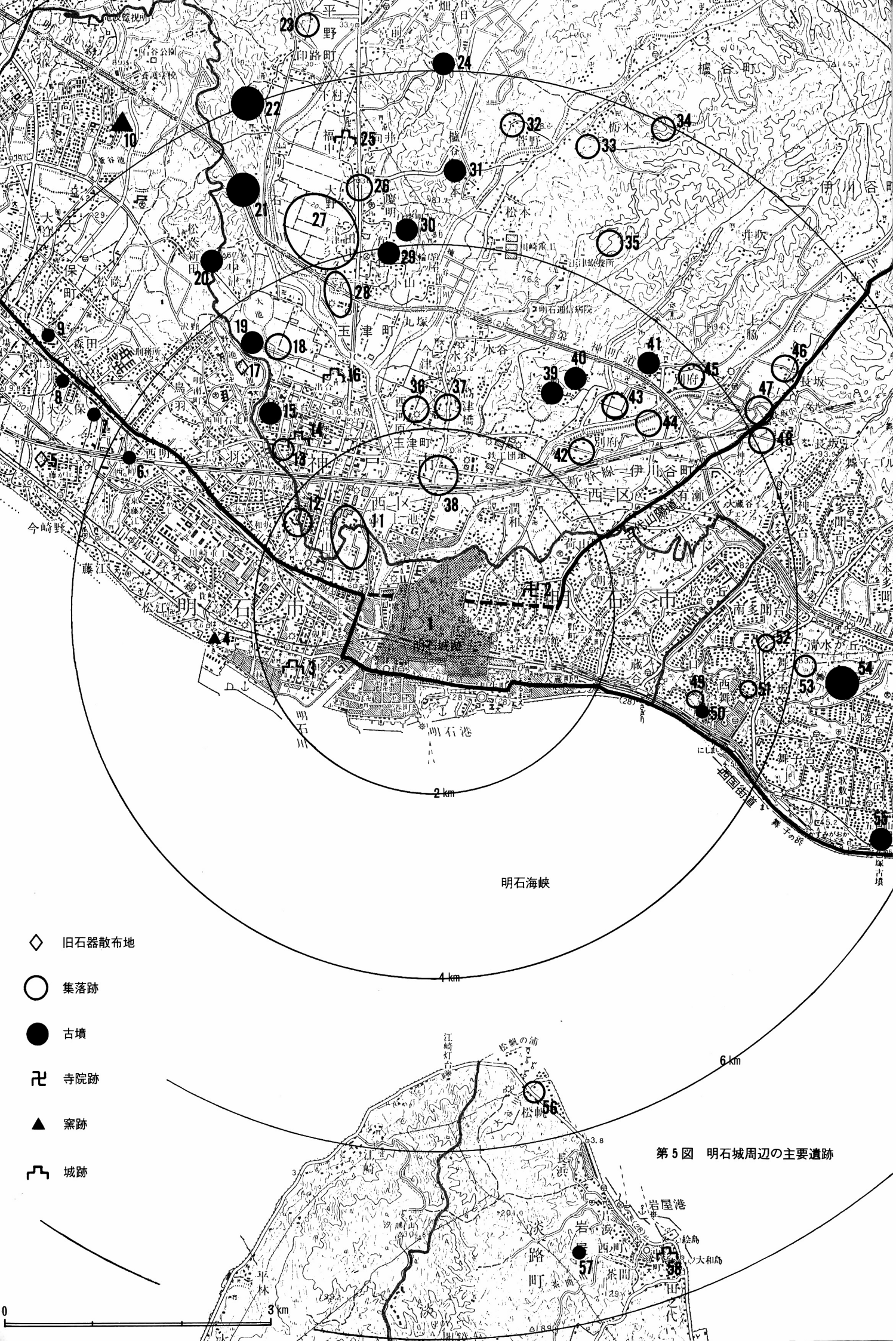
明石は古来より漁業の盛んな町としても知られ、明石蛸や明石鯛がつとに著名である。

また、東経135°の経線が通過し、日本の標準時を告げる町として知られている。

2．歴史的環境

旧石器時代　明石周辺の歴史的な環境をみると、この地は日本の旧石器時代研究史上忘れられない地であるといえる。直良信夫博士の西八木海岸での原人骨の発見は、当時は日の目をみないまま戦災で焼けてしまい、その真偽の程は長らくわからずじまいになっていた。その後昭和　年に、このことを確かめるべく、国立歴史民俗博物館による発掘調査が実施された。この調査で原人骨が出土した地層に相当するおよそ５万年前の地層から、加工跡のある木片が出土したことで、当時人類が存在した可能性が示唆されている。ただし、地質年代から考えると原人ではなく、旧人であることがわかってきている。

さて、明石川右岸地域では、段丘地形が発達していることとも関わって、旧石器の散布地が数多く確認されている。そのほとんどは旧石器時代後期のもので、発掘調査された例はないが、明石市大久保町西脇遺跡や魚住町寺山遺跡のほか、明南町野々池や大久保町喰ケ池・新築池などが知られている。神戸市域でも西区金棒池、大皿で、加古川市域では平岡町山之上などで後期旧石器が表採されている。



第5図　明石城周辺の主要遺跡

縄文時代　明石市域での縄文時代の遺跡は多くない。出ノ上遺跡、山下町遺跡などで縄文土器の出土が知られているのみである。しかし、近年玉津田中遺跡で縄文時代後期や晩期の遺物が出土するなど、明石川流域で今後縄文時代遺跡の発見例が増加することが予想される。

弥生時代　弥生時代になると、遺跡数は極端に増加する。兵庫県下でも特に明石川流域は弥生遺跡の宝庫といっても過言ではないほど遺跡が密集している。

明石川流域での弥生時代の始まりは早く、前期古段階の遺跡として学史上著名な吉田遺跡を始め、吉田片山遺跡、多数の住居跡や水田跡がみつかるなど村の構造にまで迫る調査成果の上がっている玉津田中遺跡など重要遺跡が集中している。

中期になるとさらに遺跡数は増え、集落、水田、墓がすべて調査された玉津田中遺跡や、玉作りを行っていたという新方遺跡、今津遺跡など枚挙に暇がない。

後期になると、先の玉津田中遺跡の他、吉田南遺跡（明石市域では北王子遺跡）などが注目される。また、中期末から後期にかけては池上北、頭高山、青谷など丘陵上に立地するいわゆる高地性集落が密集することもこの地域の特色であろう。

一方これら神戸市域の弥生遺跡にくらべ、明石市域での弥生時代遺跡は実態がよくわかっていない。この原因は明石市域が市街地化が進んでいるためと、まとまった広さの調査が少ないためである。明石城内に限っても、鷹匠町付近に土器の出土が知られているし、今回の発掘調査でも、東仲ノ町では中期～後期の飯蛸壷が出土している他、明石川近くの微高地でも後期の土器が出土している。おそらく、今後は河川沿いの自然堤防上や海岸の砂堆上では集落跡が、後背湿地では水田跡が発見されるであろう。

表 2　主要遺跡一覧表（番号は第 5 図に対応）

No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名
1	明石城跡	21	中村古墳群	41	鬼神山遺跡
2	太寺廃寺跡	22	印路古墳群	42	別府遺跡
3	船上城跡	23	西戸田遺跡	43	北別府遺跡
4	三本松瓦窯跡	24	西神No.55地点古墳	44	南別府遺跡
5	松ノ内遺跡	25	福中城跡	45	池上北遺跡
6	藤江中尾古墳	26	芝崎遺跡	46	長坂遺跡
7	カゲユ池古墳群	27	玉津田中遺跡	47	池上ロノ池遺跡
8	宮の先古墳	28	居住遺跡	48	池上南山遺跡
9	下ケ谷古墳	29	居住・小山遺跡	49	狩口台遺跡
10	新築池遺跡	30	慶明寺古墳群	50	きつね塚古墳
11	吉田南遺跡	31	松本古墳群	51	大歳山遺跡
12	吉田片山遺跡	32	西神No.62地点遺跡	52	投ケ上銅鐸出土地
13	吉田遺跡	33	谷口川遺跡	53	舞子・東石ケ谷遺跡
14	枝吉城跡	34	如意寺北遺跡	54	舞子古墳群
15	王塚古墳	35	青谷遺跡	55	五色塚古墳
16	下津橋城跡	36	今津遺跡	56	松帆遺跡
17	野々池遺跡	37	高津橋岡遺跡	57	石の寝屋古墳
18	出合遺跡	38	新方遺跡	58	岩屋城跡
19	亀塚古墳群	39	瓢塚古墳		
20	松陰新田古墳群	40	天王塚古墳群		

古墳時代　明石市域に現存する古墳は極めて少ない。しかし、少し視野を広げてみれば注目される地域であることがわかる。まず第1にあげられるのは明石海峡に面した五色塚古墳（神戸市垂水区）である。全長198m、兵庫県下最大の前方後円墳である。その被葬者については諸説があるが、明石海峡の支配に深く関わった者であることは疑いなかろう。その他、当地では最古級の古墳として、瓢塚古墳（神戸市西区）と天王山古墳群（同）があげられよう。また、中期の古墳では、全長　mの前方後円墳である王塚古墳が存在するなど注目すべき古墳が集中する地域である。

一方後期になると、舞子古墳群や雌岡山周辺の古墳に横穴式石室が用いられるが、その他大半の古墳が木棺直葬墳である。印路・下大谷・中村古墳群などがその好例である。明石川流域では、三木市、小野市など東播地方に共通する葬法をとっていたことがわかる。

古　代　明石城の立地する段丘上には、白鳳期の寺院跡である太寺廃寺がある。明石の駅家をこの周辺に置く説が有力だが、明石川右岸の沖積地で発見された吉田南遺跡を当てる説もある。後者は第2次明石郡衙とする説が有力である。また、魚住町には古瓦出土地である長坂寺遺跡があって、これも駅家跡と考えられている。また、大久保町高丘には奈良時代の瓦陶兼業の高丘窯跡群があって四天王寺と同范の鴟尾が出土している。このように、明石地域には古代の重要な遺跡が集中している。

中　世　明石川上流には神出窯跡群が、市域西部には魚住窯跡群があって、いわゆる東播磨系須恵器の一大生産地であったことが知られている。前者は六勝寺や鳥羽離宮などに瓦を供給していることで有名である。また、二本松窯跡では、鎌倉時代の東寺再建瓦が焼かれている。中世後期には、当地には多数の城館が存在していた。間島氏の居城である福中城（神戸市西区福中）、明石氏の居城である枝吉城（神戸市西区枝吉）の他、下津橋城（西区下津橋）、端谷城（西区櫨谷町）、魚住城（明石市魚住町）、岩屋城（淡路町）などが知られている。また、明石城築城以前には、高山右近で有名な船上城が中心的城郭であった。

参考文献

『明石市史資料第4集』明石市教育委員会　1985
『明石城』　兵庫県教育委員会　1984
『明石城跡Ⅱ』　兵庫県教育委員会　1986
『玉津田中遺跡調査概報Ⅰ』兵庫県教育委員会　1984
『中尾のすがた　むかし・いま』明石市中尾土地区画整理組合　1989
『繁田窯跡』　神戸市教育委員会　1988
前葉和子「6000年前の明石平野」『神戸の歴史』10　1984
『鴨谷池遺跡』　明石市教育委員会　1986
『狩口台遺跡発掘調査報告』　神戸市教育委員会　1990
『狩口台遺跡発掘調査報告Ⅱ』　狩口台遺跡発掘調査団　1991
『魚住古窯跡群』　兵庫県教育委員会　1988
『神戸市史』　神戸市　1990

Ⅲ　確認調査

1．遊園地前線～東仲ノ町の確認調査

山陽電鉄の高架工事に伴う確認調査は、本線南側の仮軌線範囲を対象として、明石市教育委員会により昭和60年度より継続調査が行われ、黒橋～遊園地前線間では奈良時代の瓦や土器などが出土している。ひきつづき昭和61年度初めに遊園地前線～東仲ノ町の確認調査が実施され、№31～42の東仲ノ町地区と、№43～49の駅前駐車場地区の確認調査が行われた。いずれも、基本的には２m四方の坪掘り調査を基本とし、要所をトレンチ調査としている。これらの調査では、明石城関連の遺構検出を主目的として行われたものである。

この東仲ノ町地区の調査では、№31では東外堀跡が、№35では道路跡とそれに面した建物の基礎部分が検出されている。ただ、これらの地区は、鉄道と民家に挟まれた狭い場所であるために全面調査の実施は不可能であった。一方、駅前駐車場地区の確認調査では、江戸時代の陶磁器類を多量に含む遺構面が西半部で確認されたが、その性格と範囲の確定ができなかったため、県教育委員会により当該地の第２次確認調査を後に実施することになった。

また、東仲ノ町地区の本線部分については、県教育委員会が昭和62年度に確認調査を実施している。この結果について以下に記す。

東外堀跡（１トレンチ）

外堀跡は、現在では全て埋められてしまい、正確な位置が不明である。そこで、幅２m、長さ25mのトレンチを設定した。堀の深さは、現地表面から堀底まで2.9m、幅は、東肩が確認できなかったので不明だが、およそ2.5m程度になるのだろう。堀底には厚さ50cm程の砂を中心とした堆積物がある。残り2.4mは、人為的に埋められたシルト質の汚れた土で満たされている。明治時代初期に堀を埋めた際のものと考えられる。堀底の両側には土留めの木杭が打ち込まれている。

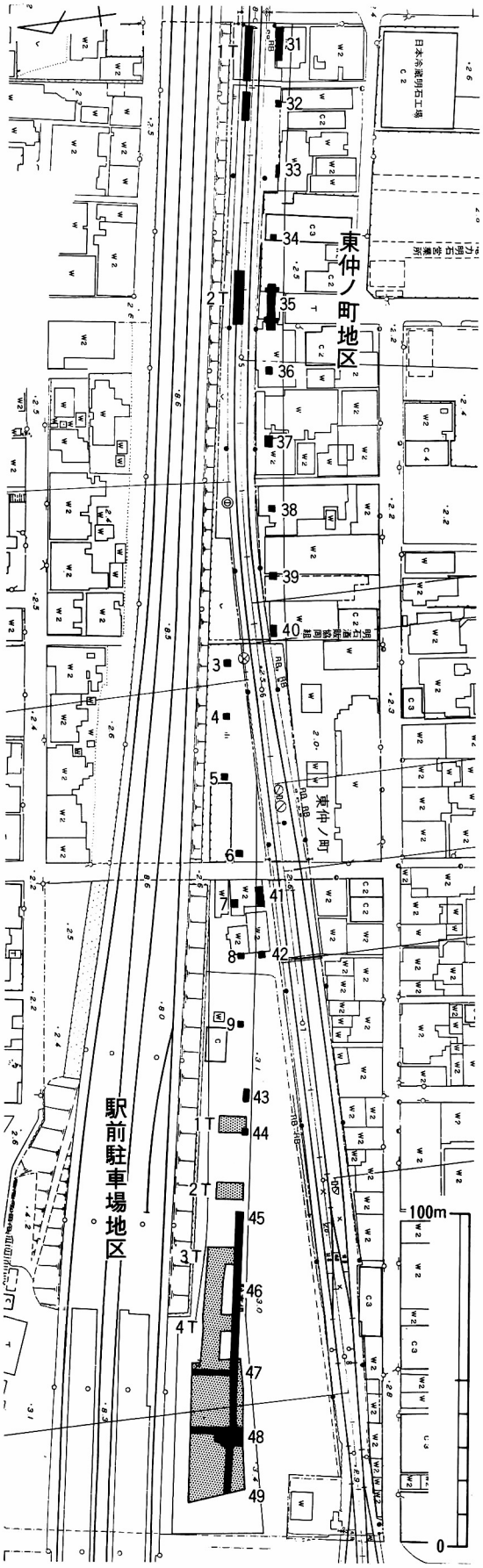
また、トレンチの西端では、わずかながら人為的に盛られた地層が認められた。土塁の一部の可能性がある。

道路跡（２トレンチ）

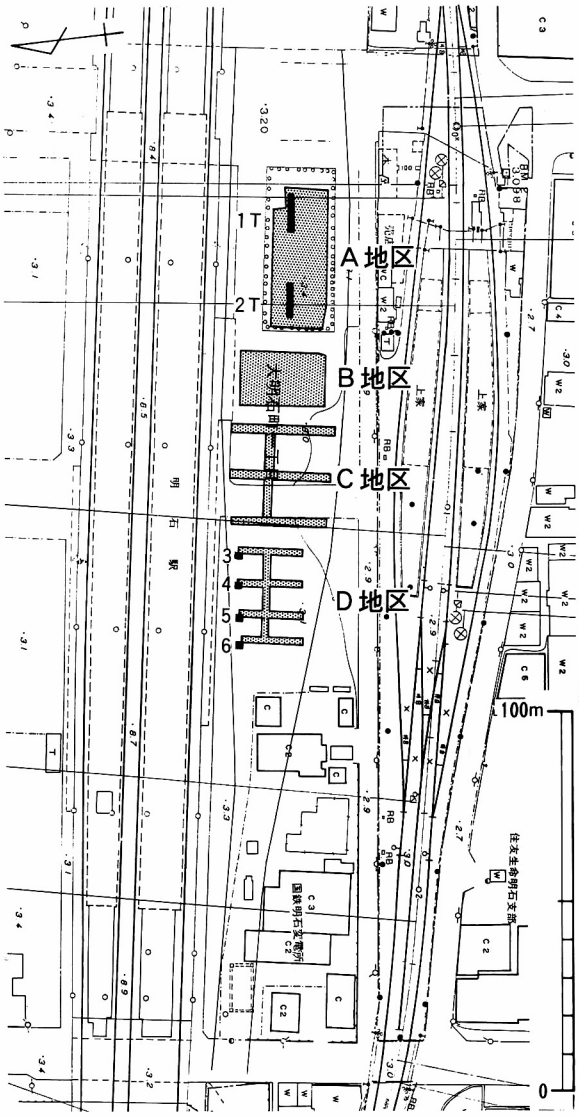
道路推定地に幅３m、長さ15mのトレンチを設定した。地表から65cmのところで、幅９mで両側に溝を伴う平坦面を検出した。道路跡と考えられる（ＳＦ２００１）。平坦面には砂層が堆積しているが、洪水砂の可能性が考えられる。側溝は、西側の溝は幅40cm、深さ15cmでやや規模が小さく、東側の溝は幅90cm、深さ15cmと西側に比べてやや規模が大きい。

南接する市教委の調査地点では側溝は切り石積みであったが、ここではその形跡はなく、部分的な施設であったものと考えたい。

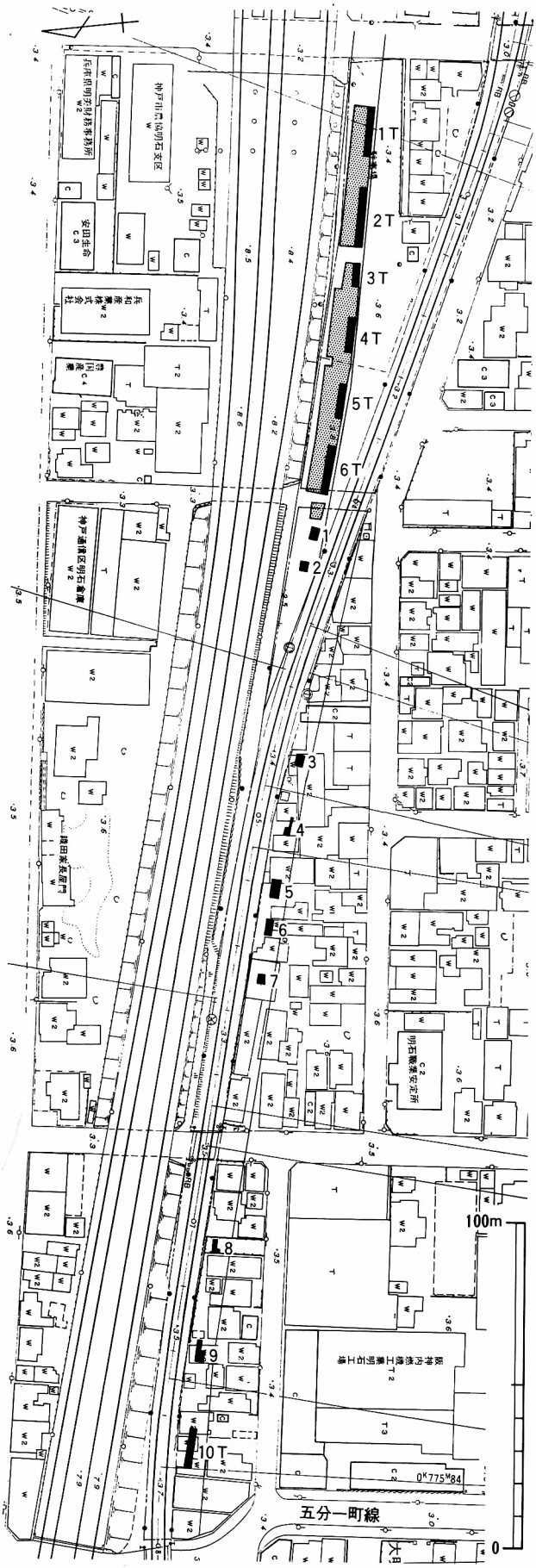
なお、断ち割り調査により、下層は砂堆を形成する砂層であることがわかっている。



第6図　東中ノ町地区調査区設定図



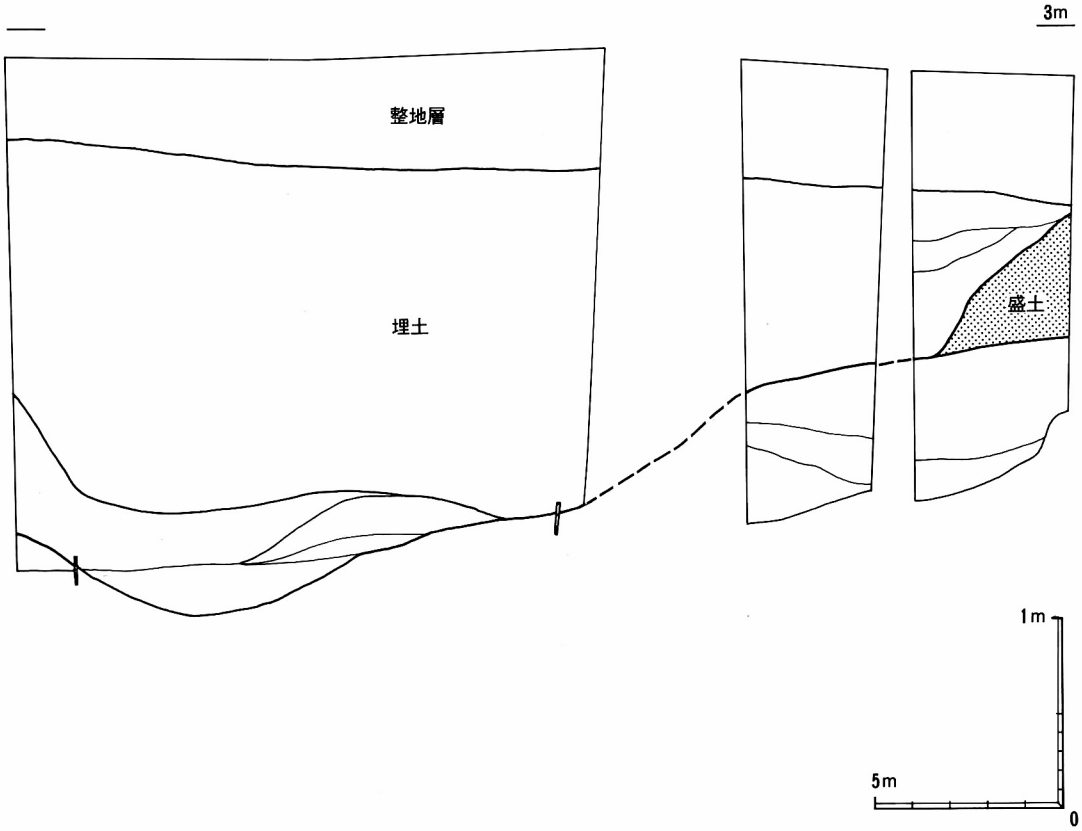
第7図　中ノ町地区調査区設定図



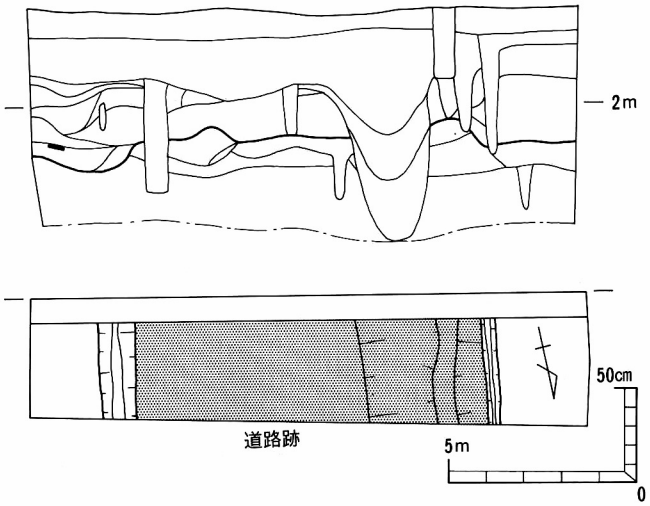
第8図　西中ノ町地区調査区設定図

3G～9G

特に顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、いずれのグリッドでも江戸時代以降の洪水に伴う砂層が確認された。



第９図　東中ノ町地区１トレンチ東外堀断面図



第10図　東中ノ町地区２トレンチ道路跡

2．東中ノ町地区（駅前駐車場）の確認調査

調査の概要

調査に際して、第１次確認調査（市教委実施）の東西トレンチである№45トレンチを西へ幅22m、長さ56mの規模で延長したＡトレンチは、第１次確認調査の土層を把握するために、№49・46のトレンチと重なるようにした。さらに南北方向の遺構の有無を確認するために幅2.2m、長さ14mの規模のＢトレンチ、幅2.2m、長さ17mの規模のＣトレンチをそれぞれ設定した。

調査は、第１次確認調査の成果を考慮し、土層観察によって遺構の有無を確認することに主眼をおいたため、トレンチ内はバックホーによる機械掘削を行い、地表下2.5m（水田Ａの確認レベル）まで掘削した。この水田より下層の水田Ｂについては、地表下３ｍの深さまで下げる必要があったが、掘削壁面が崩壊する恐れがあり、部分的に深掘り地区を設け水田Ｂ面の確認に努めた。ただし、ＡトレンチⅢ区とＣトレンチについては、地表下1.3mの深さで江戸時代末期の明石城関連遺構（江戸Ａ面）が検出されたため、遺構をはずして深掘り地区を設け、下層遺構の検出に努めた。

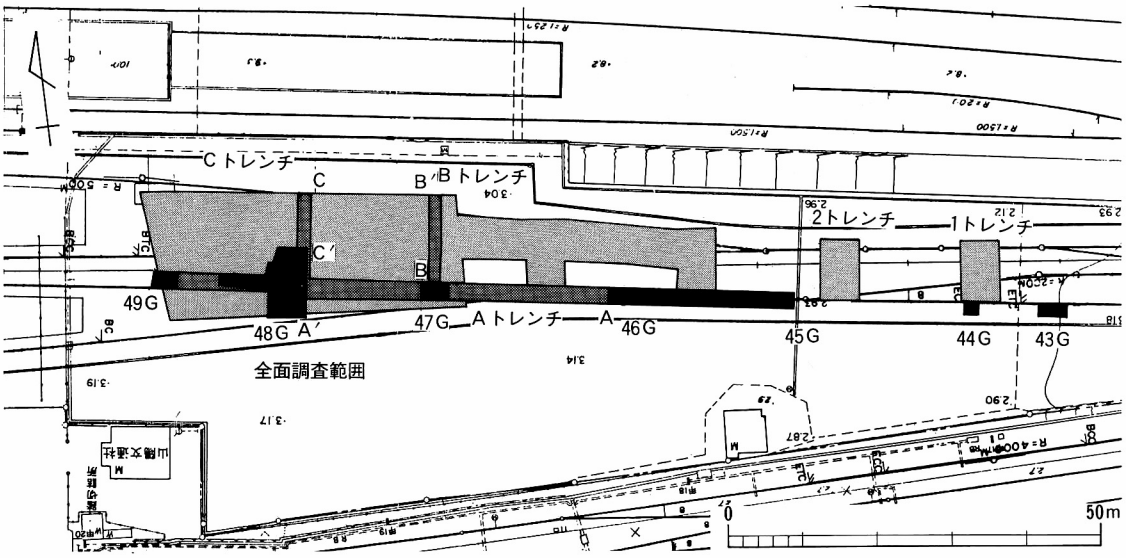
明石城関連遺構（江戸Ａ・Ｂ面）

明石城関連遺構は、上下２面で検出された。以下、上面を江戸Ａ面、下面を江戸Ｂ面と呼称する。

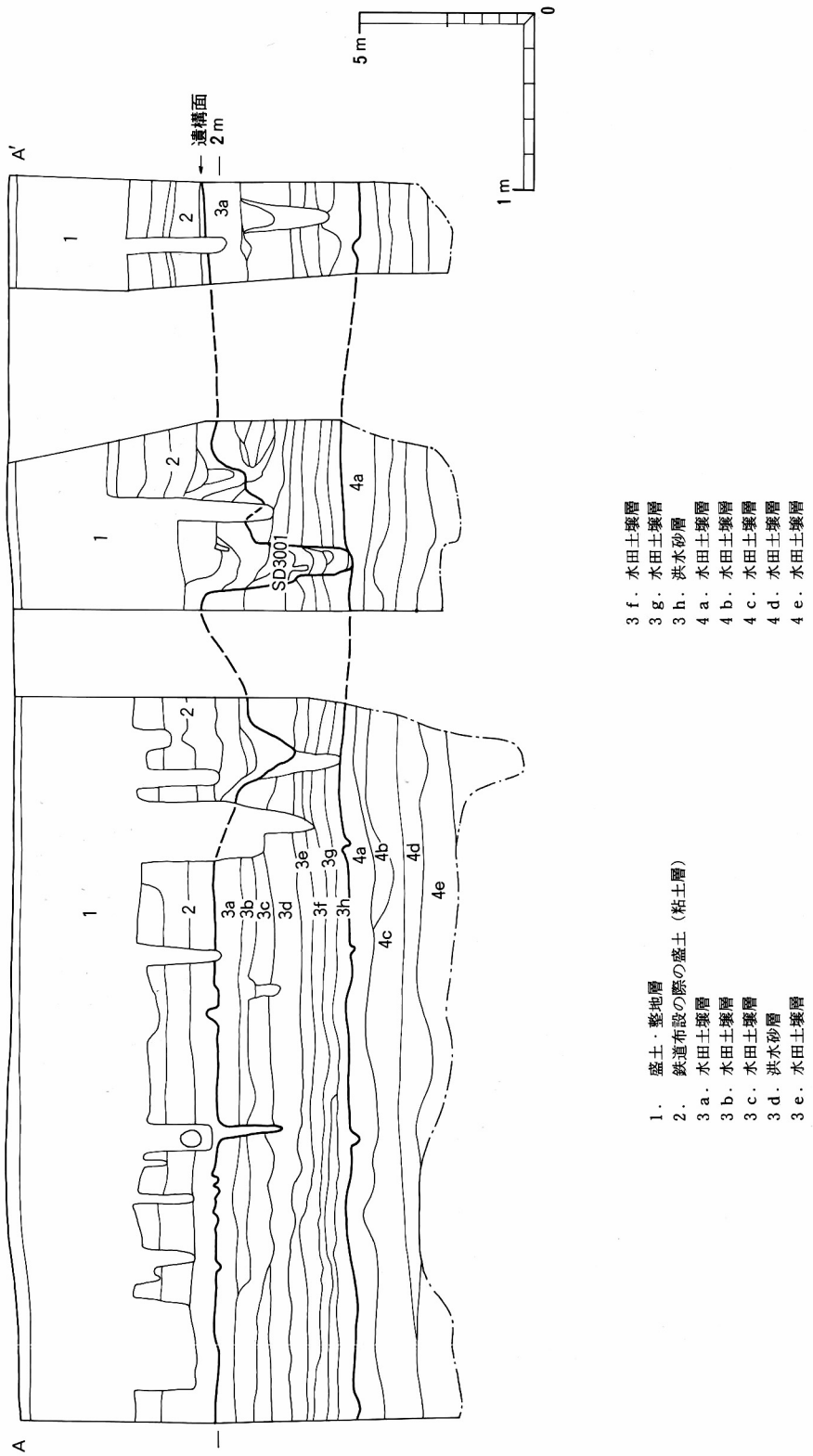
江戸Ａ面の遺構は、ＡトレンチⅢ区およびＣトレンチで検出された。遺構はいずれも礫岩、花崗岩を配石した石列で、前者は溝（ＳＤ２０１２）に伴うもの、後者は汚水処理施設と考えた。

江戸Ｂ面では溝（ＳＤ３００１）が検出された。

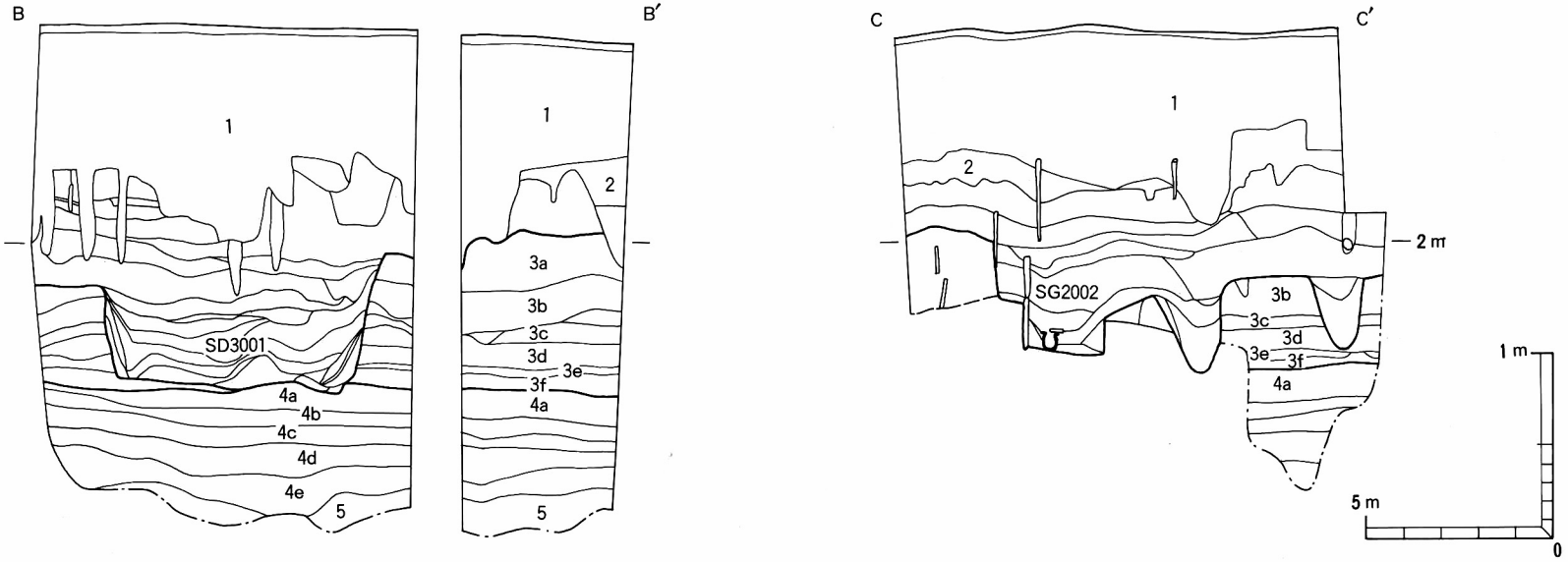
このように、当該地区では西半部で遺構と遺物が検出されたために全面調査を実施することとした。同時に地区の名称を旧町名をとって東中ノ町地区と呼称することとした。



第11図　東中ノ町駐車場地区確認調査トレンチ設定図



第12図　東中ノ町地区Aトレンチ南壁土層断面図



1．　盛土・整地層
2．　盛土粘土層
3 a．シルト質細砂　2.5Y 4/1 黄灰
3 b．シルト質細砂　2.5Y 5/1 黄灰
3 c．シルト質細砂　5Y 7/1 灰白
3 d．シルト質極細砂　5Y 6/1 灰
3 e．極細砂　5B 7/1 明青灰
3 f．シルト質細砂　5B 6/1 青灰
4 a．シルト質極細砂　N 7/0 灰白
4 b．シルト質極細砂　2.5Y 6/1 黄灰
4 c．シルト質極細砂　2.5Y 5/1 黄灰
4 d．シルト質細砂　2.5Y 6/1 黄灰
4 e．シルト質中砂　10YR 4/1 褐灰
5．　シルト質中砂　7.5Y 6/1 灰

第13図　東中ノ町地区B・Cトレンチ土層断面図

3．中ノ町地区（大明石町駅前広場）の確認調査

駅前広場の確認調査は、昭和61年度に明石市教育委員会によって行われた。調査は2箇所のトレンチと4箇所の坪掘りで行われ、江戸時代の武家屋敷跡に関連する溝や土坑等の他、中世に遡る遺構面が確認された。このため、当該地区の全域を全面調査の対象とすることになった。この地区は、旧町名をとって中ノ町地区と呼称することとした。

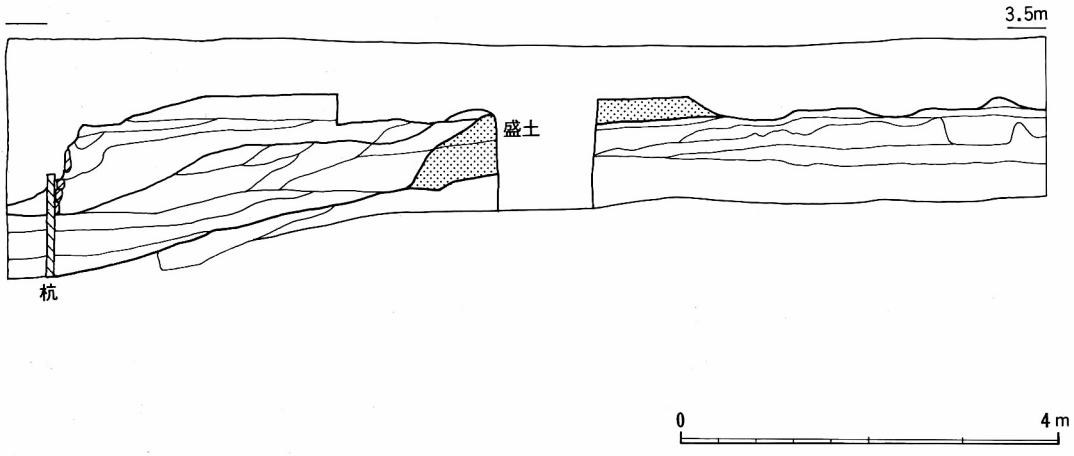
4．西中ノ町地区（大明石町神姫バス車庫跡地）の確認調査

明石駅西方地区のうち、神姫バス車庫跡地については、これまでの調査の結果から判断して、遺構の残存状態が良好である可能性が予想されたため、グリッド方式の調査では遺構の検出や層位が判断しがたいため、幅2m、長さ10mのトレンチを10mおきに設定して確認調査を実施した。当地区は自然堤防上に立地するため、基本的に1面の遺構面からなるが、東方では2面の遺構面が検出された。また、土坑や池、溝の他建物の礎石等の遺構が検出され、多量の遺物が出土したため、全域を全面調査することとした。この地区は元の町名をとって西中ノ町地区と呼称することとした。

5．大明石9号線～五分一丁線の確認調査

仮線部の遺構確認を目的として10箇所の坪掘りを行った。この結果、№1～9Gでは遺構の残存状態は悪く、また、対象範囲が線路脇の狭隘地であるために全面調査の対象外とした。一方№10では西外堀の落ち込み部が確認されたため再度トレンチ調査を実施することにした。

西外堀跡　トレンチ調査により、西外堀の落ち込み部と堀底の土留めの杭列が確認できた。また、堀の肩部では土塁の痕跡と考えられる盛土層も一部に認められた。



第14図　西外堀・土塁跡断面図

Ⅳ　東中ノ町地区の調査

調査地は、後背湿地に当たっており、湿地性の堆積物が認められる。

１層は盛土、整地層である。現在の地表面の標高は3.1mで、5cmの厚さでアスファルト舗装されている。さらに整地層が厚さ15cm、かつて鉄道敷であったために、バラスが厚さ50cmで轢かれ、さらに第1c層は鉄道敷設のために粘土層を厚さ15cmに敷いて地盤の強化を図っている。これらの盛土、整地層を合わせると0.8mの厚さに達する。これ以下が本来の地表面である。第２層は明治初期に水田化された際の耕土層で、厚さ20cmである。第３層は江戸時代の地層である。地点により異なるが、建物跡付近は厚さ20cmの整地層がある。おそらく、軟弱な地盤に立地するため、建物部分の基礎部分のみに盛土をして地盤の強化をはかったのであろう。第４層は中世の地層である。地点によってことなるが、基本的には水田として利用されたようで、数面の耕土層が連続する。第５層以下は中世以前の地層である。

主な遺構

東中ノ町地区で検出された遺構には、溝、建物跡、池、井戸、水道、土坑がある。特に、溝は屋敷境の溝と排水用溝とに分かれる。

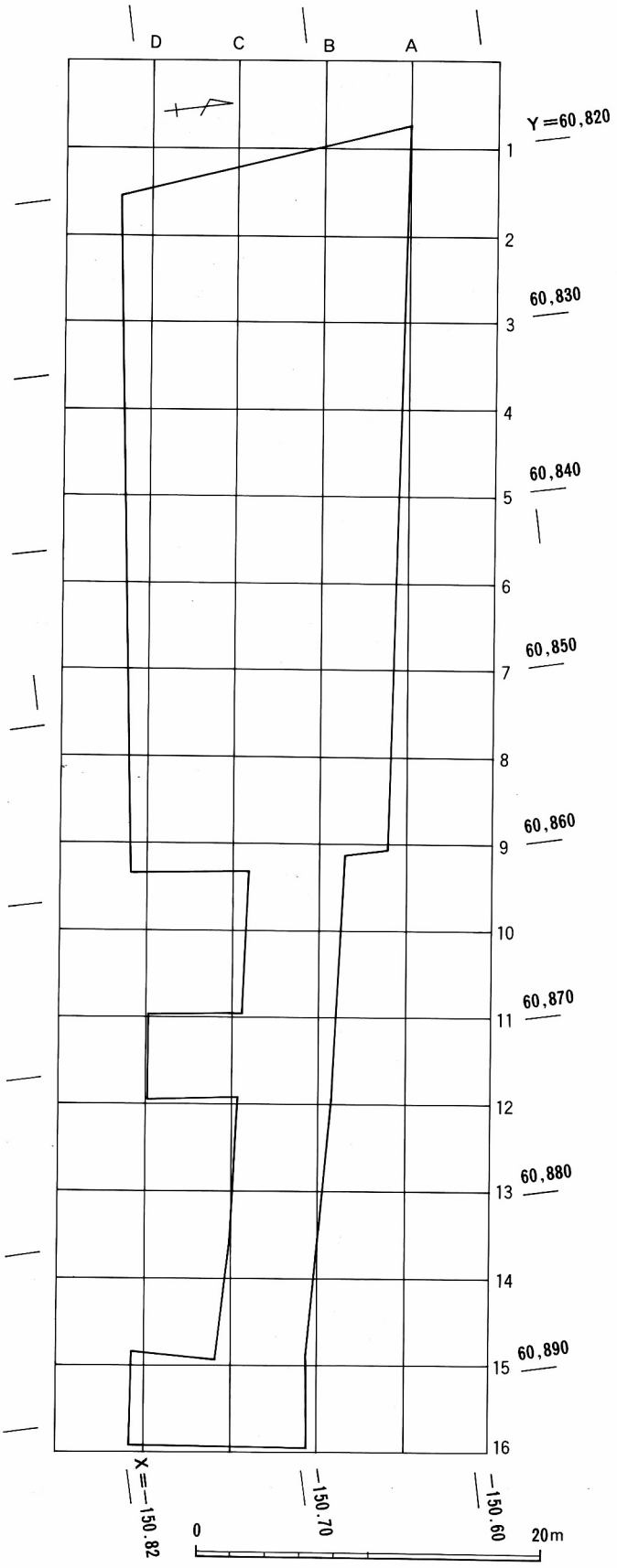
屋敷境溝

ＳＤ３００１　武家屋敷を区画する南北方向の溝である。幅は1.3m、深さは30cmである。発掘調査時にはわからなかったのだが、断面の形状がW字形をなすため掘り直しによる切り合い関係があるようである。

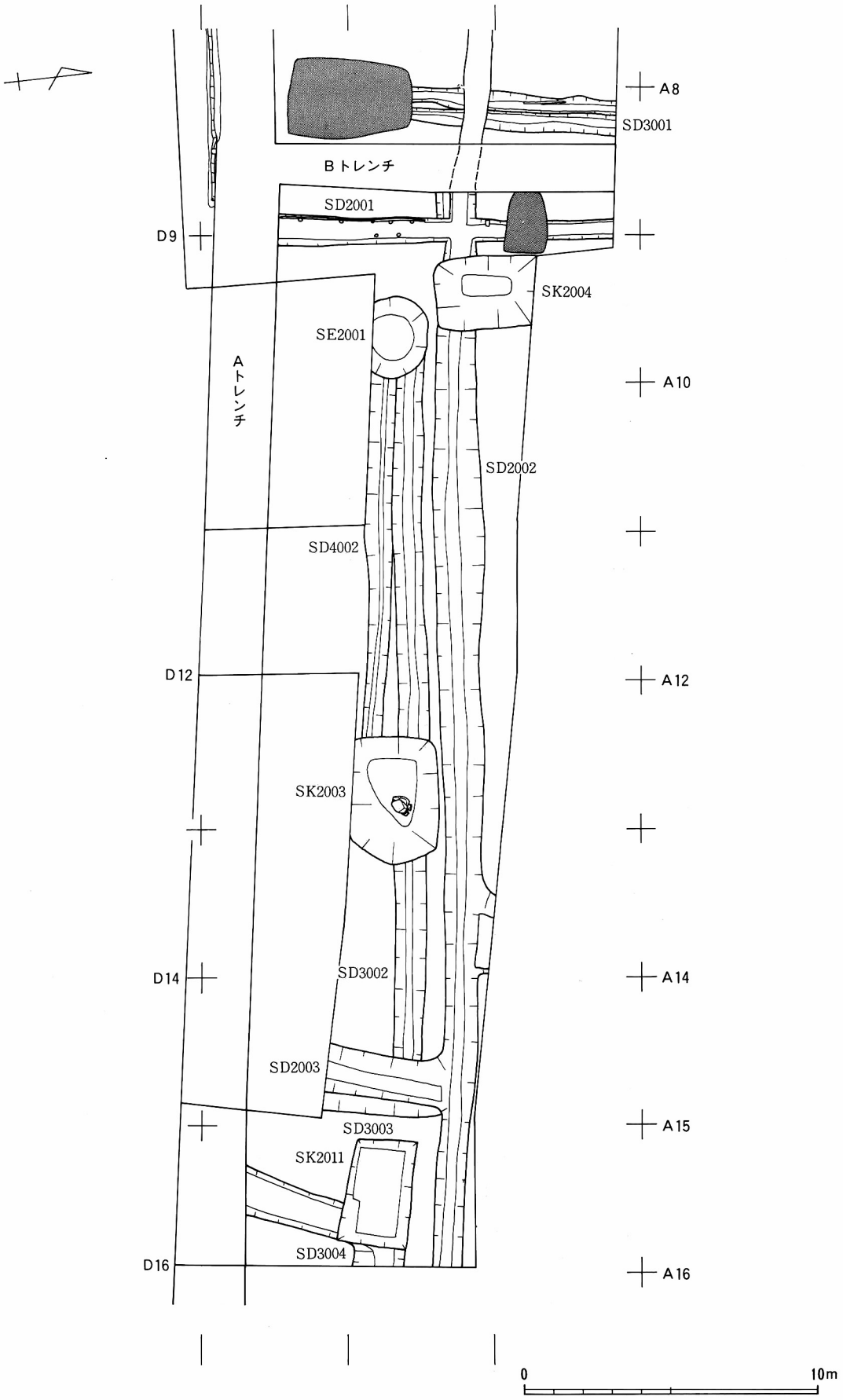
ＳＤ２００１　武家屋敷を区画する南北方向の溝である。断面の形状は箱形で、幅は１m、深さは残存部で15cmである。溝の西肩には幅10cm厚さ３cmで長さ4mほどの板材２枚を２段に組み、1.4m間隔で杭を打って止め、土留としている。東面については板材は残存していなかったが、杭列が残っているので本来は西面と同様の構造であったのだろう。この溝は明治初期には用水路の役割をはたしていたようで、この施設が武家屋敷に伴うものかどうかは明らかではない。

ＳＤ２００２　ＳＤ２００１と同じく、屋敷境を画する東西方向の素掘りの溝である。ＳＤ２００１と同時に機能していたものと考えられる。残存幅は1.3cm、深さは50cmで断面形はU字形をなしている。ＳＤ３００２を北側に1.7mずらして掘り直したものと考えられる。

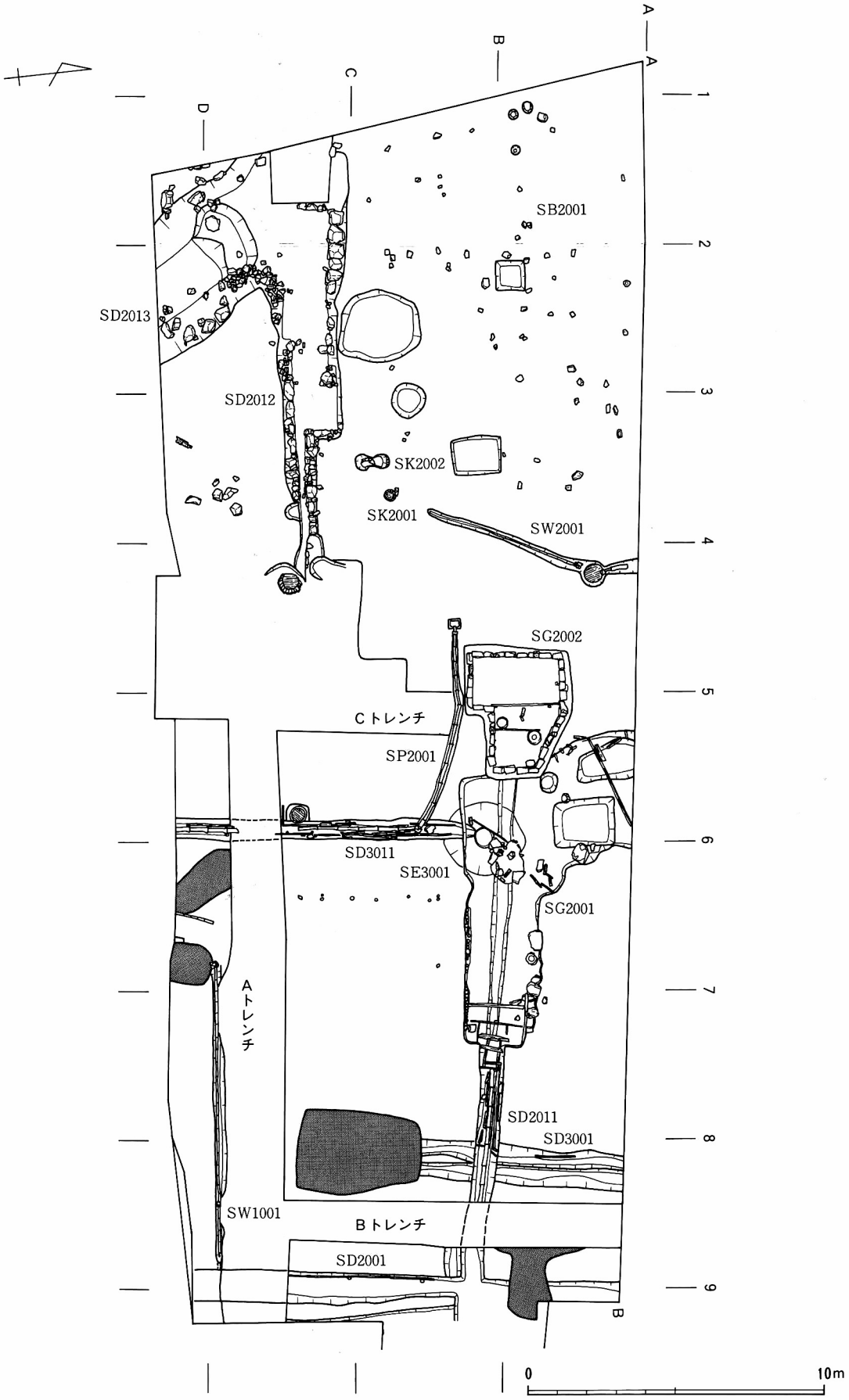
ＳＤ２００３　ＳＤ２００２からT字形に分かれ、南方に延びる溝である。断面はU字形をなし、幅は1.3m、深さは35cmである。屋敷境を画する溝と考えられ、溝２との東西距離は28.5mである。



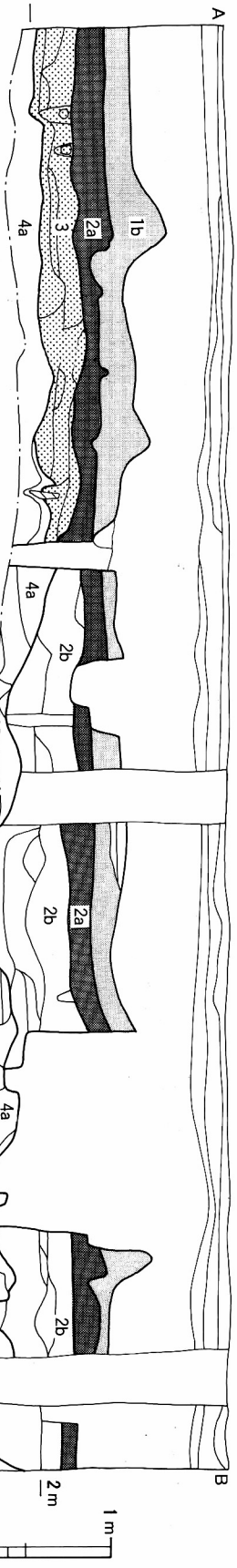
第15図　東中ノ町地区地区割図



第16図　東中ノ町地区平面図（1）

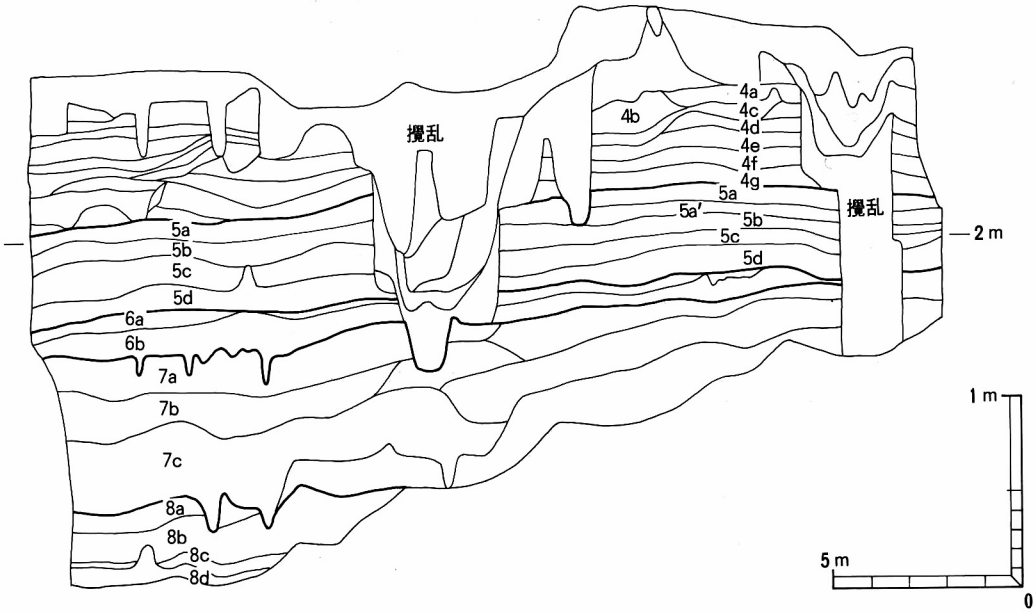


第17図　東中ノ町地区平面図（2）



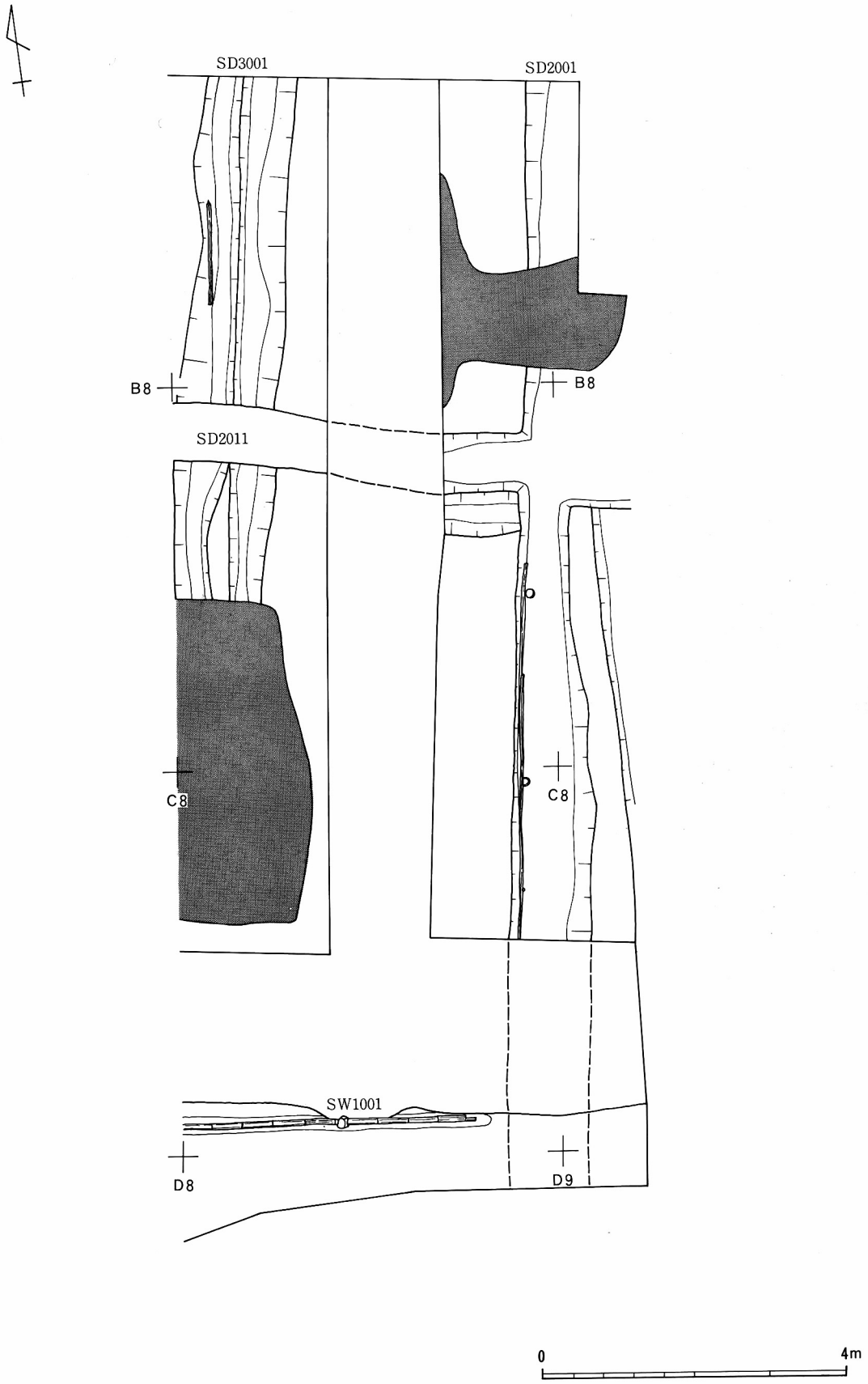
1.　盛土・攪乱層
1b．極細砂質シルト 2.5Y 7/4 淺黄（盛土）
2a．極細砂質シルト 2.5Y 4/1 黄灰（明治初期の水田耕土層）
2b．シルト質極細砂 2.5Y 6/2 灰黄
3.　シルト質細砂 2.5Y 6/1 黄灰（整地層）
4a．シルト質細砂 5Y 6/1 灰（中世の水田耕土層）

第18図　東中ノ町地区北壁断面図



4a．シルト質中砂 N 6/0　灰
4b．シルト質細砂 2.5GY 7/1　明オリーブ灰
4c．シルト質細砂 5B 6/1 青灰
4d．シルト質細砂 5B 6/1 青灰
4e．シルト質細砂 5B 7/1 明青灰
4f．シルト質細砂 10YR 7/1 灰白
4g．シルト質細砂 7.5YR 7/1　明褐
5a．シルト質極細砂 10YR 6/1 褐灰
5a′．極細砂質シルト 10YR 6/1 褐灰
5b．極細砂質シルト 10YR 5/1 褐灰
5c．極細砂質シルト 10YR 4/1 褐灰
5d．極細砂質シルト 10YR 6/1 褐灰
6a．シルト質中砂・細砂 10YR 3/1 黒褐
6b．シルト質中砂 10GY 7/1 明緑灰
7a．シルト質粘土 10YR3/1　黒褐
7b．シルト質粘土 10YR3/1　黒褐
7c．シルト質細砂～細砂まじりシルト
8a．粘土 5Y 6/1 灰
8b．粘土 5Y 5/1 灰
8c．粘土 5Y 8/1 灰白
8d．粘土 5Y 5/1 灰

第19図　東中ノ町地区下層断面図



第20図　SD3001・2001

ＳＤ２００５　ＳＤ２００１の東側に並行する形で南北に延びる溝である。幅は70cm、深さは15cmで、浅い皿状の断面形状をなしている。元々は屋敷境溝であったものと思われる。

ＳＤ３００４　ＳＫ２０１１に切られる溝である。幅は1.2m、深さは30cmで南北方向に延び、ＳＫ２０１１に重なったところで東に屈曲している。この溝も本来は屋敷境溝と考えられよう。

ＳＤ３００２　ＳＤ２００２に平行して東西方向に延びる素掘りの溝である。両者の距離は1.7mと接近しており、同時に機能していたものとは見なし難い。出土遺物の示す年代もＳＤ３００２が先行するため、ＳＤ２００２に先行する同じ用途の溝と考えられる。

ＳＤ３００３　ＳＤ２００３に東肩に重なる溝である。

ＳＤ４００２　ＳＤ１２のさらに南側に平行して東西に延びる溝である。幅は90cm、深さ25cmで断面の形状は皿状を呈する。

排水溝

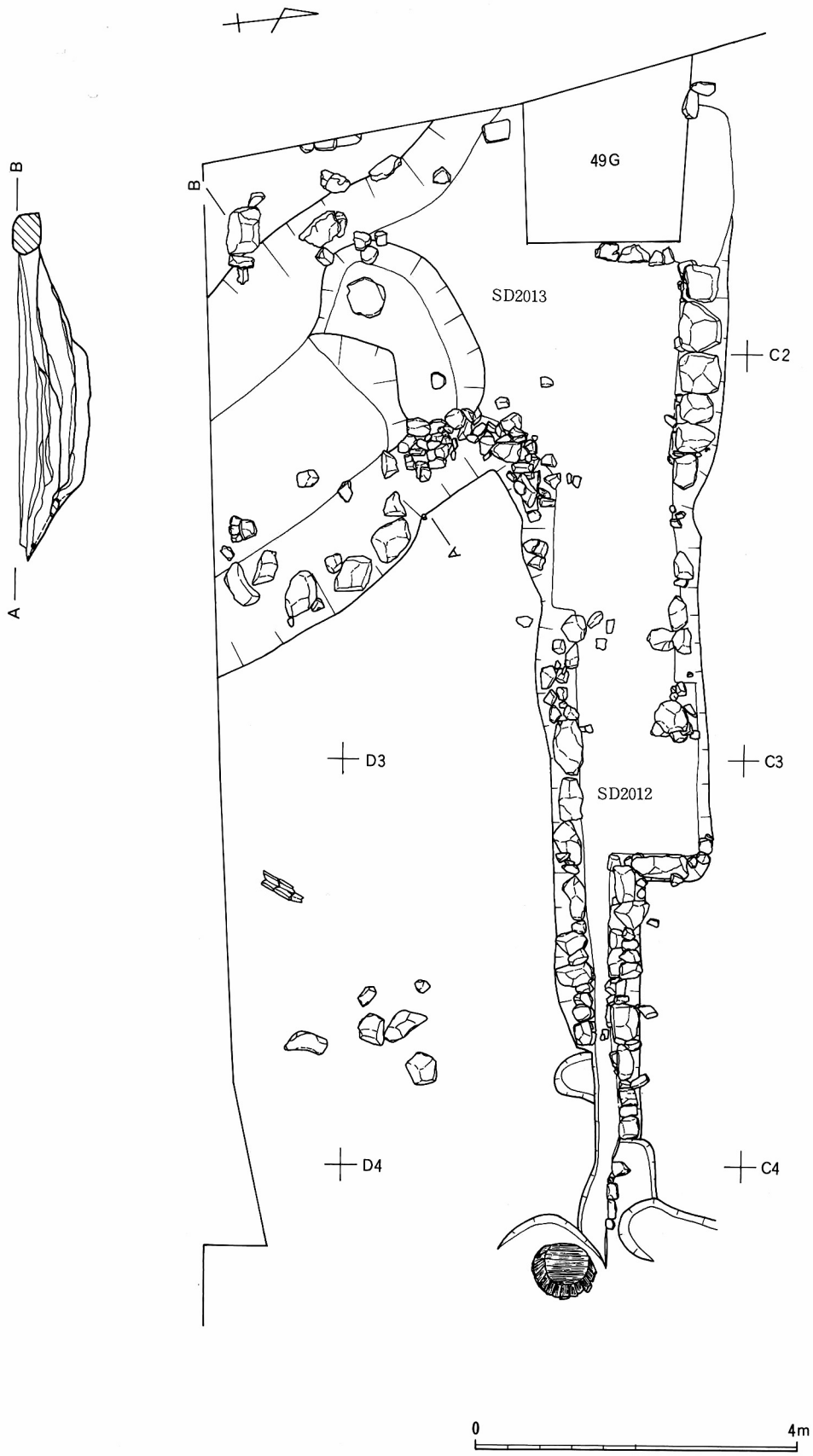
ＳＤ２０１３　調査区の南西隅を、北西から南東方向に横切る溝である。幅は４ｍ、深さは北西部で60cm、南東部で80cmとだんだん深くなっている。溝肩には径50cm程の比較的大きな石が並べられていた。溝底には植物遺体を含んだ黒色土層が体積していた。

ＳＤ２０１２　建物跡の南側に沿って東西に続く溝である。延長は12m検出された。はっきりいって美しいとはお世辞にもいえない礫岩を組んで石組み溝としている。深さは○cm程だが、幅は東から4.5mの地点までは2.5cm、そこでクランクして幅を広げ、1.2mとなり、幅を広げながらＳＤ２０１３に流れ込む。東端部には土管が埋め込まれていた。

ＳＤ３０１２　ＳＧ２００２の北側にある、幅60cm、深さ10cmの小規模な溝である。ＳＧ２００２に切られている。

ＳＤ２０１１　建物跡の東端付近から始まるようだが、ＳＧ２００２にきられているためにはっきりしない。幅は70cm、深さ35cmの素掘り溝である。ＳＥ３００１の掘り方埋土を切っている。ＳＧ２００１（池）に一部取り入れられ、排水溝として利用されている。最終的にはＳＤ２００１に流れ込む。

ＳＤ３０１１　ＳＥ３００１から南へ延びる排水溝である。幅60cm、深さ30cmの掘り方の中に、両側面を板で囲い、板組みの溝としている。途中に溝に接して直径55cmの桶を埋め板囲いをしてあるが、用途はわからない。この溝は、井戸が廃棄された段階で、水道に対応するための排水用土管が埋設されているが、出土遺物のほとんどが新しい年代を示しているので、完全に地中に埋められたわけではなく、単に土管を溝の中に置いただけの状態であったと考



第21図　SD2012・2013

えられる。

建物跡

ＳＢ２００１

調査区北西部一帯にほとんど遺構の検出されなかった地帯がある。この範囲には厚さ20㎝程の粘土層が敷き詰められ、地盤を固めた様子が伺える。ここでは明確な礎石は検出されなかったものの、多数の石が検出された。元来当地は石がほとんど存在しない土地柄であって、このような石が存在する事自体人為的なもの以外のなにものでもない。したがってこれらの石が建物の基礎に使用されたものであることは容易に察せられる。

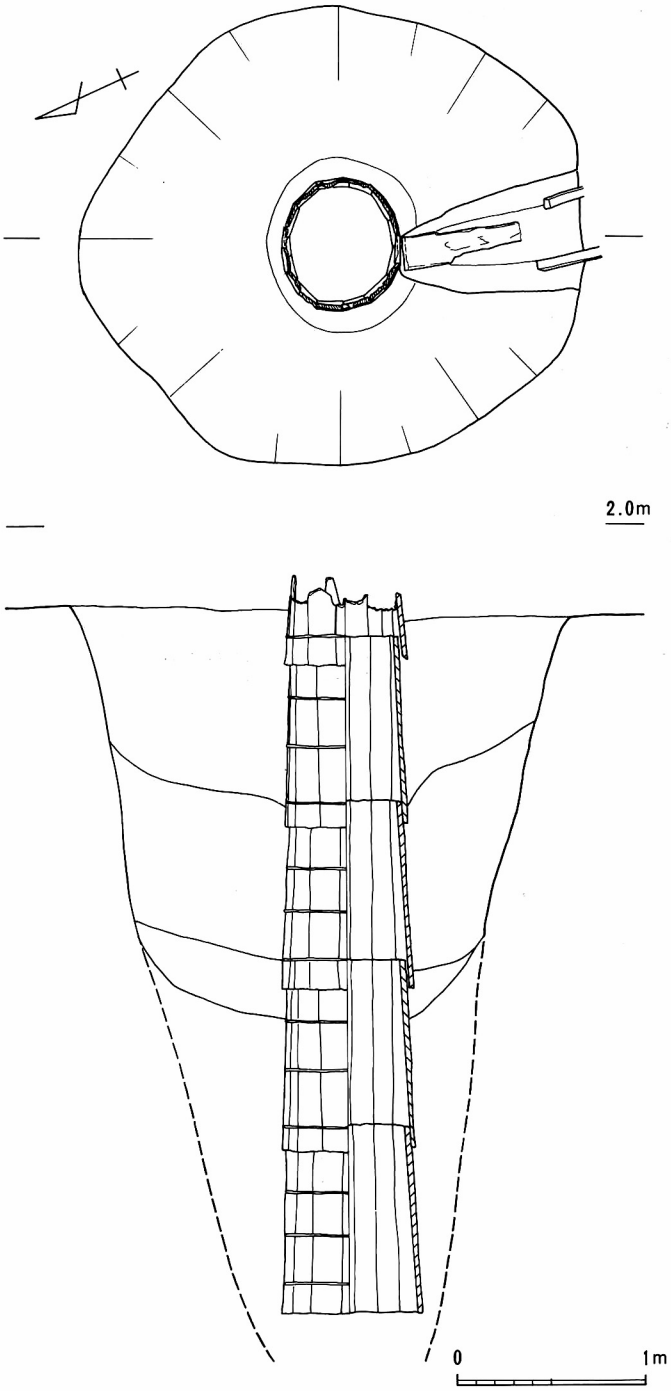
井戸

ＳＥ２００１

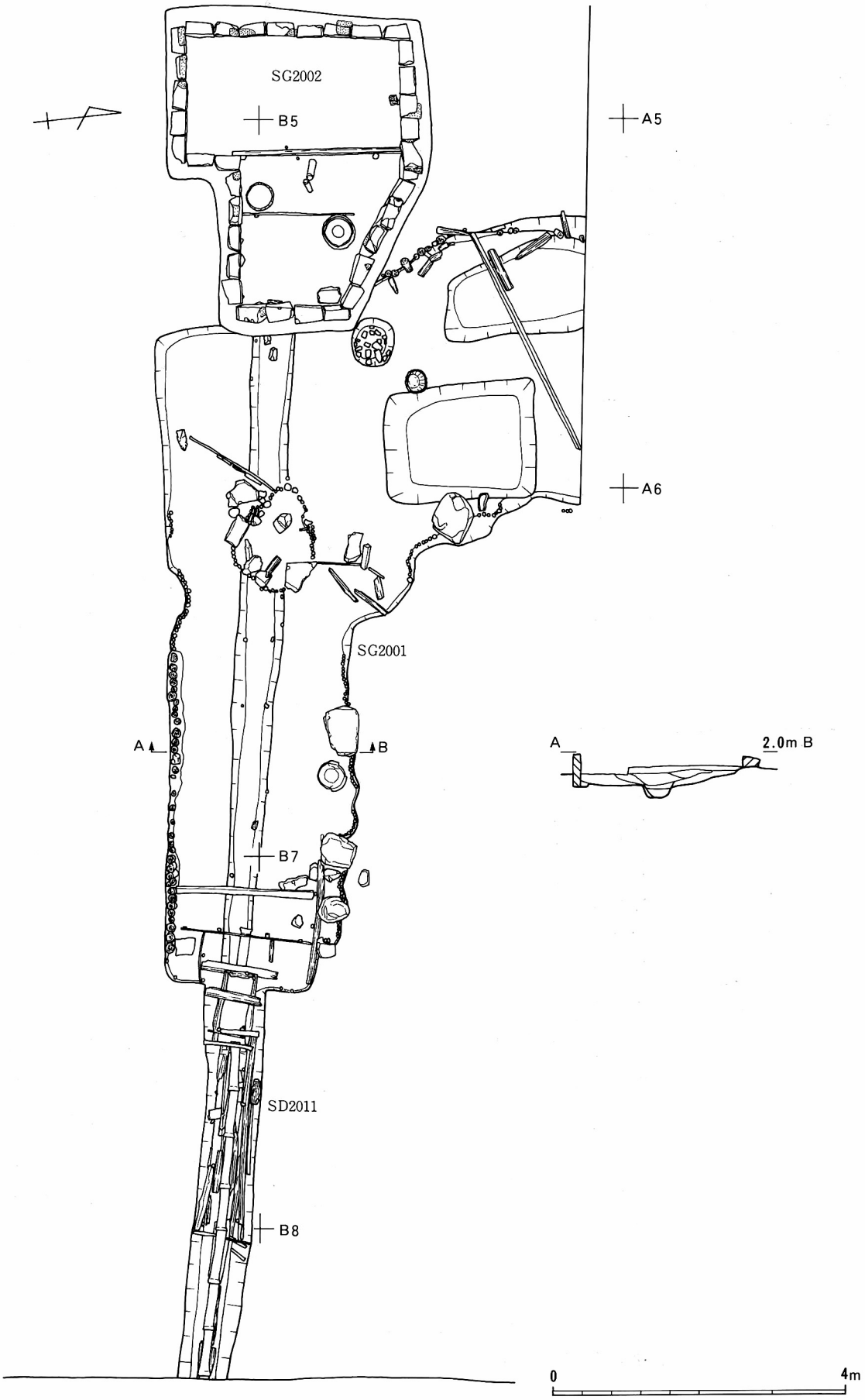
８トレンチと全面調査地区の交点付近でみつかった円形の土坑である。直径は2.7mで、土坑の壁面の掘り方は垂直に近く、深さ1.3mを越える。屋敷境に近く、ＳＤ３００２が埋没した後に掘られている。内部は灰色シルトで埋まっており、遺構の性格は井戸の可能性が考えられなくもないが、位置から判断すると不適当で、廃棄土坑と考えた方が適当であろう。

ＳＥ３００１

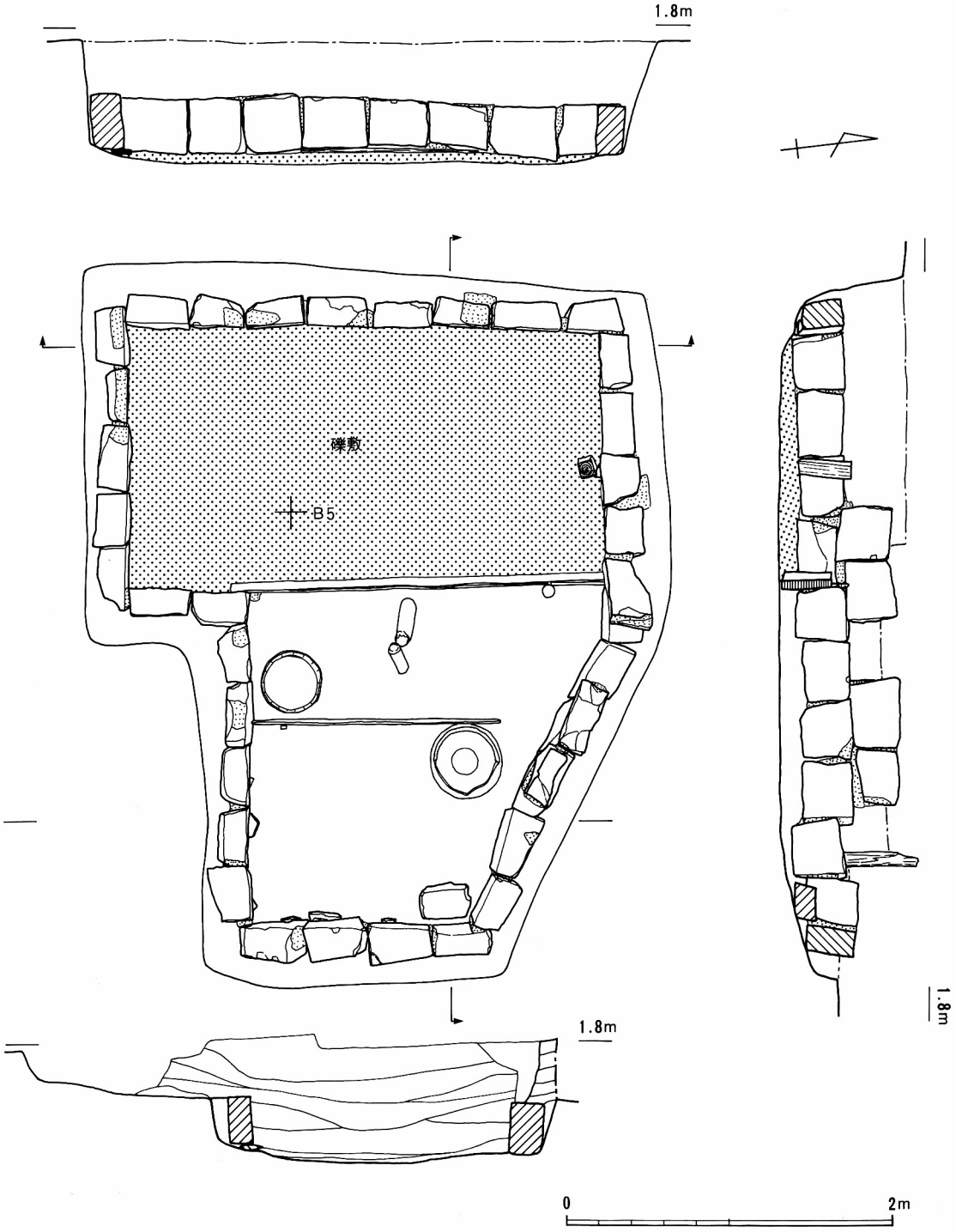
直径2.5m程の不整形な円形の掘り方を持ち、中央部に底を抜いた桶を重ねて埋め、井側としている。桶の口径は65㎝、底径は55㎝、高さは98㎝で、12㎝ほど重ね、５段まで確認できたが、以下は不明である。



第22図　SE3001



第23図　SG2001



第24図　SG2002

池

ＳＧ２００１

建物跡東側に位置する。調査区の北方に続くため全容は明らかではないが、大半は調査区内にふくまれていると考えられる。ＳＥ３００１を埋めて造っている。Ｌ字形に曲がり、ＳＤ２０１１を一部利用して排水施設としている。Ｌ字形に曲がり、所々に石を配し、杭を打ち込んで護岸としている。中央付近には島状の高まりを作り杭列で囲んでいる。ちょうどこの島の部分で両岸部と板で仕切り、池を分割している。池の排水部も板で仕切り、水位調節機能を持たせている。溝内には土管を埋めてある。この土管はＳＤ３０１１のものと同一の材料を使用しており、この施設がＳＷ２００１やＳＰ２００１と同時に造られたものである可能性を示している。

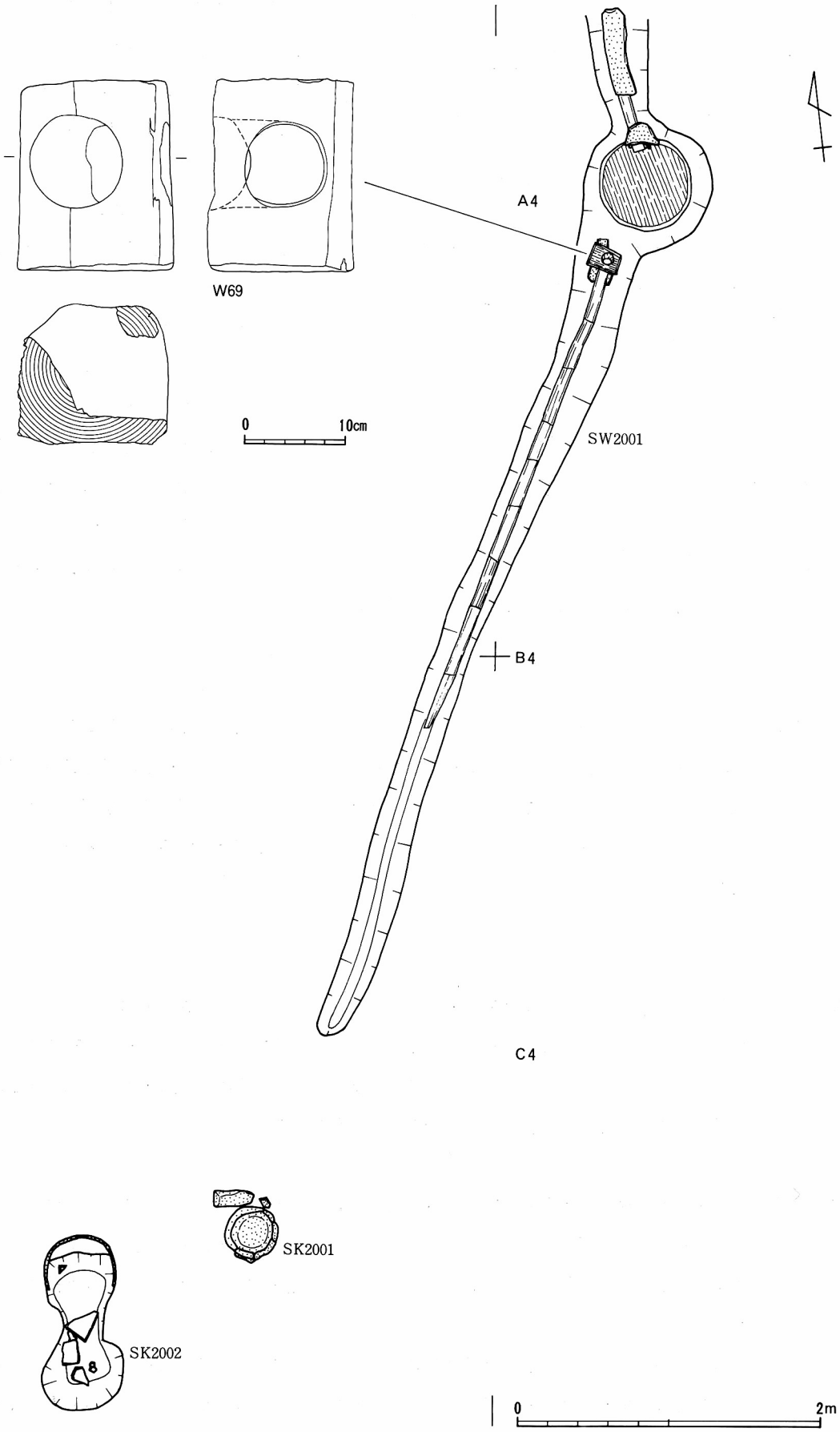
ＳＧ２００２　ＳＧ２００１の西岸を一部壊して築かれている石組み施設である。平面の形態は、2.9m×1.6mの長方形の長辺に下底2.2m、上底1.3m、高さ２mの台形を取りつけた形をしている。掘り方は石組みよりふたまわり大きく同形に掘られており、東西長4.4m、南北長3.6mである。石組みはいわゆる間地積みが行われており、表面の大きさが36cm×30cm、厚さが20cm程度の切り石を使用している。一段目に34個の石を使用し隙間は漆喰で固められている。二段目は大半が崩れているため北面の４個が遺存するに過ぎない。さらに上に石積みがあったようである。裏込め部には、石を加工した際に出たと考えられる石の破片が多数詰まっていた。

石積みの内部は、先の長方形部分と台形部分が板で仕切られている。二段に積まれていた。

上水道

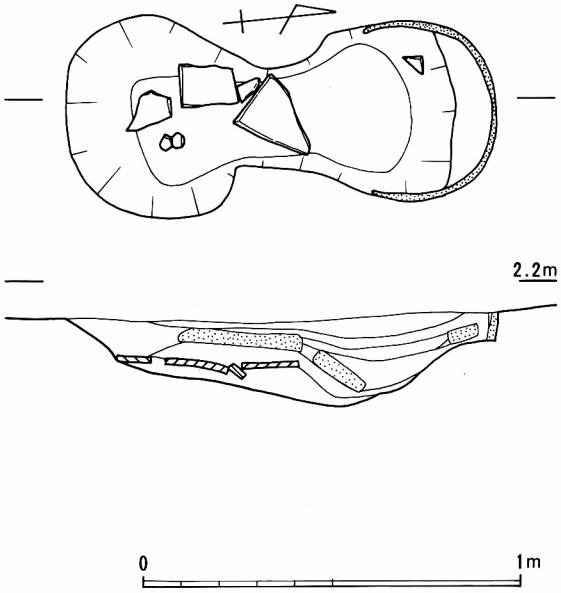
ＳＷ２００１　建物跡と池との間で見つかった水道である。水道管は、節を抜いた竹管を使用してこれを溝状に掘り窪めた地面に埋めこみ、砂で埋めてある。この遺構の特徴的なのは、その結合部にある。北壁から調査区内につながった竹管は、直径８cmの土管と漆喰でつながれ、その土管は地下に埋めた径60cmの木桶の底側面に穴をあけて結合し漆喰で固めてある。木桶は底部を除いて残存していないので断定はできないが、上端部近くから斜め下方に竹管を繋いであったのだろう、桶底から20cm離れたところに、竹管を繋ぐための継ぎ手に使う木製の枕が検出されている。この枕は、檜材を使用した四角柱形の材の側面に穴を穿ち、竹管を差し込んで継ぎ手とするもので、この枕はその角度がおよそ120度をなし、桶側に向かって上方を向けてある。この孔に桶上部から竹管を繋いであったものと考えられる。同様の構造の水道施設は、彦根城水道絵図に記されている他、大阪市住友銅吹所跡で見つかっている。

この水道管は継ぎ手から４mのところまでしか残存していないが、その方向を延長していくと、2.6m先に漆喰土坑（ＳＫ２００１）があり、ここに達していたことは容易に推察できる。おそらくこの土坑が水道に伴う施設なのであろう。なお、ここから3.5m東の地点に排水用土管が埋設されており、水道水はそちらに流されていたのであろう。



第25図　SW2001

ＳＷ１００１　調査区の南東部で壁面に沿って東西方向に検出された水道である。東から真っ直ぐ延びてきた水道管は一か所継ぎ手を経由してさらに西へ延び、次の継ぎ手へと至っている。この間の竹管の長さは８ｍである。第２の継ぎ手は、結合部の孔がほぼ直角方向を向いており、ここから南へ方向を変えていることがわかる。水道管の埋設は溝掘りによってはいるが、先のＳＷ２００１のように砂を使わず、掘った土をそのまま埋め戻しに使用している。また、継ぎ手に使用した材質も二葉マツであり、水道管自体の遺存状態も良好であることから判断しても年代的に新しいものと考えられる。おそらくは明治時代以降のものであろう。



第26図　SK2002

下水道

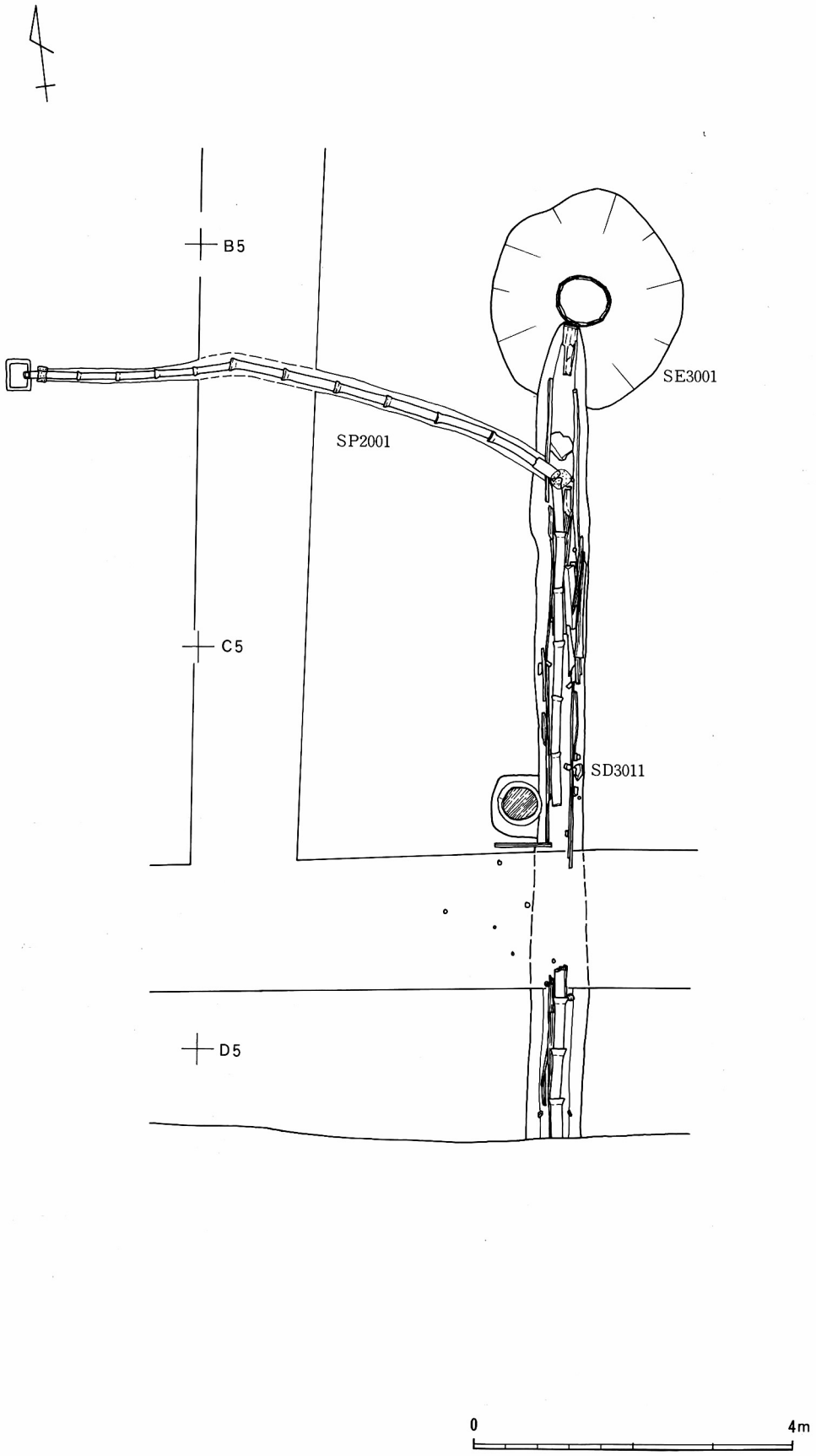
ＳＰ２００１　排水用の土管である。おそらくＳＷ２００１の排水を目的として敷設されたものであろう。39cm×31cmの長方形の漆喰塗りの枡を基点に、東に向かって直径８cm長さ50cmの備前焼の小型の土管を６本、直径11.5cm、長さ68cmのやや生焼けの土管を７本繋ぎ、ＳＥ３００１の排水用の溝ＳＤ３０１１に埋設した直径14cm、長さ68.5cmの備前焼の大型土管に接続している。

土坑

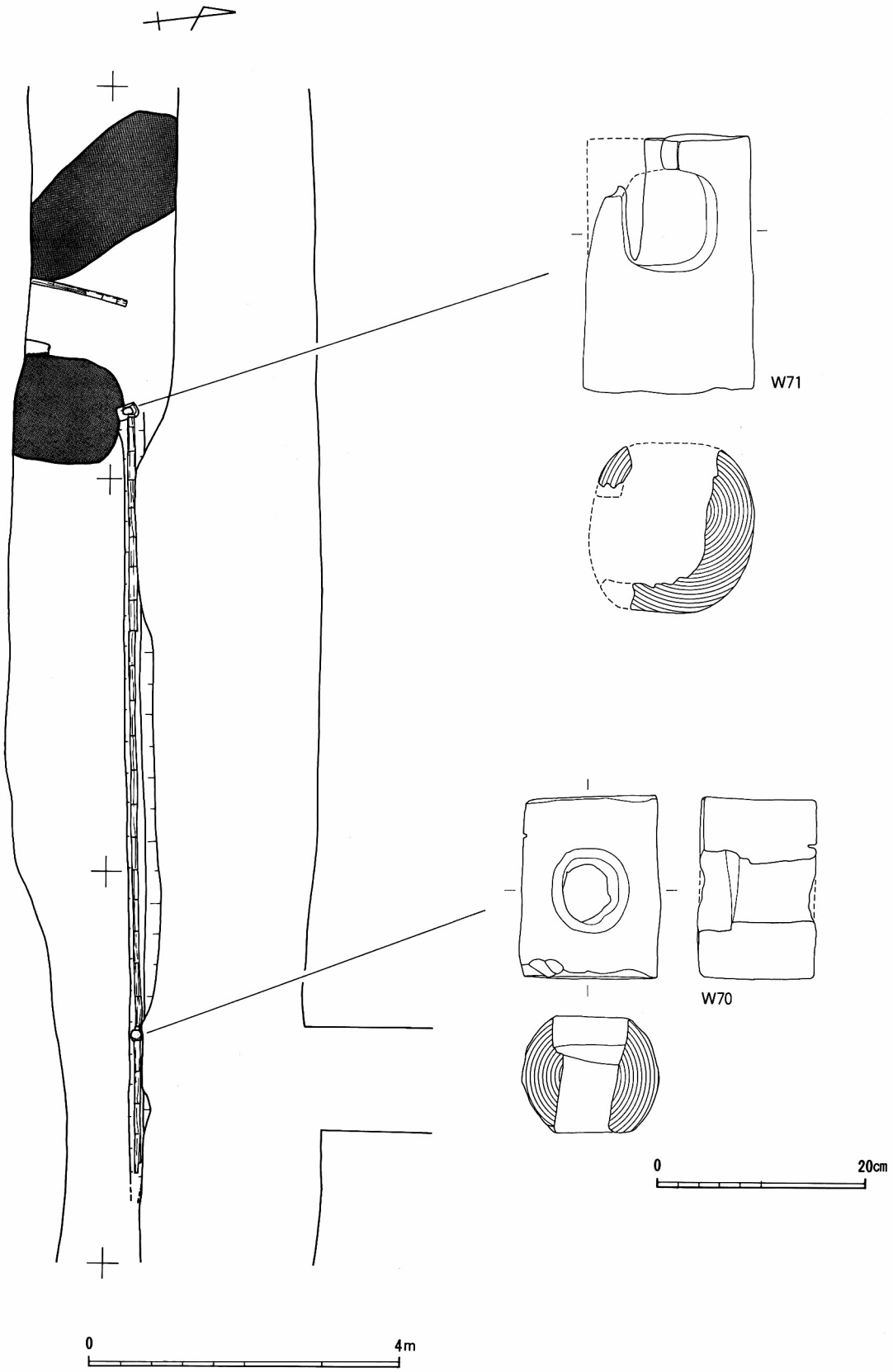
ＳＫ２００１　直径35cmの漆喰塗りの土坑である。上部は破壊されており、高さは不明であるが、円筒形をなしていたようである。建物推定地の南東部に、ＳＫ２００２と並んで存在する。また、水道遺構ＳＷ２００１の延長線上にも位置している。位置と形態とから判断すると、水道の水を受ける水溜か、もしくは排水用の集水枡と考えられる。

ＳＫ２００２　建物跡推定地の南東隅部に位置する焼土坑である。平面形態は隣接する円形土坑をつなげ合わせたような瓢箪形をしている。規模は、長さ115cm、幅は53cm、深さは25cmである。北側の円弧に沿って漆喰塗りの壁が立ち上がる。土坑内には瓦片が敷かれ、炭と漆喰片で埋められていた。

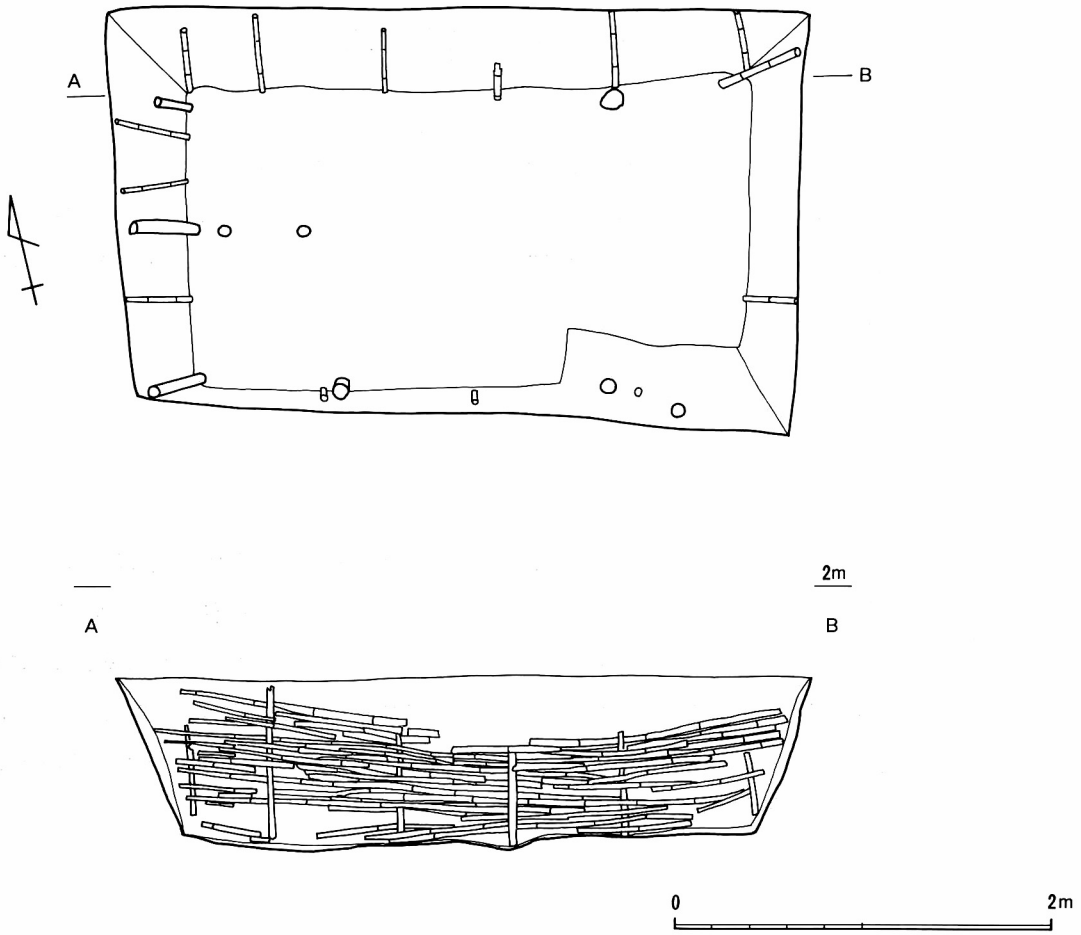
本来の地面からするとかなり掘り込まれており、通常のかまどとは考えにくい。すぐ脇までわざわざ水道をひいてきているところからすると、いわゆる五右衛門風呂の炊口である可能性が指摘できる。



第27図　SD3011とSP2001



第28図　SW2002



第29図　SK2011

○土坑

ＳＫ２０１１　武家屋敷の北西隅の境界溝に隣接した場所に位置する、長さ3.6m、幅2.1m、深さ0.9mの平面長方形の掘り込みを持つ土坑である。断面の形状は逆台形をなし、坑底の大きさは３m×1.6mである。この土坑の特徴は、周囲の壁に竹囲いをしていることである。壁面の傾斜方向に丸竹を杭状に打ち込み、細く割った竹を交互に編み込んで壁面に密着させている。

南面東隅部分は壁面をややスロープ状に出っ張らせている。この部分には竹組みがなされておらず、木杭を打ち込んでいることから、昇降施設を設けていた可能性がある。

この遺構はＳＤ３００４を切っており、遺構の構造は、貯蔵施設的であるが、当該地区は地下水位が高い上に排水用の溝に近接しているところから、貯蔵施設とは考え難い。

V　中ノ町地区の調査

中ノ町地区は、ＪＲ明石駅と山陽電車明石駅との間に挟まれた駅前広場の地区である。発掘調査は４区に分けて実施した。東から駅前花壇にあたるＡ地区、タクシー乗り場東半部にあたるＢ地区、タクシー乗り場西半部にあたるＣ地区、駅前広場にあたるＤ地区の４地区である。

Ａ地区

層序

Ａ地区は、花壇となっていたため、20cmの盛土がある。その下層には、80cm前後の盛土・整地層がある（１層)。この層は明治時代以後の層である。２層は明治時代初期の耕作土であるが、分布する範囲は調査区の北西部に限られる。３層は江戸時代の攪乱層である。この層は北西部では２層に攪乱されているため存在せず、南半部に限って遺存している。４層は中世以前の堆積層で、元々の地形が自然堤防上に立地しているため複数面の水田土壌層が認められる。

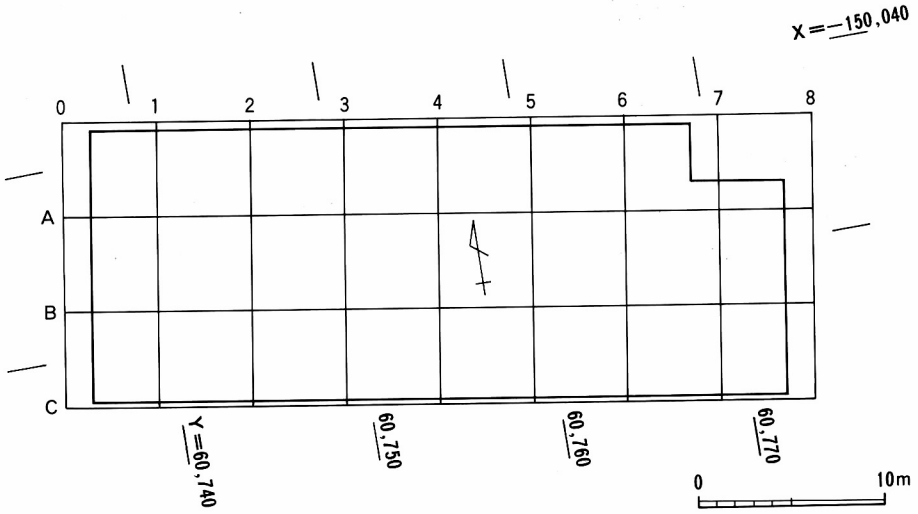
遺構

Ａ地区で検出された遺構には、屋敷境溝、排水溝、建物跡、池、井戸、土坑、石敷遺構がある。

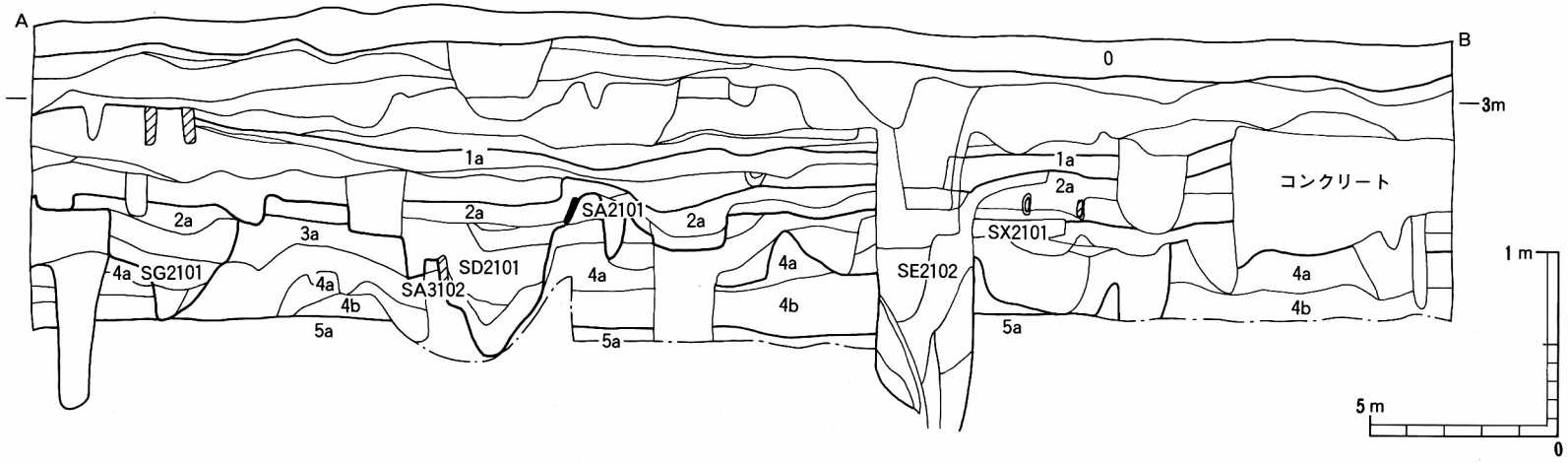
屋敷境溝

ＳＤ２１０１・ＳＤ３１０１

調査区の中央を南北に流れる溝である。２条ないしは３条の溝が重なりあっており複雑

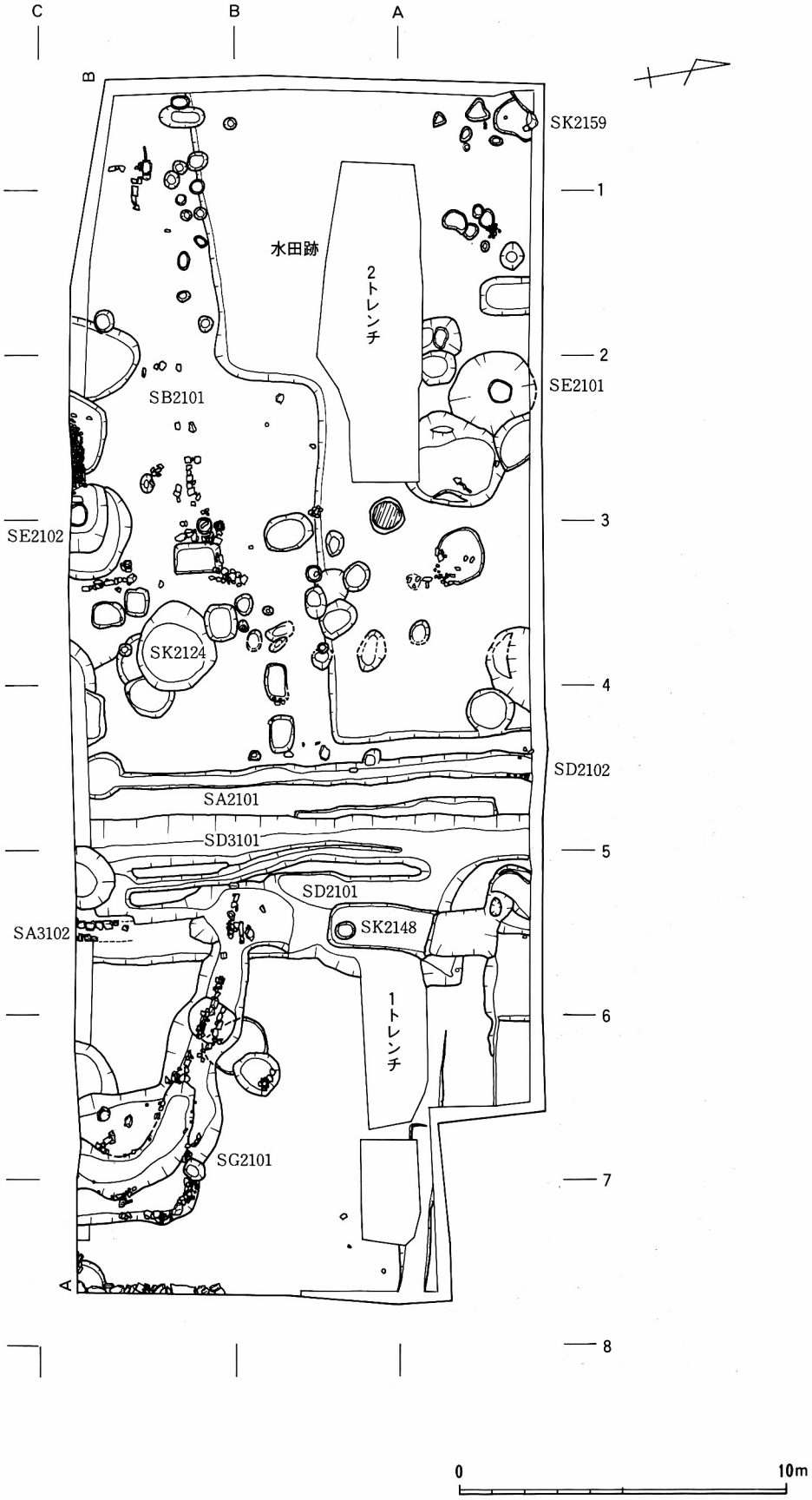


第30図　中ノ町Ａ地区地区割図

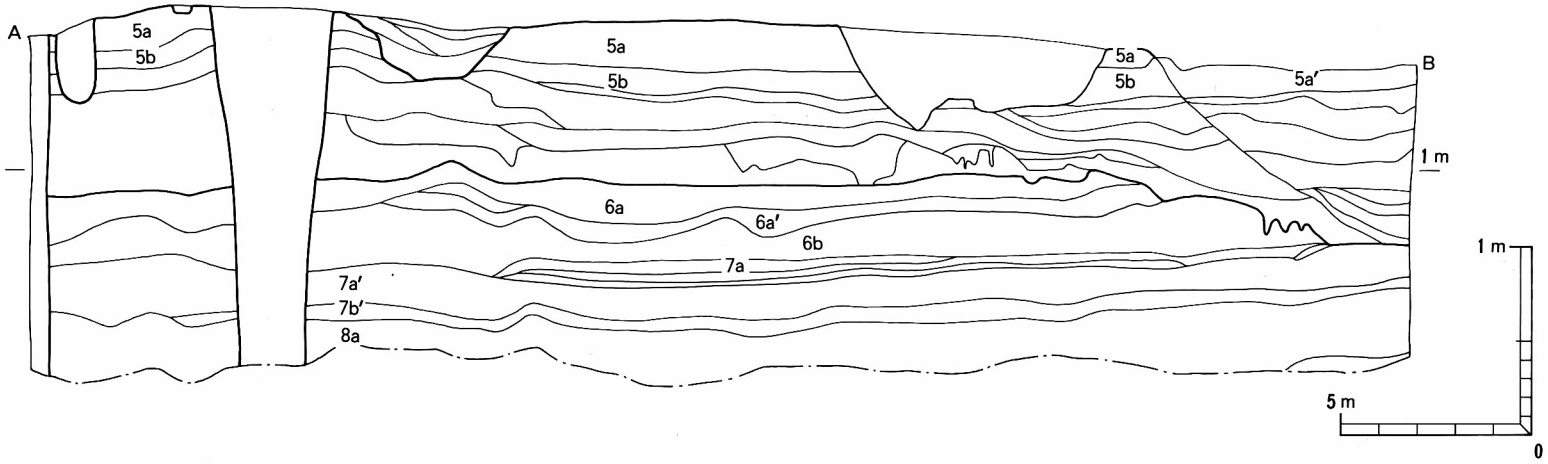


1a．シルト質細砂 N 4/0 灰
2a．シルト質細砂 7.5Y 7/2 灰白
3a．シルト質中砂 7.5Y 7/2 灰白
4a．シルト質極細砂 5Y 6/1 灰
4b．シルト質極細砂 5Y 8/1 灰白
5a．極細砂質シルト 2.5Y 5/1 黄灰

第31図　中ノ町A地区南壁土層断面図



第32図　中ノ町A地区平面図



5a．シルト質細砂 10YR 5/1 褐灰
5a′．シルト質細砂 2.5GY 7/1灰白
5b．中砂 10Y 7/1　灰白
6a．中砂 5Y 7/1 灰白
6a′．シルト質粗砂～シルト質中砂 5BG 6/1　青灰　植物遺体まじり
6b．シルト質粗砂～シルト質中砂 5BG 6/1　青灰
7a．シルトまじり中砂 5BG 6/1　青灰
7a′．シルト質粘土 5Y 5/1 灰
7b．シルト質粘土 5Y 5/1 灰
7b′．粘土質シルト 2.5GY 8/1　灰白
8a．シルト質粘土 5Y 5/1 灰

第33図　中ノ町A地区南壁下層断面図

である。発掘調査時には最も西側の溝を新しいものと考え、当初東側にあった溝を西にずらして掘り直したものと判断していたのだが、出土遺物を検討した結果、全く逆であることが判明した。おそらく、幅２m、深さ55m程度の溝であろう。このうち、西側の古い溝をＳＤ３１０１、東側の新しい方をＳＤ２１０１としている。また、ＳＤ２１０１は調査時には上下２層を別の溝と考えて掘削したのだが、こちらのほうは遺物に全く年代差が認められず、同一のものであると考えられる。

遺構の性格は、中ノ町の通りに面する５邸のうち最も東側に位置する屋敷と２番目の屋敷とを区画する溝である。

排水溝

ＳＤ２１０２　ＳＤ２１０１の西肩部に平行して、幅50cm、深さ20cmの溝があり（ＳＤ２１０２）、それとの間に幅80cmの平坦面が南北に長く続いている（ＳＡ２１０１）。恐らくは築地状の塀の基礎とそれに伴う雨落ち溝であろう。溝の西側に接して３個の偏平な石が１m間隔で並んでいる。何らかの建物等の礎石であろう。

築地塀跡

ＳＡ２１０１　ＳＤ２１０１とＳＤ２１０２に挟まれた幅80cmの平坦面である。西側の屋敷地の地面からは２～３cm高くなっており、築地等の塀の基礎部分であると考えられる。調査区南端から、南面する道路北端部までは約８mである。

ＳＡ２１０２　ＳＤ２１０１の東肩部に位置する。外側に面を向けた２列の石組が幅60cmで調査区の南壁に始まり北に1.6m延びたところで消えている。本来これ以北にまでつらなっていたかどうかはわからない。南面する中ノ町の通りから続いている屋敷境の溝に面する築地塀の基礎である。

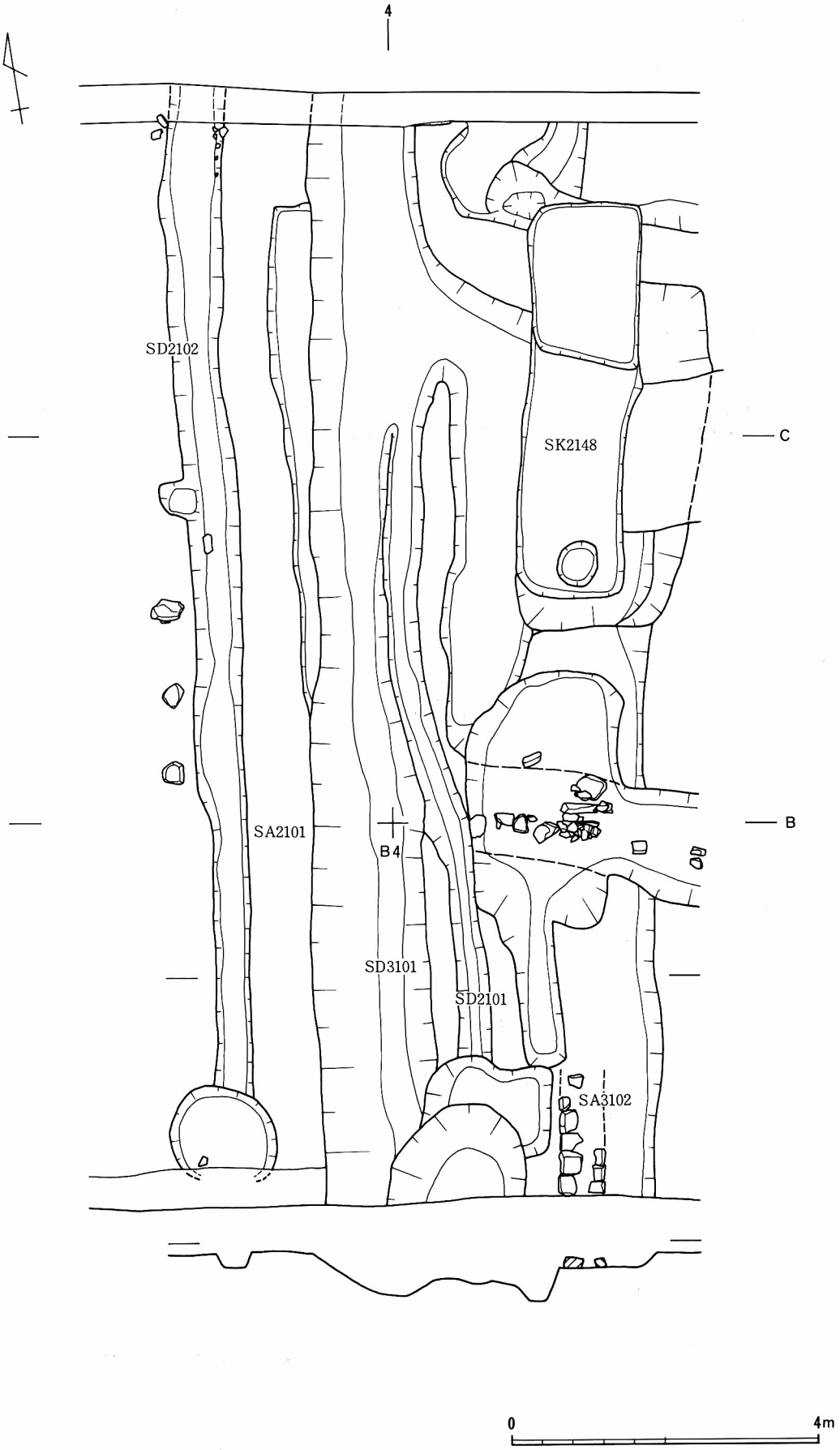
建物跡

調査地の南西部に建物跡が想定できるが、礎石が残存していないので、建物の構造や規模は不明である。わずかに、部分的に残された石列からその存在が確かめられる。調査区の南壁部では建物に伴う石敷が見つかっている。2.1m×0.4mの範囲に径10cm前後の河原石を敷き詰めたもので、井戸脇の洗い場な部分の床部かもしれない。

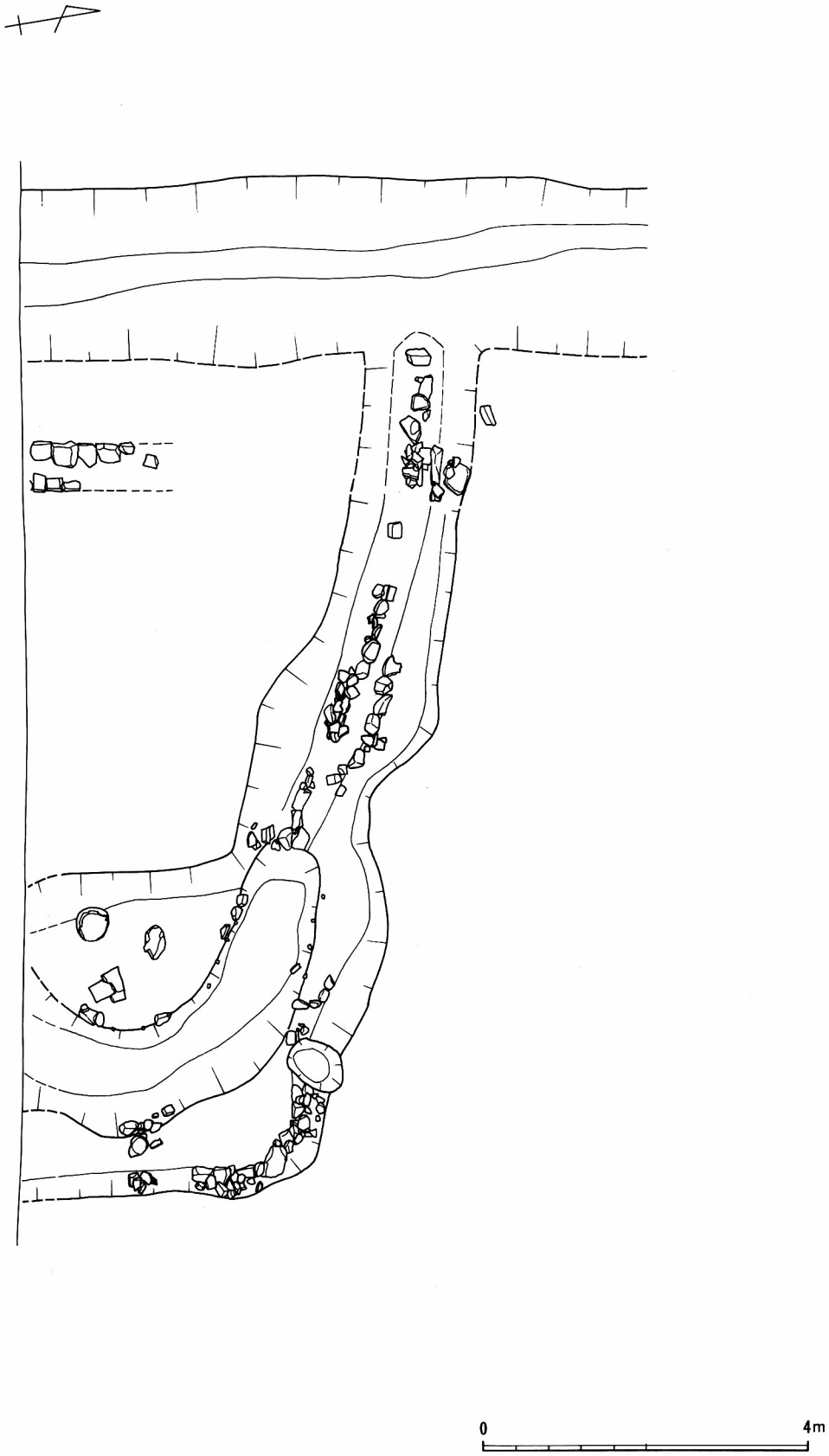
池

ＳＧ２１０１　調査地区の南東部に位置する。屋敷内では、南側の道路と西側の屋敷境溝とに接する南西隅部に位置するものと考えられる。

検出範囲では、東西幅　４m、深さ30cmの方形の掘り込みの北西部から排水溝が延び、屋敷境溝へとつながっている。溝は、幅1.4m、深さ45cmの断面箱形を呈しており、方形の掘り込みの内側にまでも続いて、２段に掘り込まれた状態になっている。掘り込みの北東肩部には15～20cmの比較的小さな石が組まれており、排水溝の両側にも石組が残存して



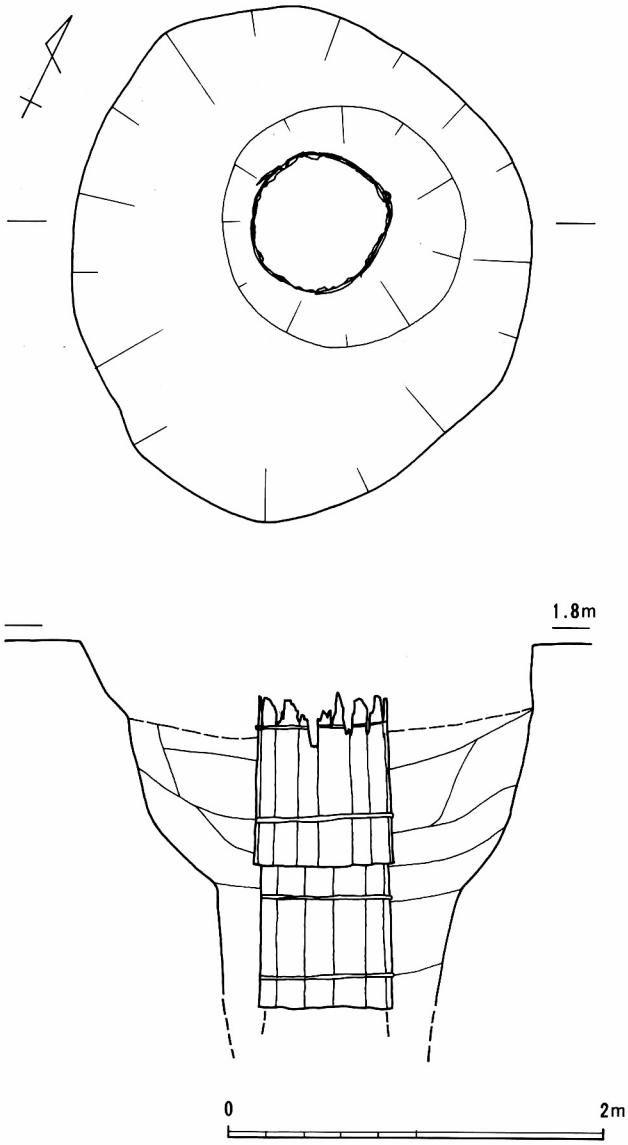
第34図　屋敷境溝と塀跡



第35図　SG2101

いる。下段の溝の両肩部には直径４㎝の杭列が打ち込まれている。

これらの特徴から、この遺構は池泉と考えられよう。



第36図　SE2101

井戸

ＳＥ２１０１

直径2.5mの円形の掘り方の中に桶を重ねて埋め井側とした桶積み井戸である。桶の大きさは、口径75㎝、底径65㎝、高さ90㎝で、底を抜き伏せて積み重ねる。重なった部分は15㎝ほどである。５段分まで確認できたが、６段目があったかどうかはよく判らない。５ないしは６段積みであったようである。遺構面からの深さは５mに達しており、ちょうど湧水層にあたるところからも妥当なところであろう。

ＳＥ２１０２

直径2.9mの円形の掘り込みを持つ桶積み井戸である。当初は土坑と考えて調査を進めていたのだが、遺構面から２m下がったところで直径70㎝の桶を利用した井側が検出され、井戸であることが判明した。

出土遺物からみた年代は19世紀代にまで達しており、一連の明石城跡関連の発掘調査で検出された井戸としては最も遅くまで使用された井戸である。

土坑

ＳＫ２１２４　円形の掘り方を持つ土坑である。掘り方の形状はほぼ垂直に円筒形に掘られ井戸に共通しているが、深さが1.2mと浅い。井戸を掘削する途中で何らかの要因で中断したものかもしれない。

ＳＫ２１５９

調査区北西隅で検出された不定形の土坑である。規模は1.4m×1.3mで深さは15㎝である。ごみ穴であろう。年代は17世紀中葉と考えられる。

ＳＫ２１４８

ＳＤ２１０１の東脇に接する土坑である。長さ3.3m、幅1.4mの長方形の掘り方で深さ30cmである。形態から考えると何らかの目的を持った遺構と考えられるが、性格は明らかにできなかった。土坑内からは弥生後期の土器が出土しているが、遺構の年代は江戸時代と考えてよかろう。

水田跡　屋敷境溝を中心にして、調査区の西半部は南半が建物跡、北半部は遺構検出面が約15cm低くなっている。これは明治時代初期に当該地が水田として耕作されていたことによっている。

B地区

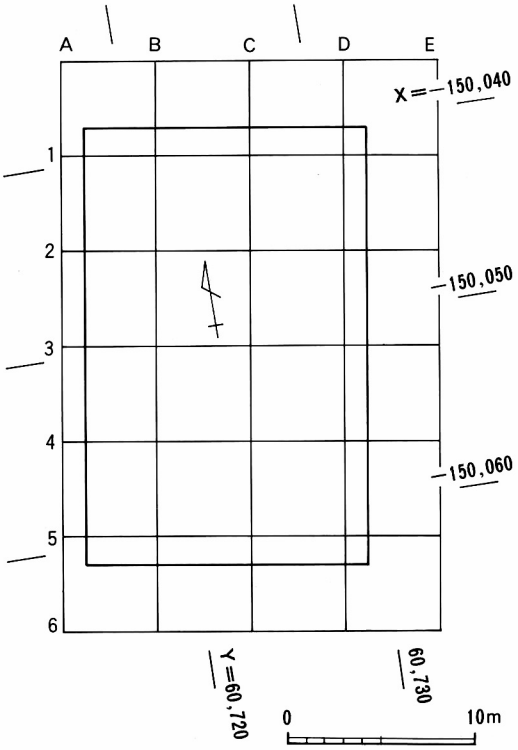
層　序　B地区は駅前のタクシー駐車場として利用されていた場所で、地表面直下には80cmの厚さの整地層がある。その下の旧地表面の地層を取り除くと上層の遺構面に達する。さらに30cm下層まで掘り下げると、下層遺構面に達する。いずれの遺構面もかなり攪乱を受けている。ベース面となっているのは、中世までに形成された自然堤防の堆積土で、やや黄色味がかった灰色のシルト層である。

上層遺構

ＳＡ２２０１　調査区の西端に位置し、南北方向に走る築地基礎である。外側の面を西側に向けた１列の石組が断続的に調査区の北半から南端まで続く。本来北端まで続いていたと考えられる。遺構の性格は屋敷境を画する築地基礎であろう。

ＳＡ２２０２　調査区の西端に位置し、南北方向に走る築地基礎である。外側の面を東側に向けた１～２列の石組がＳＤ２２０４に沿うように部分的に見られる。遺構の性格は屋敷内の区画を画する築地基礎の可能性がある。

ＳＤ２２０２　調査区の北端に位置し、東から西方向に走る溝である。幅は60cm、深さ30cmと規模は小さく、断面の形状はU字形をなす。３層上面で検出され、ＳＤ２２０２の西側を南北方向に走るＳＤ２２０１に直接取り付き、ＳＤ３００１と一体となって機能していたと考えられる。遺構の性格は、排水溝であり、なおかつ、屋敷境を画する溝であろう。



第37図　中ノ町B地区地区割図

ＳＤ２２０１

調査区の北西端に位置し、北から南方向に走り途中で西方向に屈曲する溝である。幅は60cm、深さ30cmと規模は小さく、断面の形状はU字形をなす。３層上面で検出され、ＳＤ２２０１の東側を東西方向に走るＳＤ２２０２に直接取り付き、ＳＤ２２０１と一体となって機能していたと考えられる。屈曲する部分に、水門がある。水門は、角材を打ち、その間に板材を２段に差し込んでいる。水量調整の水門と考えられる。遺構の性格は、排水溝であり、なおかつ、屋敷境を画する溝であろう。

ＳＤ３２０１

調査区のほぼ中央に位置し、北から南方向に走る溝である。幅は50～130cm、深さ25cmと規模は小さく、南半で幅が狭くなり、断面の形状はU字形をなす。遺構の性格は、排水溝であろう。

ＳＤ２２０４　調査区の西端に位置し、南北方向に走る溝である。幅は1.4cm、深さ40cmと規模は大きく、断面の形状は箱形をなす。ＳＡ２２０２がに部分的に西側に直接取り付くように見られる。遺構の性格は排水溝と考えられ、また、屋敷内の区画を画する溝の可能性もある。

ＳＫ２２０１　調査区北西部で検出された土坑である。調査区端に引っ掛かった状態で検出されたため、遺構の全容は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、深さ35cmを測る。

ＳＫ２２０２　調査区北西部で検出された土坑である。直径50cm、深さ20cmの円形の土坑で、ＳＤ３００１と切り合って検出された。

ＳＫ２２０３　調査区北東部で検出された土坑である。調査区端に引っ掛かった状態で検出されたため、遺構の全容は不明であるが、平面形は略円形を呈すると考えられ、深さ50cmを測る。

ＳＫ３２０２　調査区のほぼ中央部で検出された土坑である。平面形は1.8m×1.7mの隅丸方形を呈し、深さは45cmを測り、ＳＤ３２０１と切り合って検出された。

ＳＫ２２０５　調査区のほぼ中央部、やや南よりのＳＫ３２０２の南側で検出された土坑である。直径１m、深さ40cmの円形の土坑で、ＳＤ３２０１と切り合って検出された。

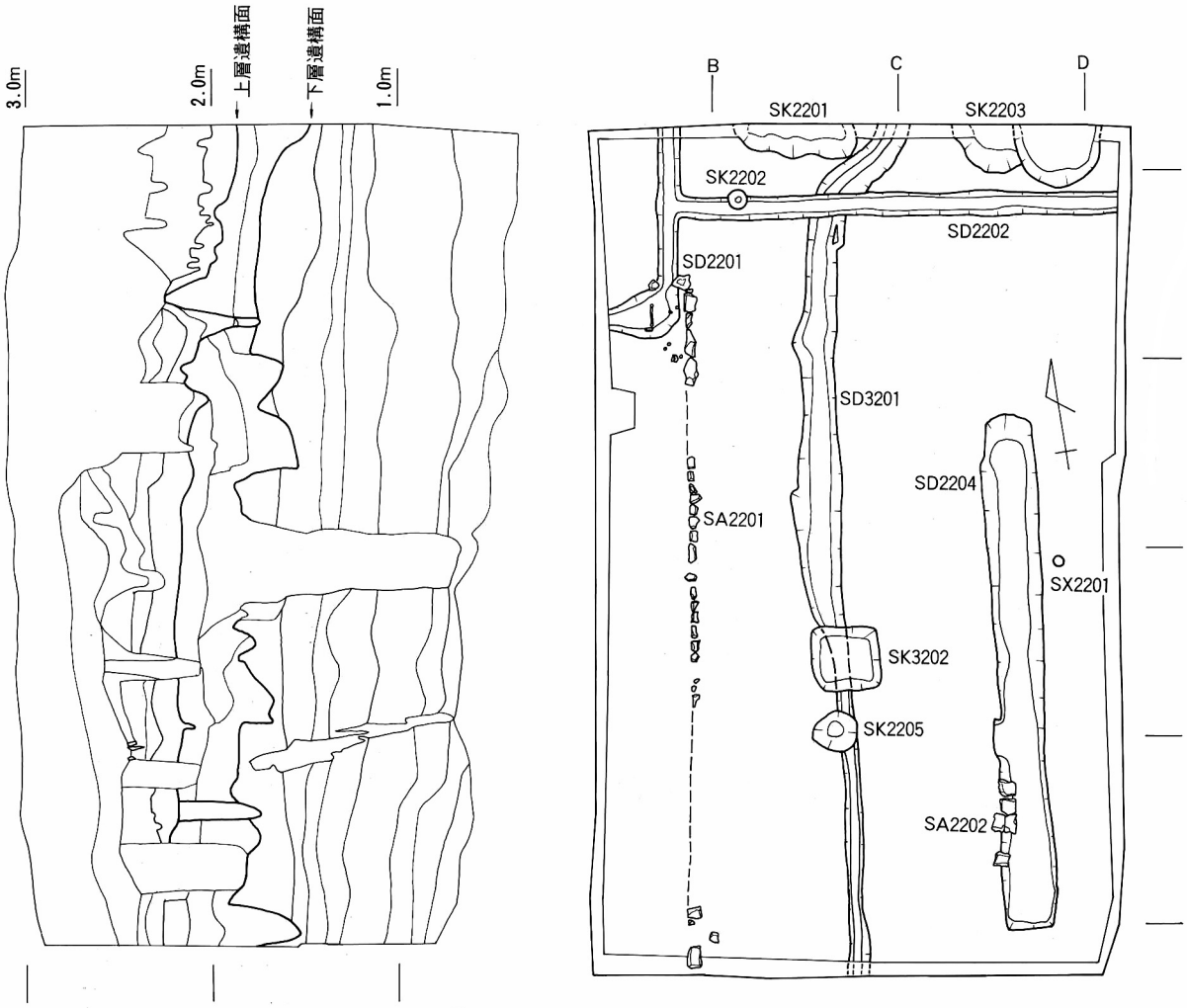
下層遺構

ＳＤ３２０１　調査区のほぼ中央部に位置し、南北方向に走る溝である。幅50cm、深さ25cmと規模は小さく、断面はＵ字形をなす。調査区の北端から中央付近までで見られる溝で、遺構の性格は排水溝と考えられ、また、屋敷内の区画を画する溝の可能性もある。

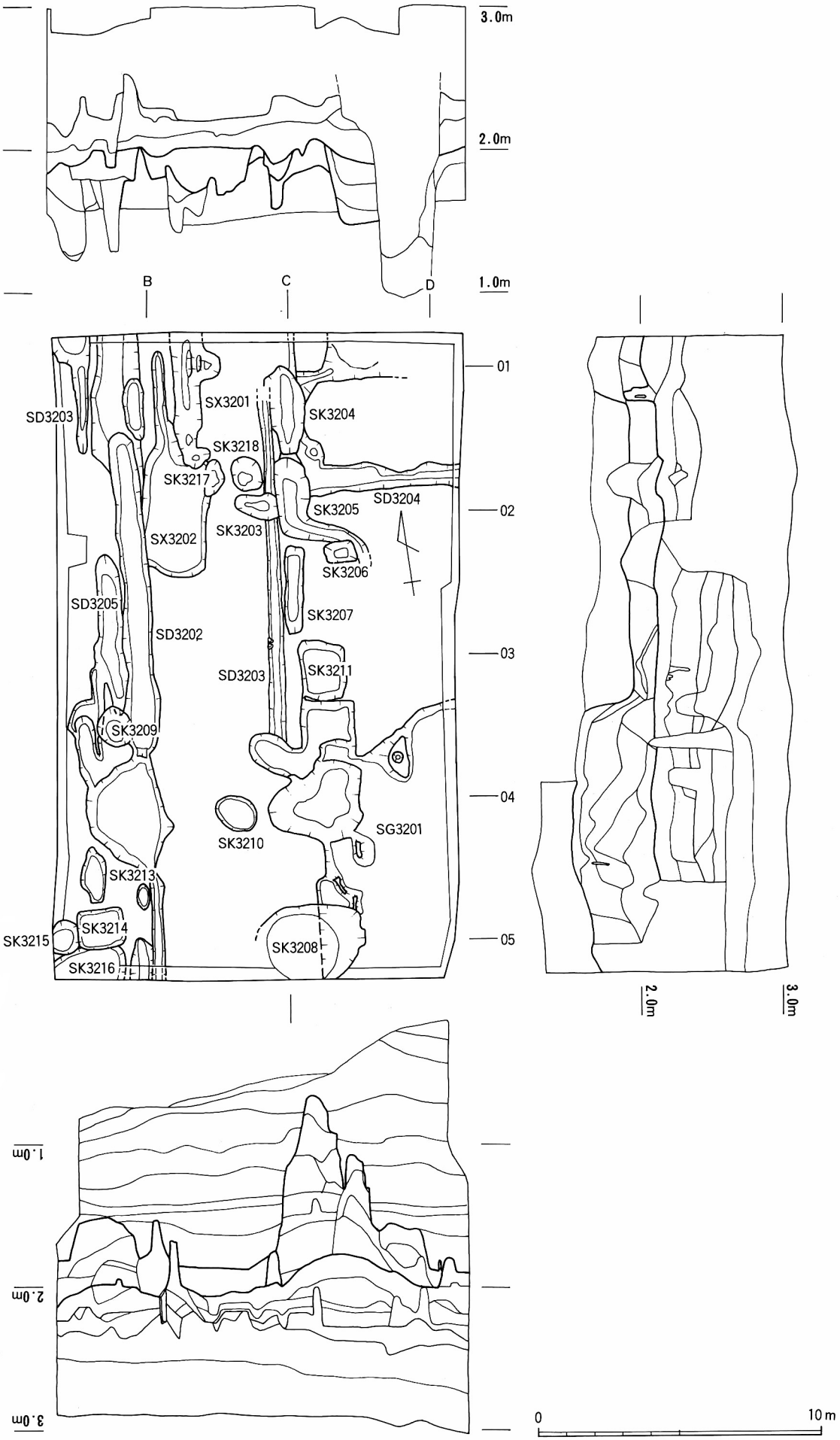
ＳＤ３２０２　調査区の西端に位置し、南北方向に走る溝である。幅は90cm～110cm、深さ50cm～80cmと規模は大きく、断面の形状はＵ字形をなす。４層上面で検出され、幅は南半で一度2.7mと広くなり、南端で50cmに狭まる。広くなった部分は、流水によって削られて溝幅が拡がったか、もしくは、当初から広く掘削されていたかは不明である。後者の場合、溝の流水の水量調整もしくは水高調整の機能が考えられよう。遺構の性格は、排水溝であり、なおかつ、屋敷境を画する溝であろう。

ＳＤ３２０３　調査区の北西部に位置し、南北方向に走る溝である。幅30cm、深さ40cmと規模は小さく、断面はＵ字形をなす。調査区の北端から４m検出されたのみで、途中で切れてしまう。遺構の性格は排水溝であろう。

ＳＤ３２０４　調査区の東北部に位置し、東西方向に走る溝である。幅90cm、深さ８cmと規模は小さく、断面は皿形をなす。ＳＫ３２０４・ＳＫ３２０５と切り合い、西端は不明であるが、遺構



第38図　中ノ町B地区平面図(上層)と西壁断面図



第39図　中ノ町B地区平面図(下層)と北・東・南壁断面図

の性格は排水溝と考えられ、また、屋敷内の区画を画する溝の可能性もある。

ＳＤ３２０５　調査区の西端中央部付近に位置し、南北方向に走る溝である。幅は90cm～110cm、深さ35cm～40cmと規模は大きく、断面の形状は箱形をなす。ＳＤ３２０２と並行して走り、ＳＤ３２０２の付け替えとも考えられるが、南端はＳＤ３２０２およびＳＫ３２０９と切り合い、不明瞭になる。遺構の性格は、排水溝であり、なおかつ、屋敷境を画する溝であろう。

ＳＧ３２０１　調査区の南東部に位置し、東西4.5m×南北7.5mの不正形を呈する池状遺構である。深さは25cmと浅い。

ＳＫ３２１７　調査区の北部中央付近に位置し、東西0.7m×南北1.3m、深さ20cmを測る楕円形の土坑である。

ＳＫ３２１８　調査区の北部中央付近に位置し、直径１m、深さ40cmを測る円形の土坑である。

ＳＫ３２０３　調査区の北部中央付近に位置し、東西1.5m×南北90cm、深さ30cmを測る楕円形の土坑である。ＳＤ４００３およびＳＫ４００５と切り合い関係がある。

ＳＫ３２０４　調査区の北部中央付近に位置し、東西1.3m×南北3.1cm、深さ15cmを測る楕円形の土坑である。ＳＤ４００２と切り合い関係がある。

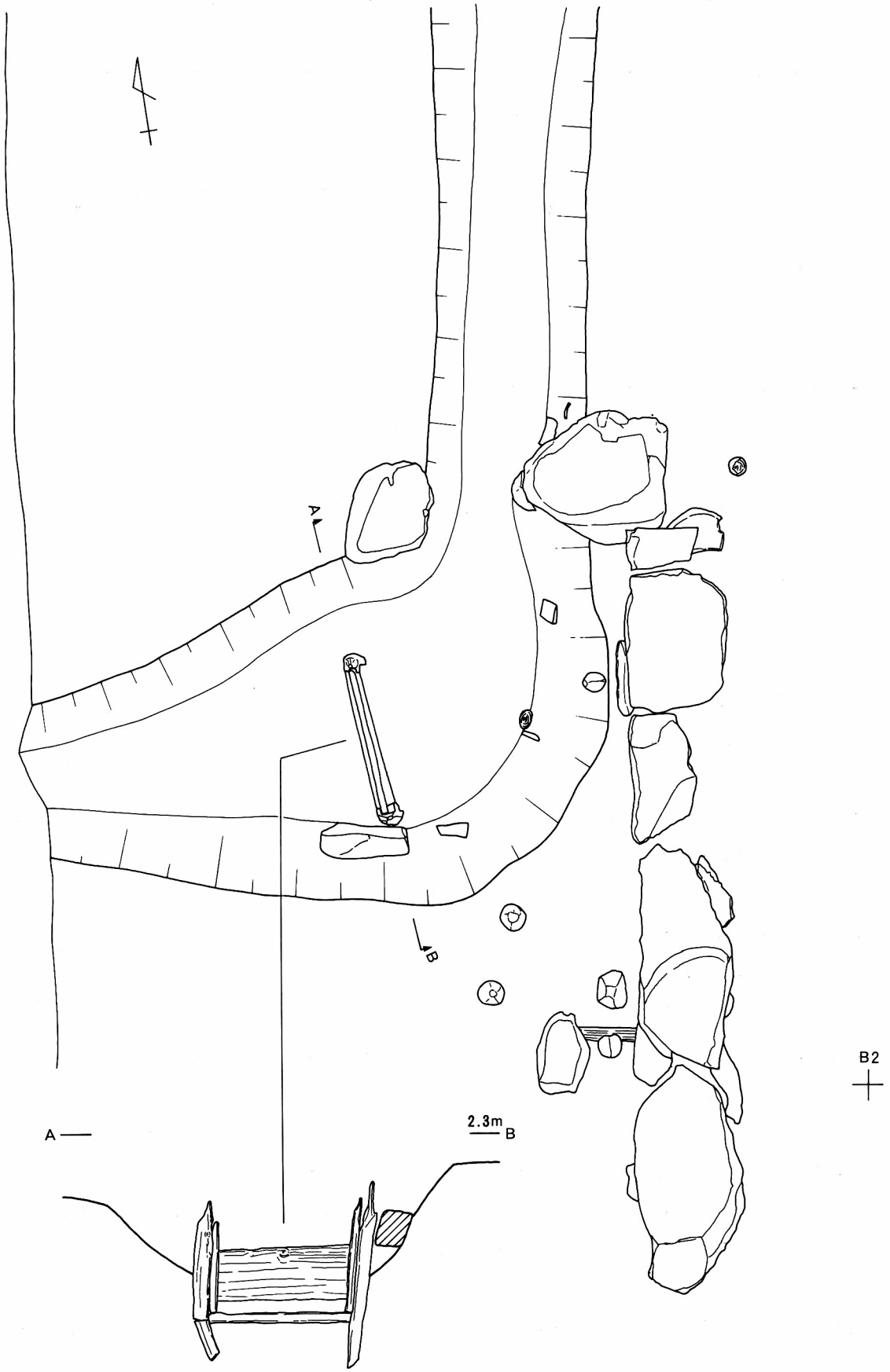
ＳＫ３２０５　調査区の北部中央付近に位置し、東西1.2m×南北2.7m、深さ60cmを測る不正形の土坑である。ＳＤ３２０２・３２０３およびＳＫ３２０３・３２０６と切り合い関係がある。

ＳＫ３２０６　調査区の東部中央付近に位置し、東西110cm×南北70cm、深さ40cmを測る隅丸方形の土坑である。ＳＫ３２０５と切り合い関係がある。

ＳＫ３２０７　調査区の東部中央付近に位置し、東西60cm×南北３m、深さ30cmを測る隅丸長方形の土坑である。

ＳＫ３２０８　調査区南端中央付近で検出された井戸である。調査区端に引っ掛かった状態で検出されたため、遺構の全容は不明であるが、平面形は円形を呈すると考えられ、深さ1.2m以上を測る素掘りの井戸である。ＳＧ３２０１と切り合い関係がある。

ＳＫ３２１１　調査区の東部中央付近に位置し、東西1.6m×南北2.1m、深さ15cmを測る隅丸方形の土坑である。



第40図　SD2201と堰

ＳＫ３２１２　調査区の東部中央付近に位置し、東西60㎝×南北90㎝、深さ1.2ｍを測る楕円形の土坑である。

ＳＫ３２１３　調査区の南西部に位置し、東西90㎝×南北２ｍ、深さ35㎝を測る楕円形の土坑である。

ＳＫ３２１４　調査区南西端に位置し、東西1.7ｍ×南北1.4ｍ、深さ30㎝を測る隅丸長方形の土坑である。ＳＫ４０１５およびＳＫ４０１６と切り合い関係がある。

ＳＫ３２１５　調査区南西端で検出された土坑である。調査区端に引っ掛かった状態で検出されたため、遺構の全容は不明であるが、平面形は円形を呈すると考えられ、深さ20㎝を測る。ＳＫ３２１４およびＳＫ３２１６と切り合い関係がある。

ＳＫ３２１６　調査区南西端で検出された土坑である。調査区端に引っ掛かった状態で検出されたため、遺構の全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると考えられ、深さ35㎝を測る。ＳＫ３２１４およびＳＫ３２１５と切り合い関係がある。

C地区

層　序　C地区は、工事基礎部分のみを対象としたトレンチ調査にとどまった。

地表下１ｍまでは、攪乱と整地層で、ほとんど遺構面まで達していた。遺構面自体は基本的に１面だが、遺構の新旧で上下層に分けられる。

ＳＤ２３０１　Ｉｂトレンチの南端に位置し、南東から北西方向に走る溝である。幅は40cm、深さ10cmと小規模で、断面の形状は浅い皿状である。２層上面で検出され、ＳＤ２３０１の北側を同方向に走るＳＸ２３０１と同時期と考えられる。遺構の性格は排水溝であろう。明石城Ⅳ期の年代が与えられる。

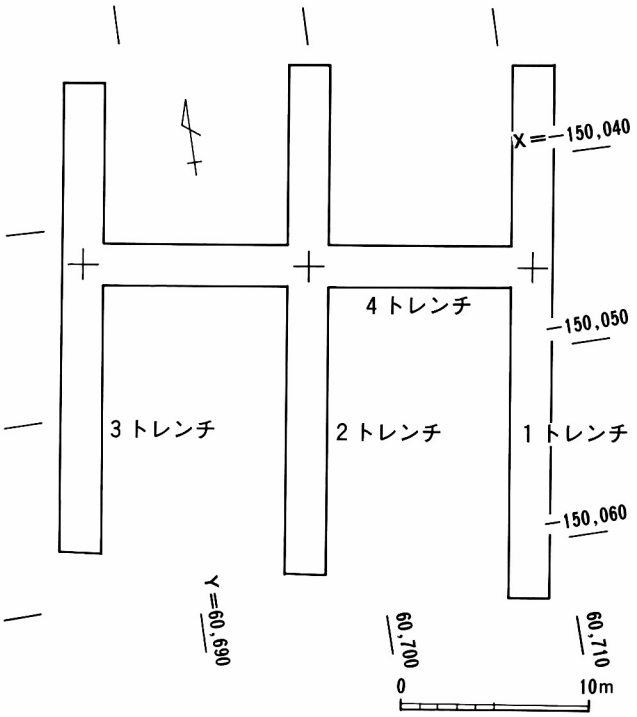
ＳＤ２３２１　Ｖｂトレンチの中央を南北方向に走る溝である。幅は2.9m、深さは56cmと規模は大きく、断面の形状はＵ字形をなす。溝底は掘り直しのためか窪みを持つ。２層上面で検出され、埋土は上下２層に分かれる。

この溝の南北方向への展開は、調査区外のため不明であるが、溝の規模、形態から判断してＩｂトレンチ北端のＳＤ２３１５と同様の屋敷境溝の性格を持つものと推察される。ＳＤ２３１５との関係については、伴出土器からみる限りにおいてはＳＤ２３１５より古い要素を持つ。しかし検出面は同一であるため、あるいはＳＤ２３１５と同時期のものかもしれない。年代は、17世紀末～18世紀中葉である。

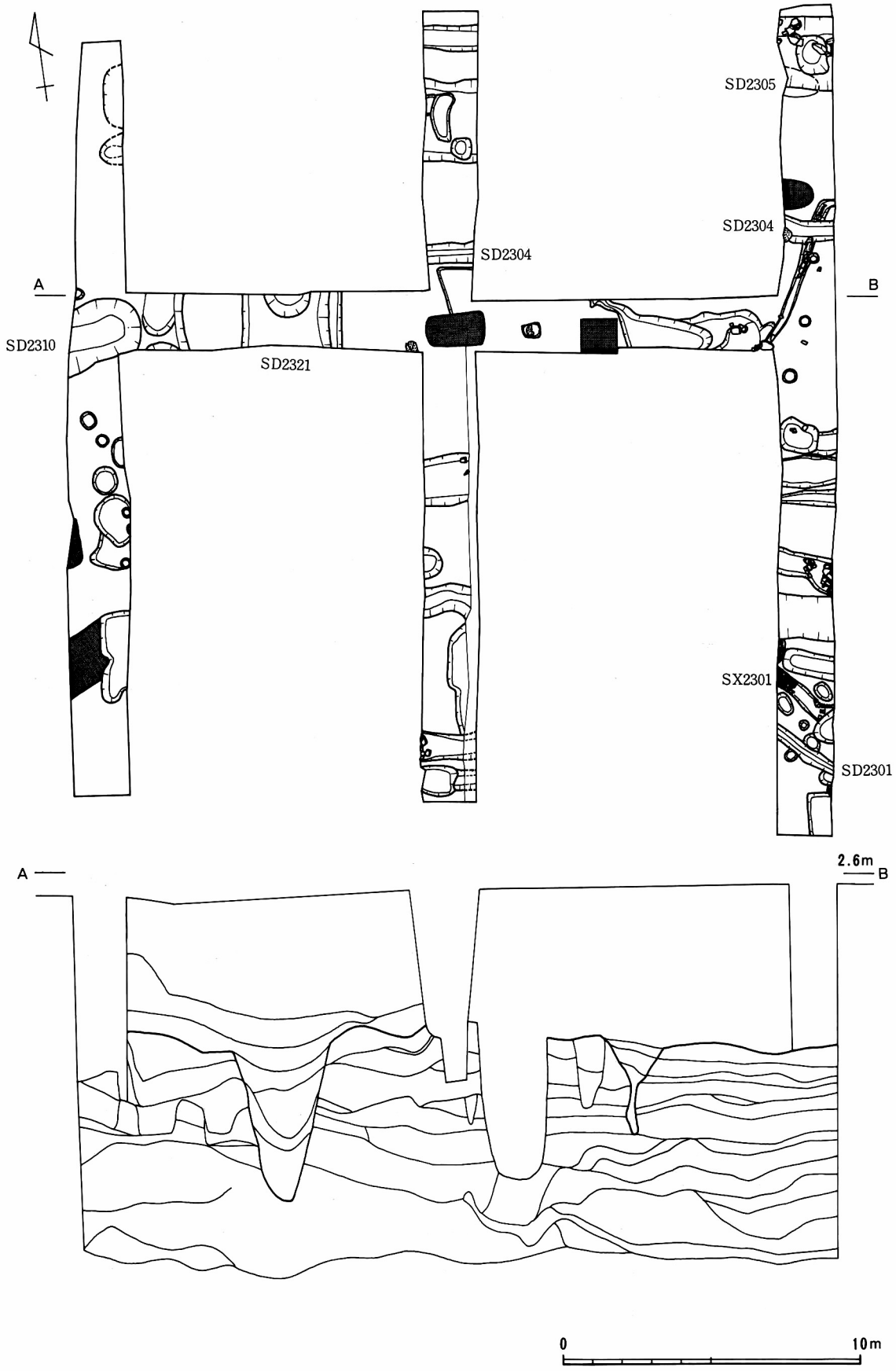
ＳＤ２３１５

Ｉｂトレンチ北端を東西方向に走る溝である。幅は2.4m以上、深さは60cmで、断面はＵ字形をなし、溝底に浅い凹みを持っている。溝の一部は後世の攪乱を受けている。２層上面で検出された。埋土は上下２層に分かれ、下層は有機物を多量に含む黒褐色シルト層である。遺物は主として上層から出土しており、下層からは建築部材と思われる木製品が出土している。

当調査区内では、これに続く溝は検出されなかった。Ⅱａトレンチ北端に溝状の遺構が検出されたが、非常に浅く、同一の溝とは考えられない。同様にⅢ



第41図　中ノ町C地区地区割図



第42図　中ノ町C地区平面図・断面図

aトレンチにおいても同溝は検出されていない。おそらくＳＤ２３１５は若干北にふられて調査区外に延びていると考えられる。遺構の性格は屋敷境溝と考えられる。出土遺物の示す年代は19世紀前半～幕末と考えられ、溝の廃絶時期を示しているのだろう。

ＳＫ２３１０　Ⅲｂトレンチと Ⅳｂトレンチの交差部付近に位置する土坑である。長さは2.4m以上、幅は1.9m、深さは45cmの規模で、平面の形態は東西方向に長居不整楕円形を呈する。断面の形状はU字形である。遺物は埋土の上層から出土しており、年代は18世紀前半から中葉のものである。遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。

ＳＤ２３０４　Ⅰａ・Ⅱａトレンチの南辺を東西に走る溝である。幅は65cm、深さは20cmで断面はU字形をなす。Ⅲトレンチでは検出されていないので、ＳＤ２３２１と接続する可能性が高い。東側に隣接するＢ地区のＳＤ２２０１に続く溝で、明治初期に用水路として使用されていたようである。

ＳＸ２３０１　Ⅰｂトレンチの南端に位置し、ＳＤ２３０１とほぼ平行して南東～北西方向に走る溝である。幅は50cm、深さは10cmと規模は小さい。溝内には幅20cm前後、厚さ1.5cmの平瓦を溝の方向に沿う形で並べている。この溝より北側には５cm前後の厚さの整地層が残っていた。盛土の土留め用の瓦を埋めるための溝であろうか。ＳＤ２３０１やＳＤ２３０２の土管と方向性が共通しており、何らかの建築物に伴うものかもしれない。

Ｄ地区

層　序　　Ｄ地区は断割り調査の結果、旧河道上にあたり、砂礫層とその上に堆積した灰黄白色のシルト層をベースとしている。

トレンチ調査にとどまったのと、攪乱が著しかったために、遺構の全容がつかめなかった。特に旧地表面はすべて破壊されていた。

遺　構

ＳＤ２４０１　４トレンチのほぼ全域にまたがり南北方向に流れる規模の大きな溝である。幅は２m以上、深さは１mで、断面の形状はU字形を呈している。溝底には、直径数cmの杭が50cm～１m間隔で打ち込まれていたが、土留めを目的としたものだろう。

本来武家屋敷の境界溝として区画の役割を果たすとともに、武家屋敷街全体の基幹排水路としての機能を有していたものと考えられる。明治時代以降に直径40cm、長さ70cmの土管が埋設され、溝自体は埋められている。

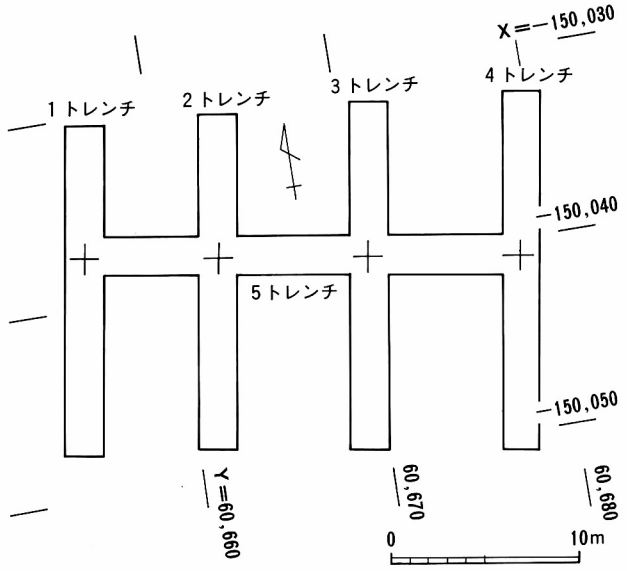
ＳＤ２４０２　３トレンチ北にある東西方向に流れる溝である。幅は1.5m、深さ20cmと規模は小さく、溝底は浅い平底となっている。排水用の溝であろうか、ＳＤ２４０１にそそぐものと考えてよいだろう。

ＳＤ２４０３　３トレンチの北で、ＳＤ２４０２の南側に隣接する溝である。幅は１ｍ、深さ10cmで、浅い平底となっている。北東－南西方向を向いているが、５トレンチには続いていない。あるいは土坑的なものかもしれない。

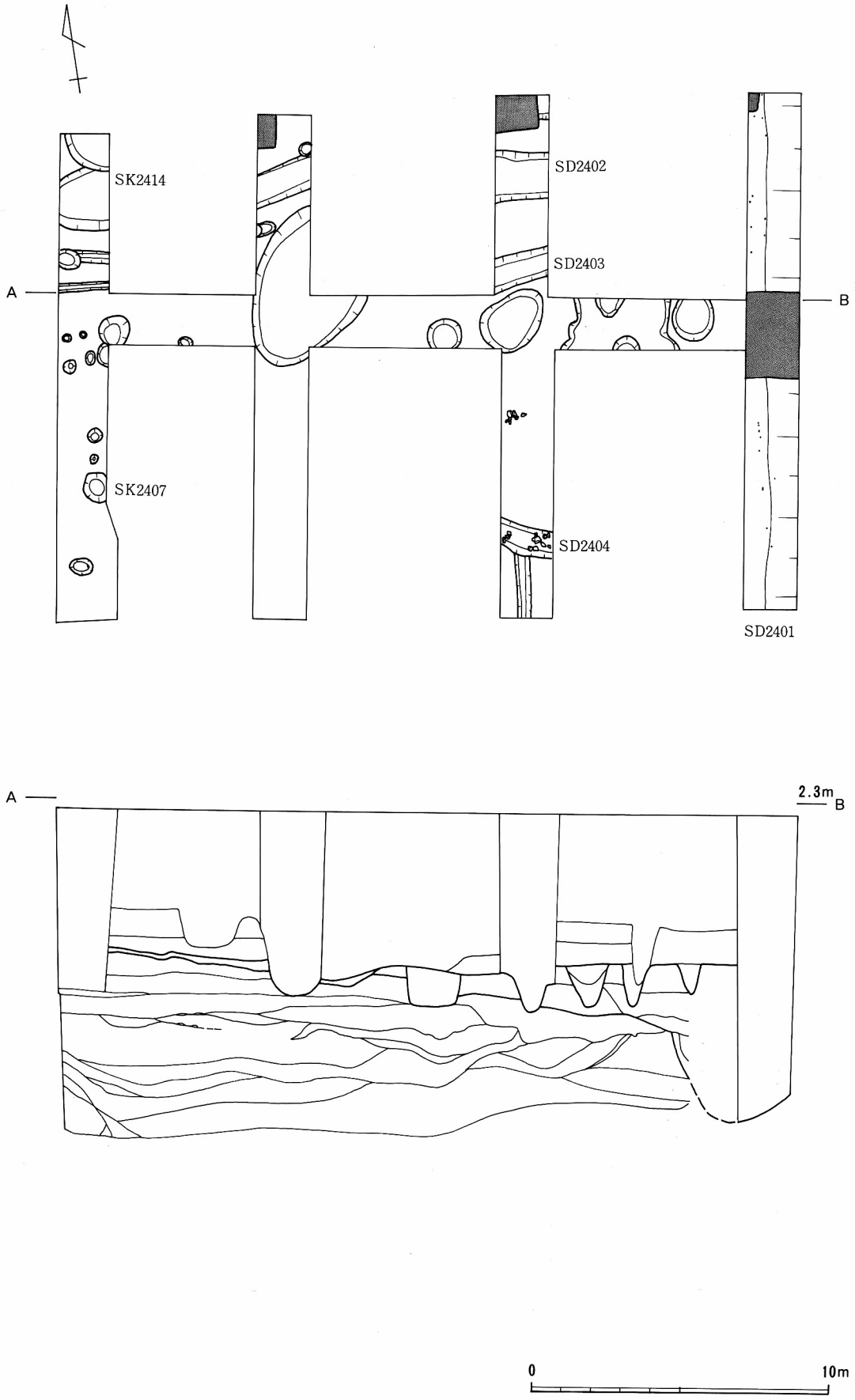
ＳＤ２４０４　３トレンチ南に位置する溝である。幅は１ｍ、深さは10cmで平底である。排水用の溝と考えられる。

ＳＫ２４１７　１トレンチ北端に位置する遺構である。トレンチ端に引っ掛かった状態で検出されたため遺構の全容は不明であるが、深さが60cmと深く、掘り込みが急であるため、土坑的な性格のものであろう。遺構は黒っぽいシルト層で埋まっており、直上には石列が検出さている。この石列は何らかの建物の基礎と考えられる。

ＳＫ２４０７　１トレンチ南に位置する土坑である。長さ１ｍ、幅80cmの不整円形をしており、深さは10cmである。



第43図　中ノ町D地区地区割図



第44図　中ノ町D地区平面図・断面図

Ⅵ　西中ノ町地区の調査

西中ノ町地区は、大手通り以西で西外堀までの地区を呼んでいる。現在の町名では大明石町１・２丁目となっており、旧町名についても、厳密な意味では西中ノ町だけでなく、大横町、上水町などを含んでいるが、ここでは代表的な町名をとって西中ノ町地区と呼んでおく。

全面調査を実施したのは、大手通りに面した旧神姫バス車庫跡地で、北はＪＲ（調査当時は国鉄）山陽本線、南は山陽電鉄本線に挟まれた場所である。調査時は自転車置き場が移設されていた。

この地区は、大手通りに面することもあって、かつては明石藩の家老屋敷が甍をならべていた地域でもある。

確認調査では、当該地に東西方向に長さ10m、幅2mのトレンチを10m間隔で6箇所設定し、遺構と地層の両面からの確認を行った。

全面調査は、この全域のうち調査可能な幅7m、長さ120mの範囲を対象とした。

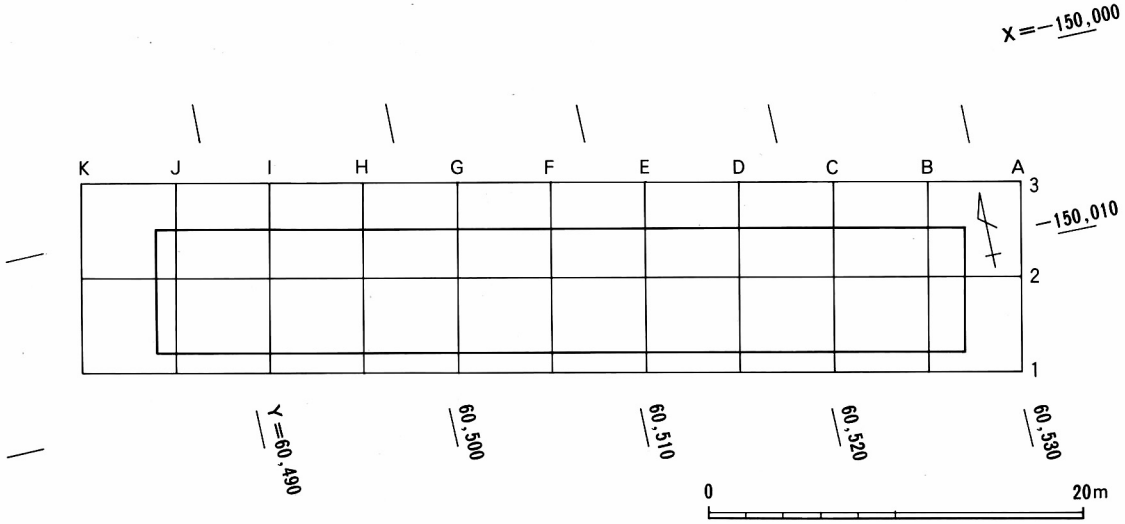
東側から１区、２区、３区の調査区名を与えた。

層　位

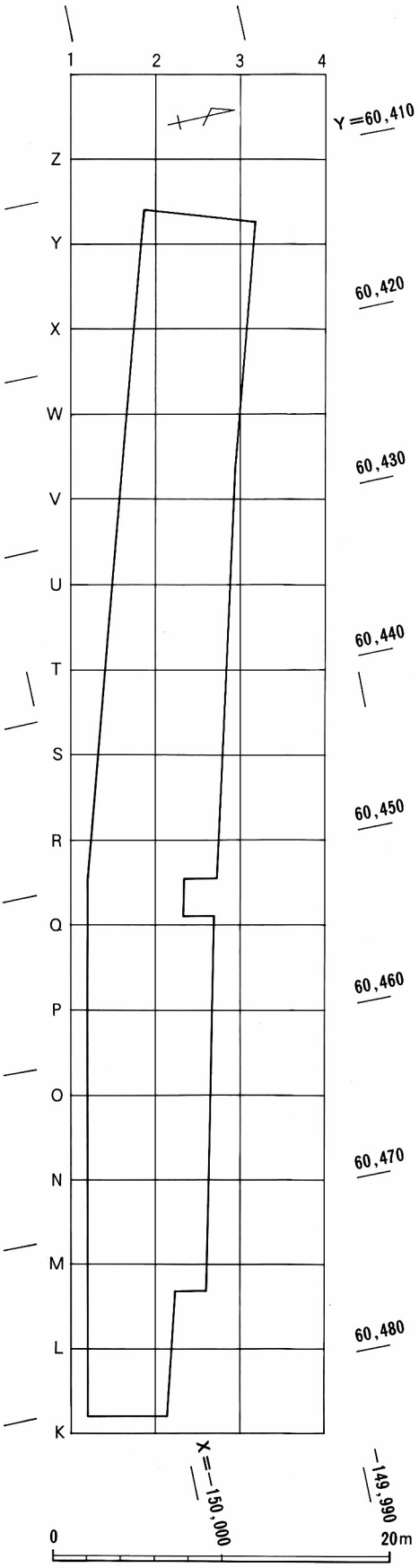
調査地は、バス車庫跡地ということもあって、厚いコンクリートが打たれていた。地表面の標高は東端部で3.7m、西端部で3.4mと30cmの高低差がある。この差はもっぱら盛土量の差といえる。

基本的な土層は、地表面のコンクリートを除去すると、直下には厚い盛土層や整地層がある。旧鉄道軌道敷であったためである。その下には耕作土層があって、これを除去すると、第１遺構面となる。１区での遺構面の標高は2.4m、３区西端では2.7mである。１区ではさらに20cm下に第２遺構面が存在するが、２・３区では基本的に１面である。

さらに下層には、東端から８mのところまで河川を埋める洪水砂が堆積している。ちょ



第45図　西中ノ町１区地区割図



第46図　西中ノ町２・３区地区割図

うど15m地点が攻撃面となっているので、この付近での川の流れは南からやや東向きにカーブしているようである。これ以西は自然堤防状の堆積を示している。

遺構

西中ノ町地区で検出された遺構には、溝、道路跡、建物跡、池、土坑、埋め甕、埋め桶がある。

屋敷境溝（区画溝）

発掘調査範囲は、旧西中ノ町の通りの北側に並ぶ武家屋敷街を東西に細長く横断している。そのため、武家屋敷を区画する溝が３条と道路と屋敷の間の溝とが確認できた。

ＳＤ３５０１

１区西半部にあり、南北方向の溝である。幅は○m、深さは○mあり、断面はU字形をしている。屋敷境溝と考えられる。黒っぽいシルト質の土で埋まっており、ほとんど水が流れない状態で埋まっている。溝中からは多量の遺物が出土しているが、17世紀前半と18世紀前半の２時期のものが混じっているので、本来は上下２層に分かれていたものを一緒に掘りあげてしまったようである。18世紀の半ばまでには埋まっており、さらに上に遺構が認められる。

遺物には、土器類の他、下駄や漆器などの木製品、獣骨などがあり、これらの大半は17世紀前半代のもののようである。

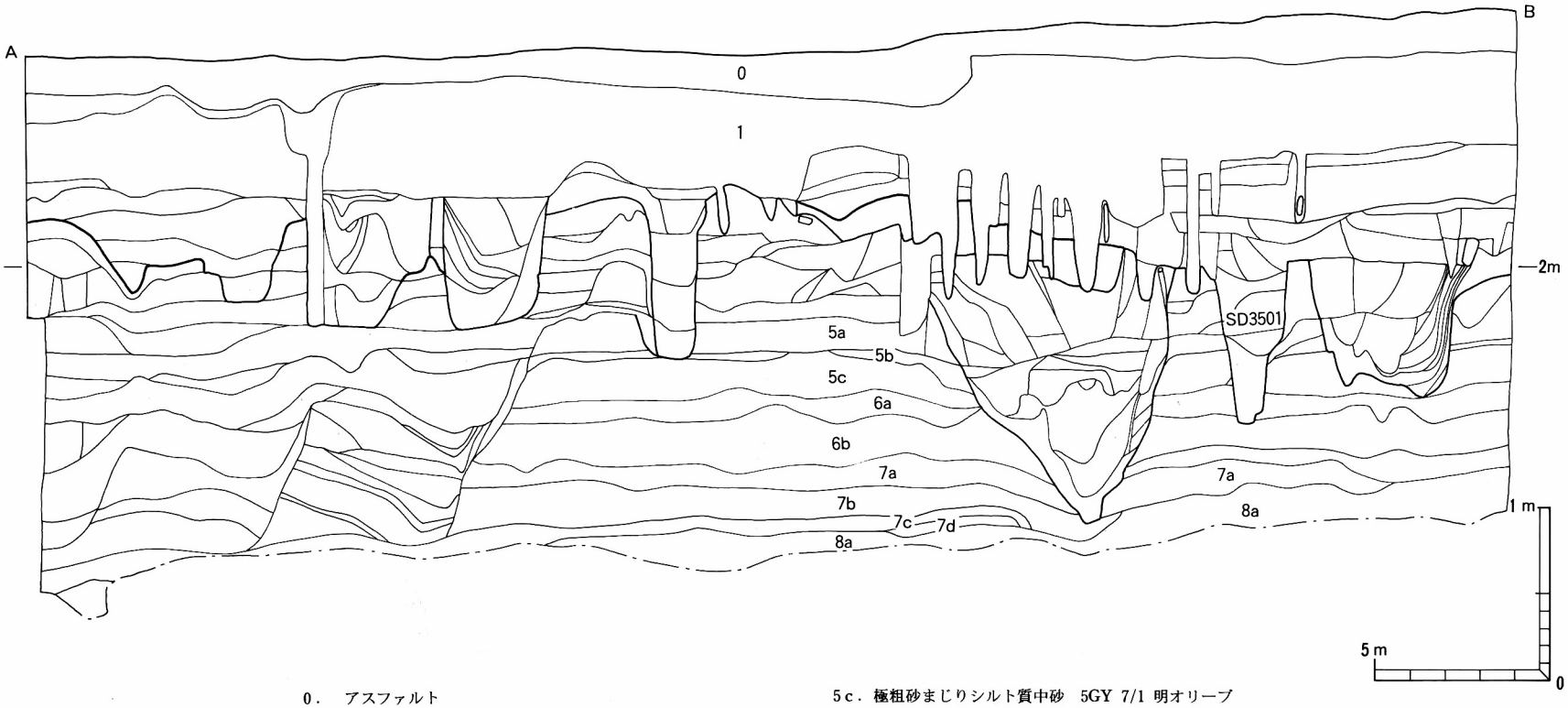
ＳＤ２５０１

２区の中央を南北に流れる溝である。幅は2.5m、深さは１mある。この溝も屋敷境の溝であるが、出土遺物からみると、幕末まで機能していたことが明らかである。

溝の東肩部に築地塀の基礎と考えられる石列が溝と平行して連なっている。

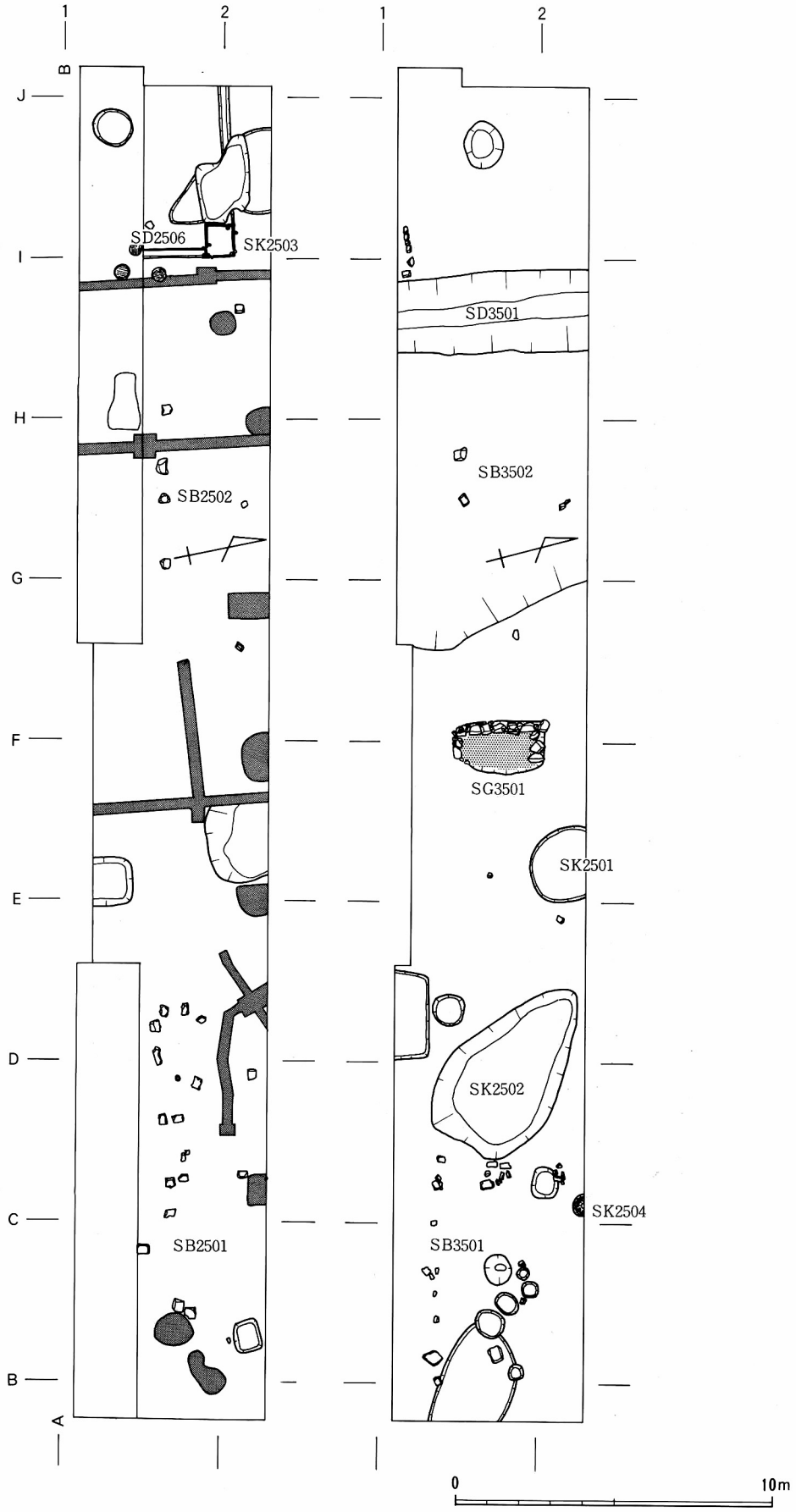
ＳＤ２５０２

２区と３区の境界部にある溝である。幅は4.5mだが

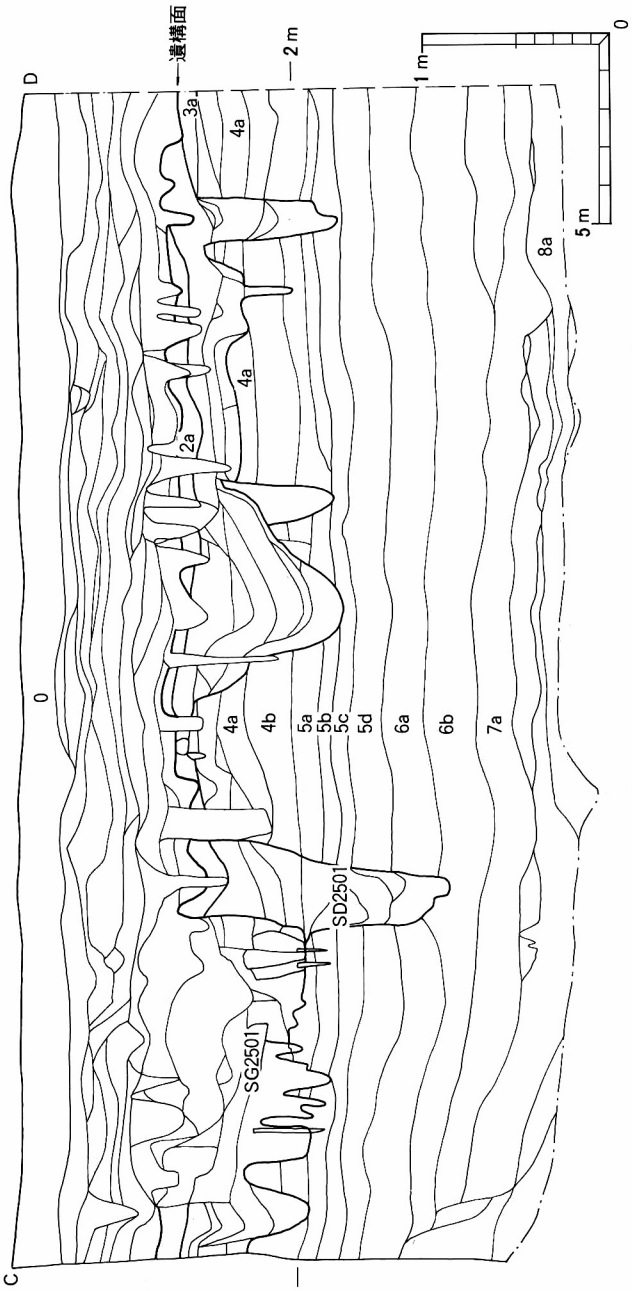


0．　アスファルト
1．　盛土・整地層
2a．シルト質細砂　10YR 1.7/1　黒
2b．シルト質細砂　5 Y 5/1 灰
3a．シルト質細砂　2.5Y 5/1　黄灰
4a．シルト質中砂　2.5Y 5/1　黄灰
5a．シルト質粘土　2.5Y 4/1　黄灰
5b．シルト質粘土　5Y 6/1 灰
5c．極粗砂まじりシルト質中砂　5GY 7/1 明オリーブ
6a．粗砂～細砂　2.5Y 6/1　黄灰
6b．中砂～極粗砂　2.5Y 6/1　黄灰
7a．シルトまじり中砂 7.5Y 5/1 灰
7b．細砂　10YR 5/1　灰
7c．シルト質細砂 2.5GY 5/1　オリーブ灰
7d．シルト質細砂 2.5GY 6/1　オリーブ灰
8a．シルト質極細砂　5Y 5/1 灰

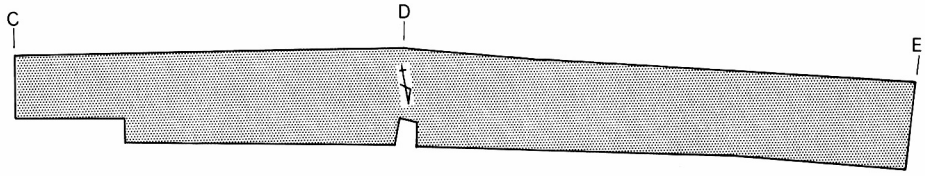
第47図　西中ノ町1区南壁断面図



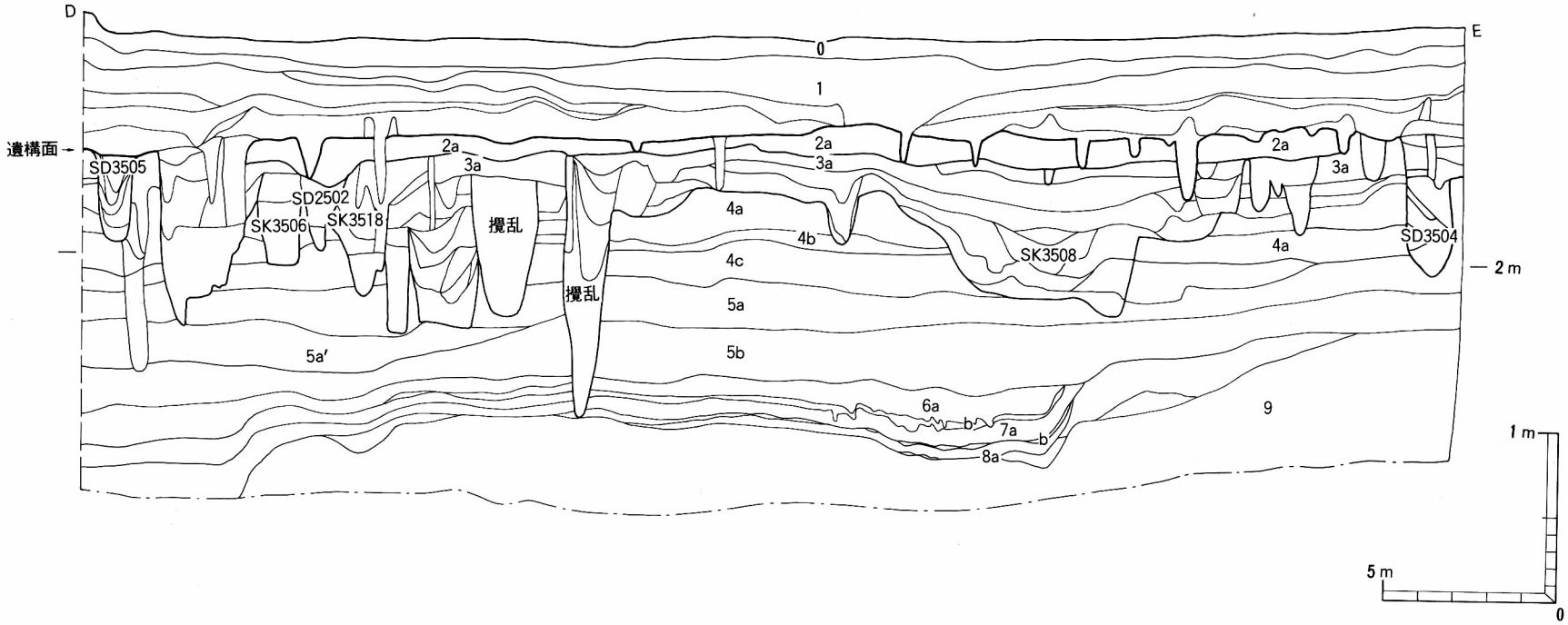
第48図　西中ノ町1区平面図(左:上層，右:下層)



0. 盛土
2a. シルト質細砂 5Y 3/1 オリーブ黒
3a. シルト質細砂 2.5Y 6/1 黄灰
4a. シルト質中砂 10Y 6/1 灰
4b. シルト質中砂 2.5Y 6/2 灰黄
5a. シルト質中砂 2.5Y 5/1 黄灰
5c. シルト質極細砂 2.5Y 7/1 灰白
5d. シルト質極細砂 2.5Y 7/1 灰白
6a. 粗粒シルト 7.5Y 6/1 灰
6b. 粗粒シルト 5Y 7/1 灰白
7a. シルト質極細砂 2.5Y 6/1 黄灰
8a. 粗粒シルト 2.5Y 6/1 黄灰

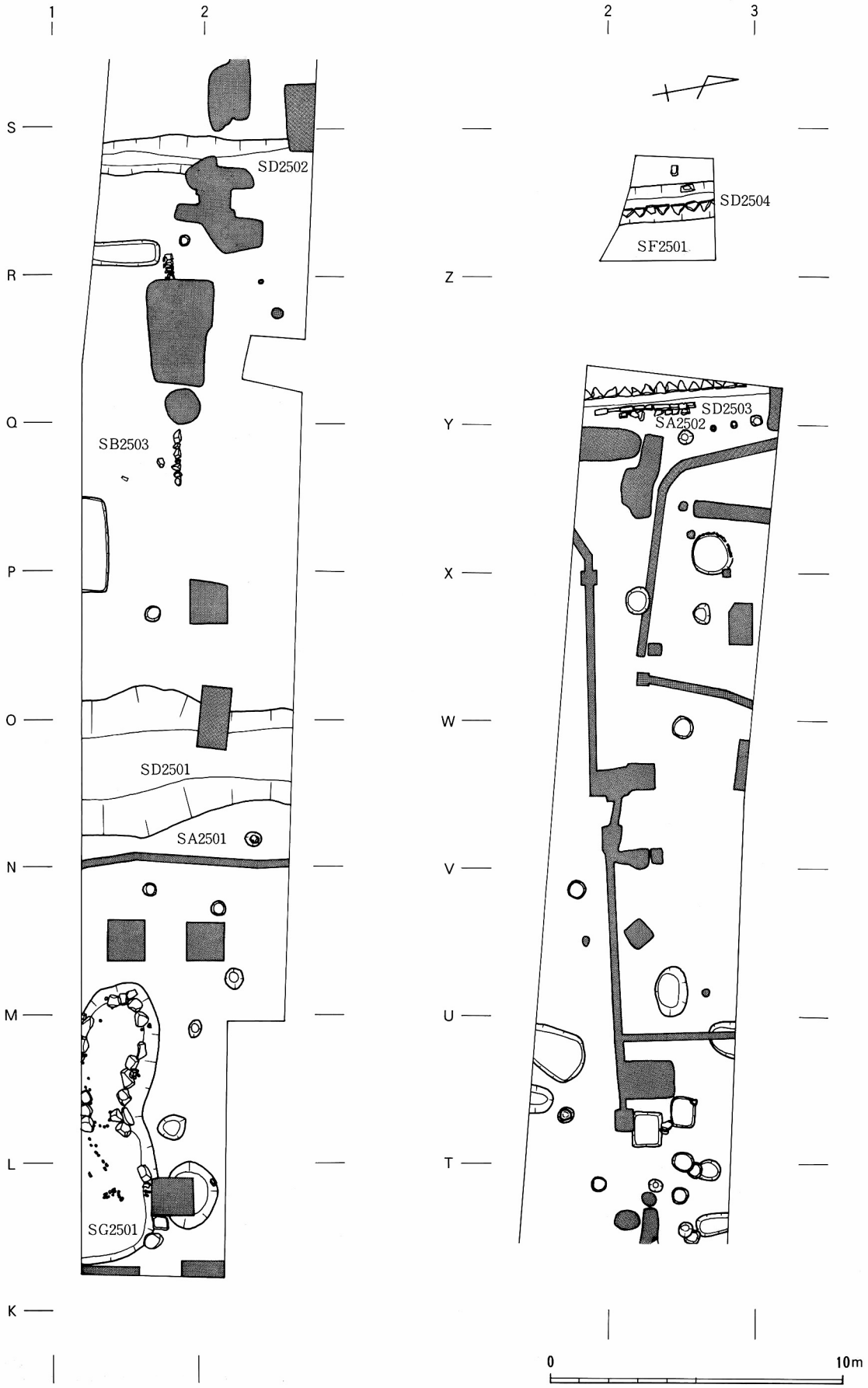


第49図　西中ノ町2区南壁断面図(C－D間)

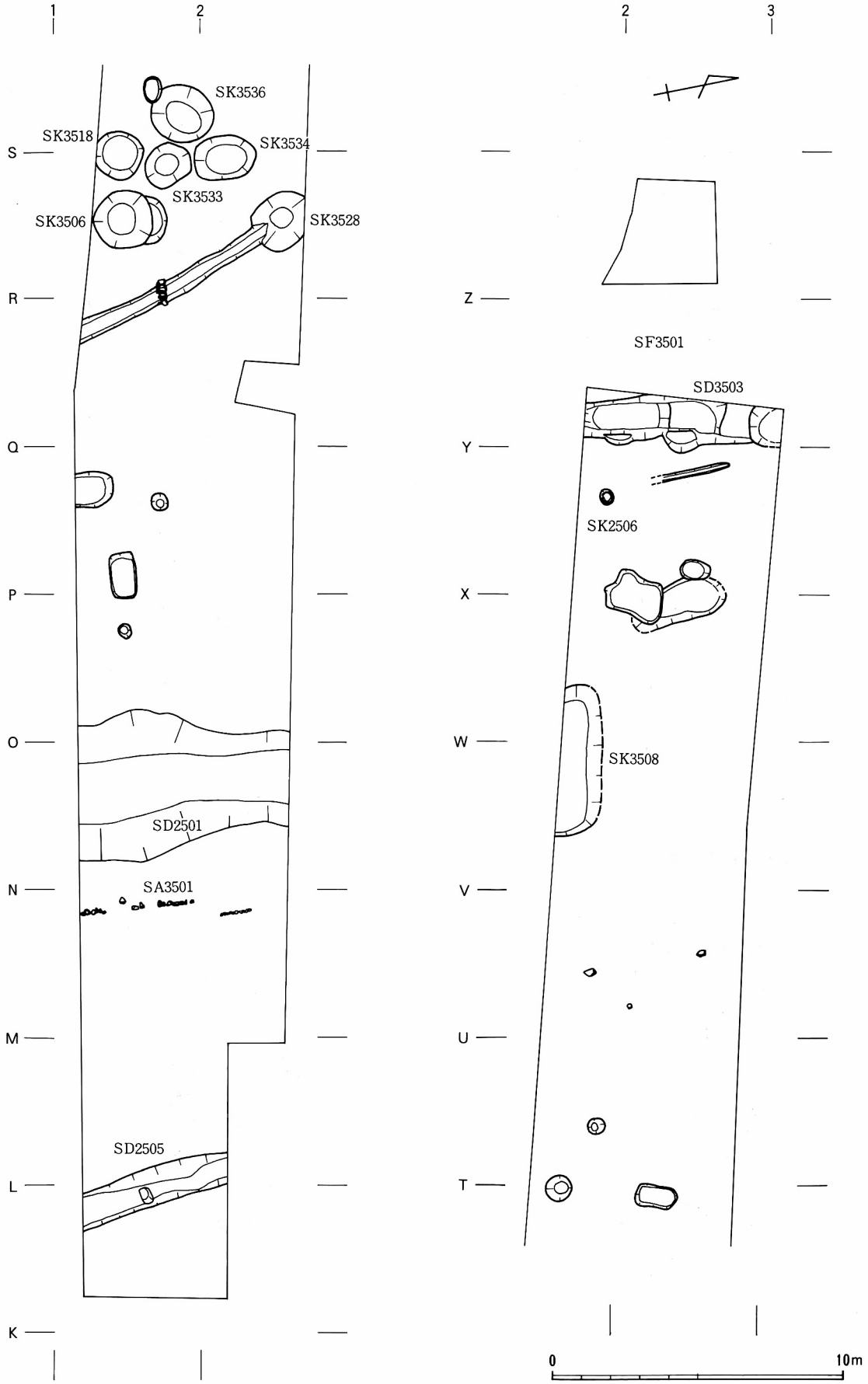


0．　アスファルト
1．　盛土
2a．シルト質極細砂 5Y 5/1 灰
3a．シルト質細砂 10YR 6/2 灰黄褐
4a．シルト質中砂 2.5Y 7/2 灰白
4b．シルト質細砂 2.5Y 7/2 灰白
4c．シルト質極細砂 2.5Y 7/1 灰白
5a．シルト質極細砂 2.5Y 7/1 灰白
5a′．粗粒シルト 7.5Y 6/1 灰
5b．粗粒シルト 5Y 7/1 灰白
6a．シルト質極細砂 2.5Y 7/1 灰白
6b．極細砂 5Y 7/1 灰白
7a．シルト質極細砂 2.5Y 6/1 黄灰
7b．極細砂 5Y 7/1 灰白
8a．シルト質極細砂 2.5Y 6/1 黄灰
9．　小礫・極粗砂 10YR 6/1 褐灰

第50図　西中ノ町3区南壁断面図(D－E間)



第51図　西中ノ町2・3区上層平面図

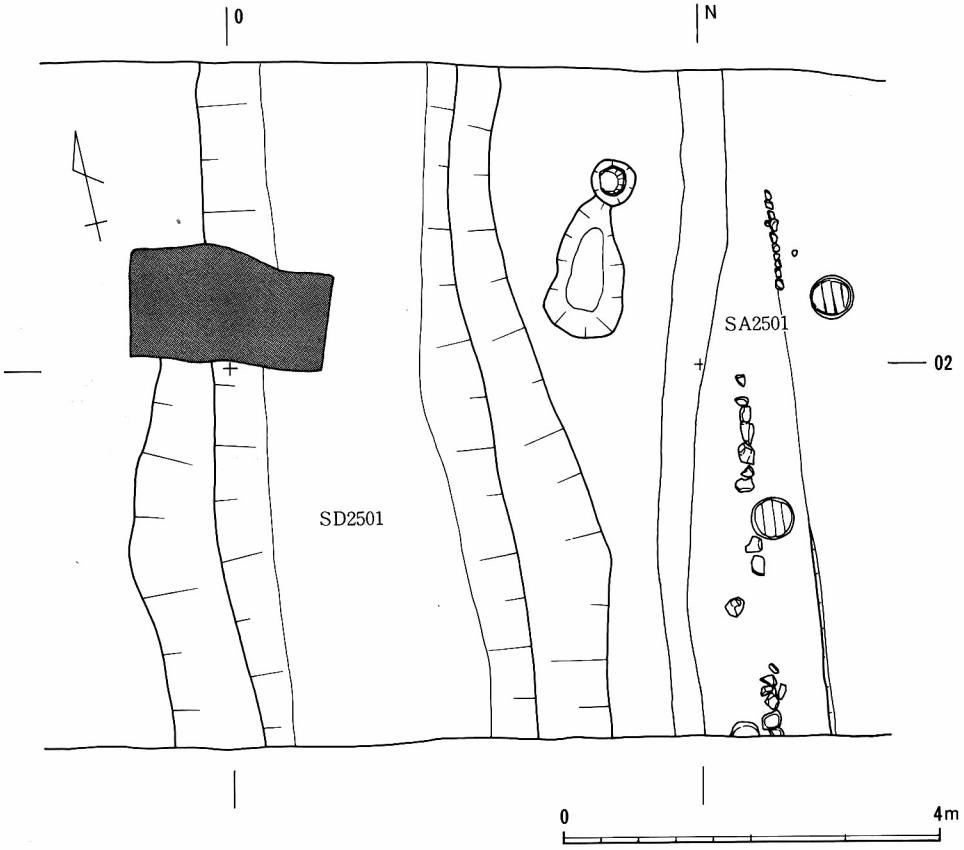


第52図　西中ノ町２・３区下層平面図

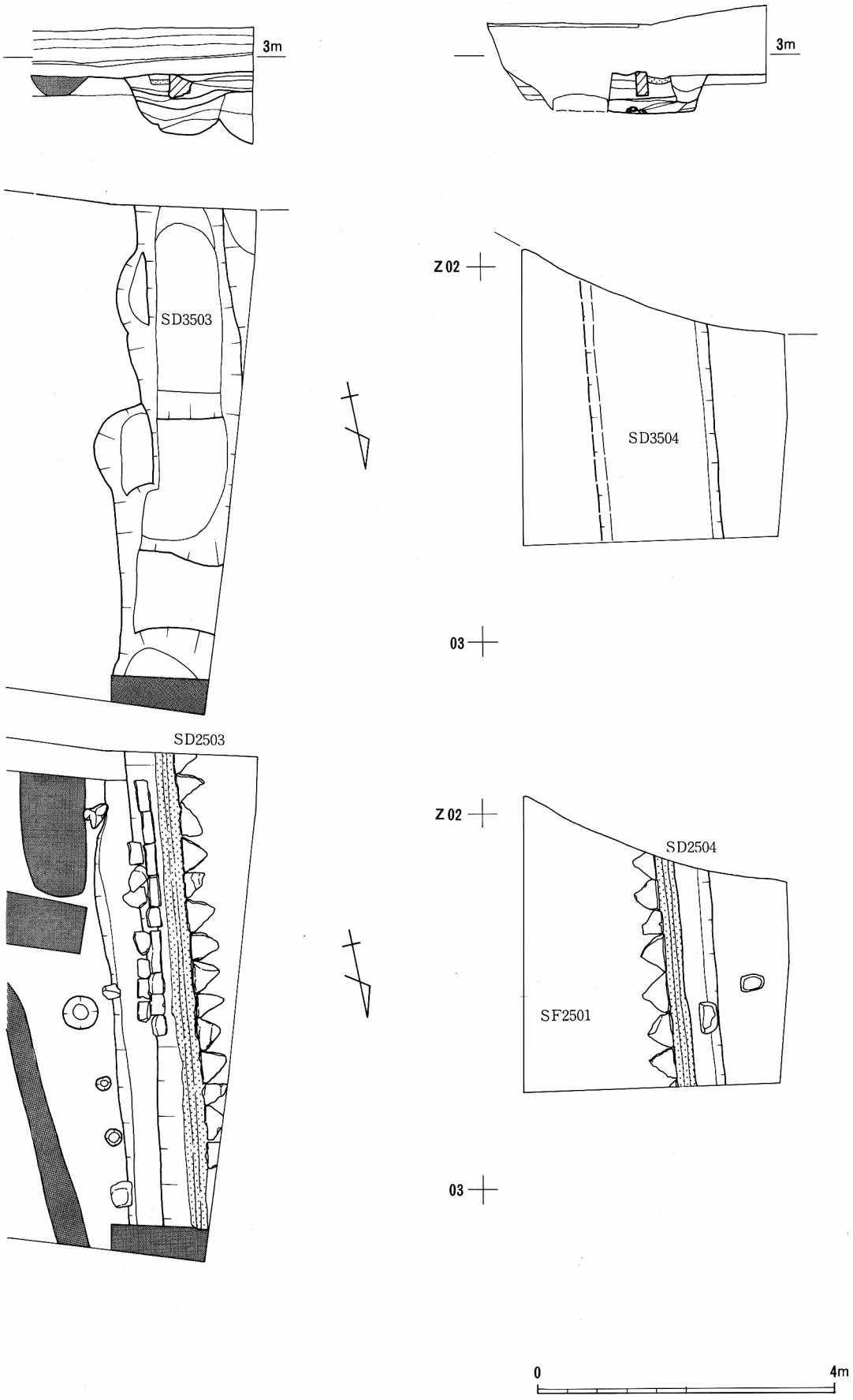
深さは60cmと浅い。この溝も屋敷境溝と考えられる。下層には円形土坑群があって、これらを切る形で掘られており、当初から存在した溝ではないようである。遺物の年代は幕末を示している。

ＳＤ２５０３　武家屋敷地と道路とを区画する溝である。幕末ころに改修されたようで、道路の路肩部を間知石で保護している。一方、武家屋敷側は長さ40cm、一辺15cm前後の四角柱状の石を８個並べ基礎としている。この部分の上に築地塀が築かれていたのだろう。当初の幅は不明であるが、間知石を置いた時点での幅は、35cm、深さは30cmである。さらに、後世に溝が埋まり、漆喰を塗り込めた浅い溝になっている。

ＳＤ３５０３　ＳＤ２５０３の下層に幅1.9mの溝状の遺構がみつかった。ただし、溝底の深さが60～95cmと一定でなく階段状をなしており、連続する土坑状のものにもみえる。また、道路側溝としては規模が大きく、その上に他の溝と異なって溝の埋土に湿性の堆積物が認められず、遺物も含んでいないなど、単なる側溝とはみなし難い。遺構の存在する部分の地盤が粘土質であるところから考えると、壁土等の粘土採掘坑の可能性も考えたい。



第53図　西中ノ町２区の屋敷境溝と塀跡



第54図　SF2501と側溝

ＳＤ２５０４　ＳＤ２５０３とは道路を挟んだ反対側である西側の側溝である。当初は幅70㎝、深さ50㎝ほどの素掘りの溝であったものが、江戸末期になって道路側を間知石で固め、最後にはほとんど溝を埋めて漆喰を塗り込めて浅く凹んだ溝としているところはＳＤ２５０３と同様である。

ＳＦ２５０１　ＳＤ２５０３とＳＤ２５０４とに挟まれた道路跡である。武家屋敷街を区画するもので、堀端の通りから西中ノ町へと続く南北道である。本来、南へ続いていたものが、山陽電鉄の敷設により分断されてしまい、機能しなくなってしまったものである。
道幅は6.3mで、およそ３間半にあたる。道路面上からは吹ごの羽口が出土している。

排水溝

ＳＤ２５０５　当初は２基の土坑と考えていたが、幅1.3㎝、深さ60㎝の溝とわかった。北西～南東方向をむいているが、ＳＧ２５０１に切られているため詳しいことは不明である。おそらくは排水溝であろう。

ＳＤ３５０５　ＳＫ３５２８から南東方向へ伸びる溝である。幅は55㎝と細いが、深さは75㎝あって、幅のわりに深い溝である。ＳＫ３５２８と同時に機能していたものであろうか。

ＳＤ２５０６　ＳＫ２５０６の木組遺構を角にして西と南へ伸びる溝である。幅は30㎝、深さは15㎝で断面の形状は箱形を成している。木は残存していないが、本来は板囲いの溝であった可能性が強い。

建物跡

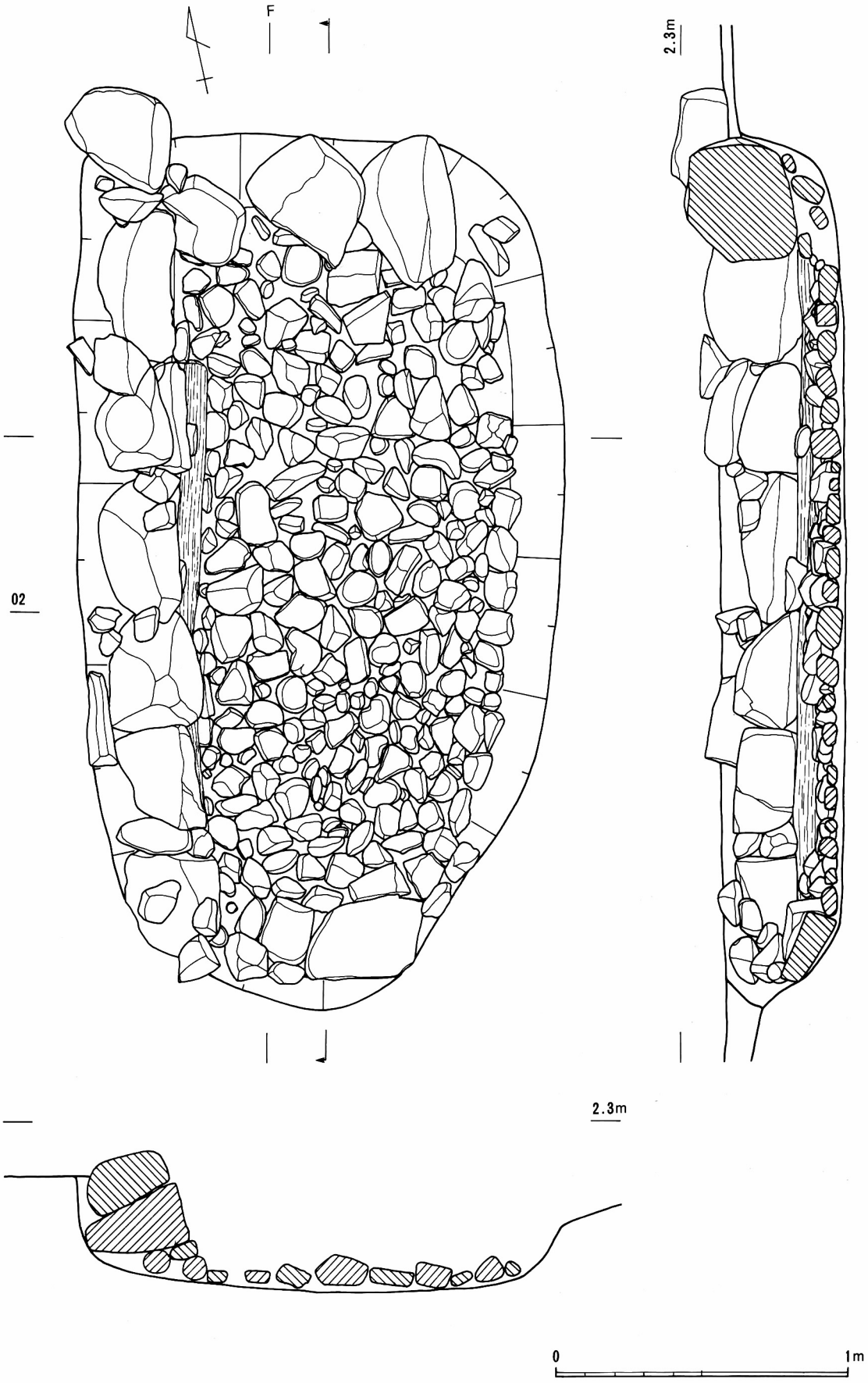
ＳＢ２５０１　１区の東部でやや面を整えた30㎝大の石が並んで出土した。礎石立ちの建物があったのだろう。調査区の幅がわずか6mと狭く、建物の形態・構造は明らかにできなかった。この建物跡に接する場所に伏甕が出土しており、水琴窟と考えられる。

ＳＢ３５０１　１区の東端部に、礎石列が検出されている。ＳＢ２５０１の下層に位置するが、ややずれている。礎石の並び方は整っており、南北方向に２間以上、東西方向に４間以上が確認できる。礎石列から判断される建物の向きは武家屋敷街の地割りに一致している。

ＳＢ２５０２　１区の西寄りの地区で検出された東西方向の礎石列である。比較的表面の平らな割石を用い、４個が確認された。建物に伴うものと考えられるが、詳しい構造は不明である。

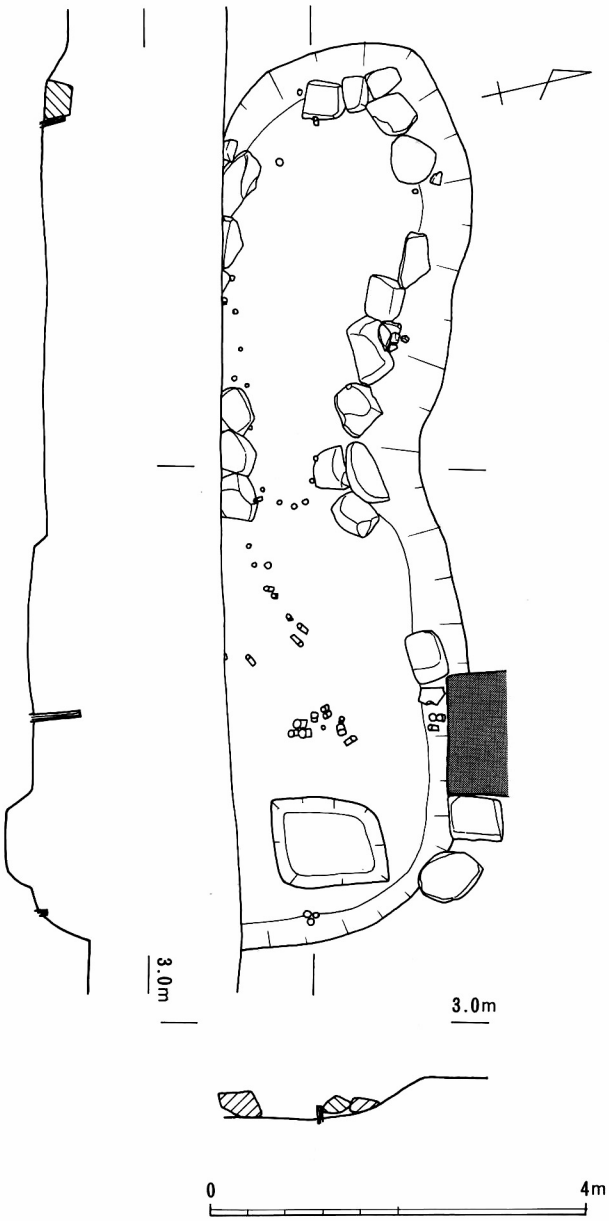
ＳＢ３５０２　ＳＢ２５０２の下層で石が３箇所で検出されている。建物に伴うものかどうかは不明だが、ＳＤ３５０１に面した場所に当たり、何らかの施設が存在していた可能性は高い。

ＳＢ２５０３　２区のＳＤ２５０１とＳＤ２５０２との間で検出された東西方向の石列である。30㎝以下の比較的小さめの自然石を使用して石の面を北側に合わせている。建物や塀に伴う基礎



第55図　SG3501

部分の石列であろう。



第56図　SG2501

SG3501

1区の第2遺構面で検出された池状遺構である。平面形は南北に長い長方形をくずしたような形態をとり、掘り方は南北2.9m、東西1.65m、深さ40cmである。この土坑の中に、東辺を除く3辺には30～50cm大の石を周囲にコの字形に並べ坑底の平坦面には10～20cm大の礫を隙間なく敷き詰めている。周囲の石は下部に直径8cmの丸木を置いて沈み込みを防いでいる。

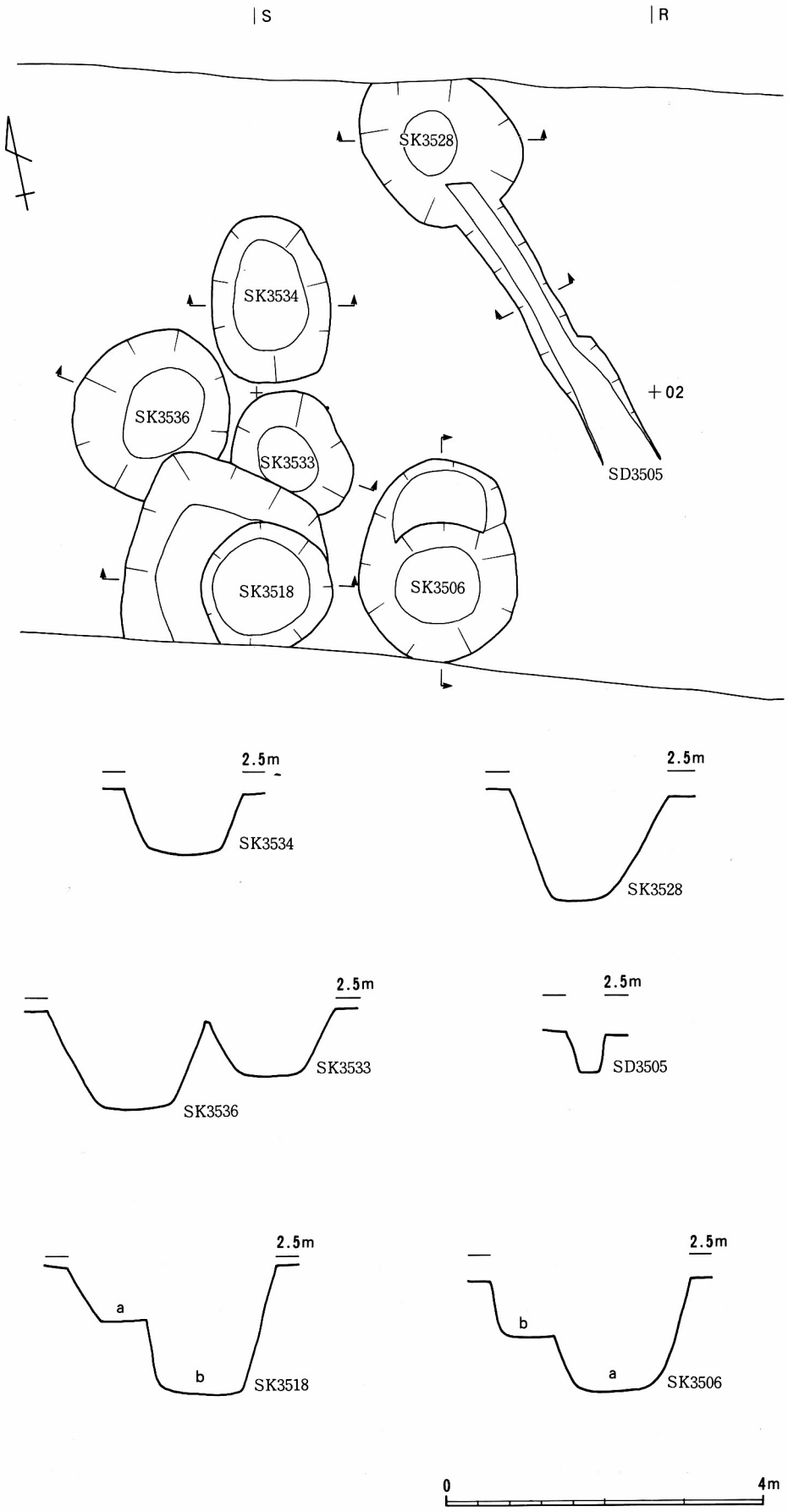
この遺構の性格はあきらかではないが、庭先で出土しているところからみると、一種の池泉と考えてよかろう。

SG2501

2区東端部で検出された池状遺構である。調査区外に続くため全容は不明だが、調査範囲内だけでみると、平面が東西に長く、瓢箪形をした掘り方を持ち、東西長9.6m、南北3m以上、深さは最も深い部分で60cmである。掘り込みの周囲には、30～50cm程度の自然石を並べてあり、石に沿うような形で杭が打ち込まれている。構造からみて庭園の池泉と考えてよかろう。明治初期まで機能していたようである。

SK2501　1区の中央付近で検出された直径2.3mの円形土坑である。土坑内からは多量の遺物が出土しているが、単なる廃棄用の土坑なのか、あるいは、井戸等の遺構なのかはわからなかった。

SK2502　平面6m×3.6mの不整形な土坑である。土坑内からは瓦を中心とした遺物が多量に出土している。遺構の性格は、おそらく建物の建て替え等に伴う廃棄用の土坑であると考えられる。



第57図　西中ノ町３区の円形土坑群

ＳＫ２５０４　建物跡ＳＢ３５０１の西端部付近に位置する。直径70cmの円形の穴を掘り、高さ50cm、口径41cmの丹波焼の甕（№945）を伏せて埋めてある。甕の底には焼成後にあけられた径２cmの孔がある。甕の内部の坑底には口径10.7cm、器高16.5cmの丹波焼の壺（№944）が置かれていた。壺の内部には７分目ほどまで砂が溜まっていた。

これらの特徴から、この遺構は手水鉢等から落ちた水滴を甕に流し込み、その反響する音を楽しむ、いわゆる水琴窟と考えられる。建物の庭先に面した位置にあることもこれを裏付けている。

ＳＫ２５０３　１辺がおよそ１ｍの方形の板囲いの土坑である。横に板を向けて２段に組んであり、南東部と北西部には幅30cmの溝が取りついている。特に南東部の溝の結合部は水の出し入れの為の堰状の構造を取っている。これらの特徴から、この遺構は水路に伴う枡と考えられる。

円形土坑群（ＳＫ３５０６・３５１８・３５３３・３５３４・３５３６）

ＳＫ３５０６　直径２ｍの平面円形の土坑である。深さ1.4mのもの（ａ）と深さ70cmの（ｂ）とが重なっており、本来は別の遺構として扱うべきだが、調査時に遺物の分別ができなかったため同一に扱う。出土遺物からみると、年代的には17世紀前半と18世紀前半の２時期に分かれているので、それぞれの年代を示すものと思われる。他の土坑の深さと比較すると（ａ）が似通っているのでより古い遺構と考えてよかろう。

遺物は土器類の出土はそれほど多くなかったが、獣骨がかなり出土しており、食用にしたと考えられるので、遺構の性格はゴミ廃棄土坑と考えられる。

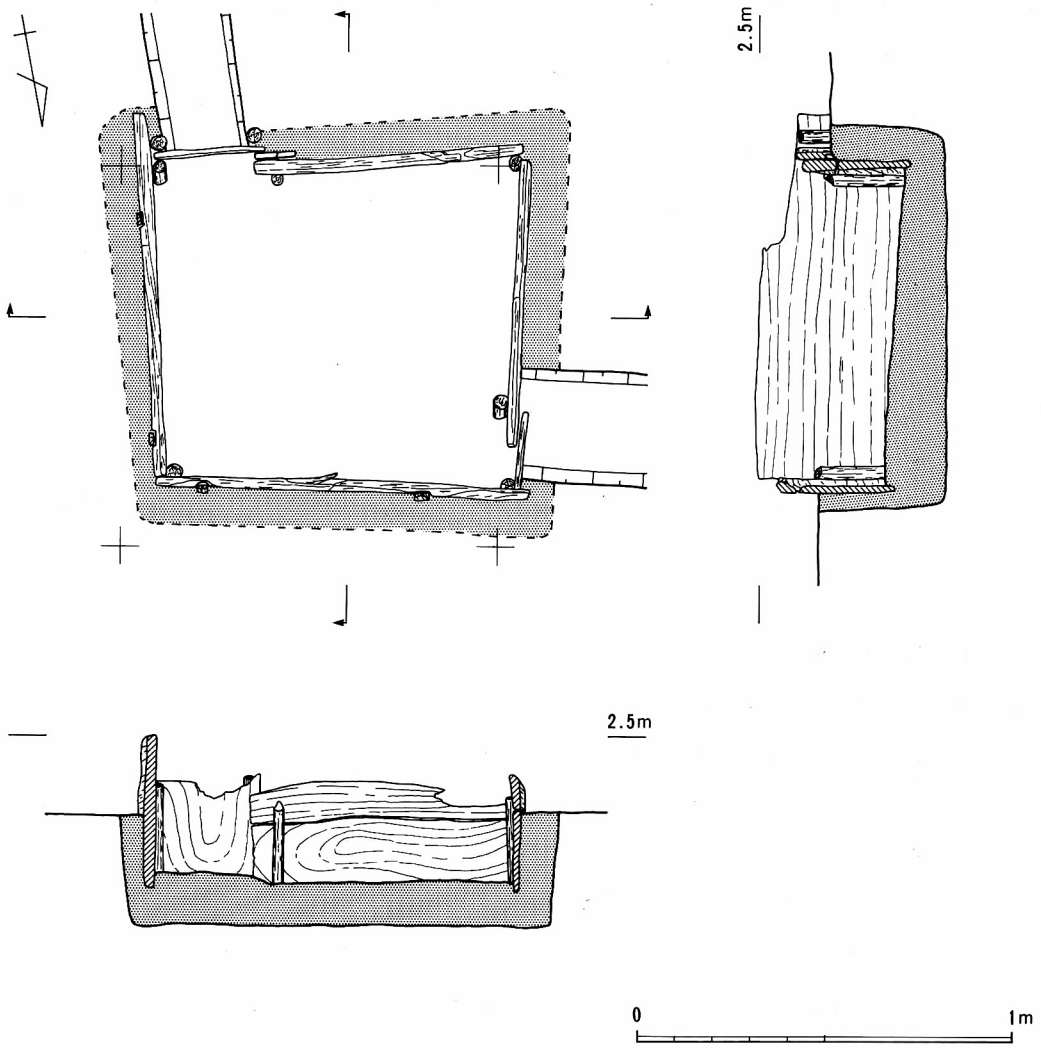
ＳＫ３５１８　この土坑もＳＫ３５０６と同様２基の土坑が重なったものである。年代的にもＳＫ３５０６と同じく２時期にまたがっている。径1.6mの整った円形のものが年代の新しい（ｂ）で径2.6mの不整形なものが年代の古い（ａ）である。

出土遺物もＳＫ３５０６に準じている。

ＳＫ３５２８　他の土坑とはやや離れた位置にある。径２ｍの円形で深さは1.3mである。この土坑の特徴は、南方向にＳＤ３５０５が接合していることである。また、出土遺物の傾向が他の円形土坑群とは異なるところから、性格の異なった土坑であるといえる。

ＳＫ３５３３　直径1.6mの円形土坑である。深さは70cmと浅いが、出土遺物の特徴は、ＳＫ３５０６に共通し獣骨が多数出土している。

ＳＫ３５３４　平面が2.1m×1.5mの楕円形をしている。以外は他の土坑と共通している。深さは75cmとやや浅めである。出土遺物は他の円形土坑に共通している。



第38図　中ノ町B地区平面図(上層)と西壁断面図

SK3536　直径2.1m、深さ80cmの円形土坑である。

これらの円形土坑群は、江戸初期に遡る廃棄土坑と考えられ、屋敷裏にまとまって掘られたものと考えられる。

SK3508　3区の南端部で検出された土坑である。全体の形状は不明だが、検出された範囲から推定すると、東西5.1m、南北1.5m以上の長方形の土坑であろう。深さは65cmで、土坑内下層には黒っぽいシルトが堆積しており、上層は人為的に埋められた土で満たされていた。

SK2523　円形土坑群の北部で見つかった直径50cmの小規模な土坑である。土坑内からはが出土しているが、遺構の性格は不明である。